

ISSN 1342-5935

IPSHU 研究報告シリーズ
研究報告 No.46

チェルノブイリ・旧プリピャチ住民への インタビュー記録

川野 徳幸
今中 哲二
竹内 高明
編



March, 2012

広島大学平和科学研究センター
730-0053 広島市中区東千田町1-1-89
TEL: 082-542-6975
FAX: 082-245-0585
E_mail: heiwa@hiroshima-u.ac.jp
URL: <http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa/>

IPSHU 研究報告シリーズ
研究報告 No.46

チェルノブイリ・旧プリピャチ住民への インタビュー記録

川野 徳幸

(広島大学平和科学研究センター)

今中 哲二

(京都大学原子炉実験所)

竹内 高明

(特定非営利活動法人チェルノブイリ救援・中部)

編

目次

| | |
|-------------------------|-----|
| はじめに | 1 |
| 対象・方法、そしてプリピャチについて | 3 |
| 凡例 | 7 |
| 附録 | 8 |
| ユーリヤ・ムィコライイヴナ・パヴレンコ | 11 |
| ガリーナ・ユーライヴナ・ドンドウコーヴァ | 28 |
| アナトーリイ・ダヴィドヴィチ・マズル | 51 |
| ゲンナージイ・イヴァーノヴィチ・ムズィチェンコ | 73 |
| ゲオルギー・イヴァノヴィチ・ラダトコ | 91 |
| アンナ・マーニ | 106 |
| オレクサンドル・シロタ | 116 |
| アンナ・ヴァセツカヤ | 138 |
| ナディーヤ・マカレーヴィチ | 152 |
| マリア・ロパーチナ | 170 |

はじめに

本報告書は、編者らが、2009年6月からはじめた旧プリピャチ住民へのインタビュー記録である。対象者は、プリピャチ在住時、原子力発電所に直接・間接的に関わってきた人たち、あるいはその子弟である。彼らの「声」は、チェルノブイリ原発事故被害の一端を素描するばかりではなく、チェルノブイリ原発事故とは一体何だったのか、原発事故はわれわれに何を問いかけているのか、という大きなテーマを考える際の重要な素材ともなるであろう。

本報告書では、原発事故時の様子、事故後の避難時の様子、避難先であるキエフでの偏見・差別、被災者としての補償、手当などの実態が語られ、再現される。同時に、本インタビューは、原発事故は結果として、そこに暮らす地域住民の社会基盤そのものを崩壊させるという現実を、あらためてわれわれに提示する¹。

2011年3月12日、福島第一原発事故が発生し、その結果、約78,000人の住民を対象とした警戒区域、そして、約10,500人を対象とした計画的避難区域がそれぞれ設定された²。これらに、特定避難勧奨地点居住の住民、自主的避難住民を加えれば、確実に10万人以上の原発周辺地域住民が避難生活を余儀なくされている。帰郷の時期については、明確なことは提示されていないが、今春には年間被曝線量に従い、現在の避難区域を3区域に再編することは決まっている。年間20ミリシーベルト以下の「避難指示解除準備区域」、20～50ミリシーベルトの「居住制限区域」、そして50ミリシーベルト以上の「長期帰還困難区域」がそれである。この再編は、中長期的に帰郷を果たせない住民が少なからずいることを政府が認めたことを示すと同時に、該当地域住民がこれまで長い時間をかけて構築してきた社会基盤を否応なしに放棄せざるを得ない現実をも提示している。そもそも原発事故による社会基盤の崩壊は、福島第一原発事故後に乱用された「想定外」だったのか。私たちはそういったことを想像すらできなかったのか。いやそうではなかろう。「想像しなかった」だけなのだ。今

¹ 詳しくは、拙稿「チェルノブイリ・旧プリピャチ住民への聞き取り調査備忘録」、『広島平和科学』33、広島大学平和科学研究センター、近刊、にまとめた。

² それぞれの対象住民の数は、2011年5月4日『朝日新聞』の発表。

から 26 年前のチェルノブイリ原発事故はそういった「想定外」の出来事をわれわれに既に提示していたからである。

本報告書は、チェルノブイリ原発事故とは何だったのかを考える際の重要な資料であるばかりではない。現在、避難生活を強いられた福島原発周辺地域住民の今後の福利厚生に少なからず寄与するはずである。また、そうあってほしいと編者一同願ひ、この報告書を世に問う。

対象・方法、そしてプリピャチについて

インタビューは、2009年6月11日・12日、2009年12月17日、2010年5月25日・26日に実施した。対象者は、1986年4月26日発生のチェルノブイリ原発事故当時、旧プリピャチ市に在住し、現在、キエフ市に居住する各世代10名である（写真1）。対象者選定は、旧プリピャチ市避難民の互助団体「ゼムリャキ」に依頼し、各インタビューも、キエフ市内ゼムリャキ・オフィスにて行った。インタビューは、基本的に、末尾に付した質問票の順に沿って質問を行った³。通訳は、ロシア語、ウクライナ語に精通するキエフ市在住の竹内高明氏が行った。対象者の基本情報をまとめたものが次表である。

チェルノブイリ原発事故により、原発周辺住民約11万6千人が避難を余儀なくされ、ウクライナ政府によると168の原発周辺の村々が消滅したという⁴。その一つが、プリピャチ市である。同市は、1970年にチェルノブイリ原子力発電所職員の居住地用として造られた町である（地図1）。当時の人口は約5万人で、市中心部から南に4キロの位置にチェルノブイリ原発があった。写真1・2が示すように高層住宅が建ち並び、当時としては近代的な町であった。そればかりではなく、当時の住民の話聞く限り、様々な文化・福祉施設が充実し、生活水準もかなり高かったようである⁵。インタビューから判断する限り、新たに建設された原発の町ということで、多くの若者が夢と希望を持って、入植したのではないかと思われる。

（以上、川野徳幸）

³ インタビューは本報告書編者が行ったが、2009年12月調査には福場美千子帝京大学病院医師が、2010年5月調査には小宮山道夫広島大学文書館准教授がそれぞれ加わった。

⁴ 現在も原発から30キロ圏内は立入禁止区域（zone）であり、かなりの高線量が認められる。例えば、われわれ調査班が、2009年6月チェルノブイリ原発を訪れた際、幾つかのホットスポットに遭遇した。地上1メートルの空間線量を簡易装置で測ると毎時約20マイクロシーベルトという高線量が測定された。

⁵ 同様の指摘が、2011年10月31日『朝日新聞』にもある。

写真1 インタビュー風景

2010年5月26日、ゼムリャキ・オフィスにて小宮山道夫氏撮影



写真2 旧プリピャチ市街 (2009年6月15日筆者撮影)



写真3 手前が旧プリピャチ市街、奥手にチェルノブイリ原発が見える
(2009年6月15日筆者撮影)



地図1 プリピャチ市とチェルノブイリ原発



表1 対象者基本情報 (以下、聞き取り順)

| 氏名 生年(調査時年齢) <事故当時年齢> | 性別 | 人種 | 宗教 | 最終学歴 | 事故後の居住略歴等 |
|--|----|------------|------------|----------------------------|--|
| ユーリヤ・ムイコ ライヴナ・パヴレン コ 1978年(30歳) <7歳> | 女性 | ウクラ イナ人 | キリス ト正教 | 大学経済 学部 | プリピャチ生、1978～86年4月:プリピ ャチ、事故後2週間:ヤブルニウカ村、 87年10月までポルタヴァ州(ウクライ ナ中部)、それ以降キエフ在住 |
| ガリーナ・ユーリイ ヴナ・ドンドウコー ヴァ 1945年(64歳) <41歳> | 女性 | ウクラ イナ人 | キリス ト正教 | キエフ教 育大学 | キエフ州イヴァンキウ地区生、1972年～ 86年:プリピャチ、事故後87年4月ま でチェルノブイリ市、87年4月以降キエ フ在住 |
| アナトーリイ・ダヴ イドヴィチ・マズル 1950年(59歳) <36歳> | 男性 | ウクラ イナ人 | キリス ト正教 | キエフ工 科大学 | ヴィーンヌイツャ州生、1974年5月～86 年:プリピャチ、その後92年頃まで事 故処理作業、97年以降キエフ在住 |
| ゲンナージイ・イヴ ァーノヴィチ・ムズ ィチェンコ 1963年(45歳) <23歳> | 男性 | ウクラ イナ人 | キリス ト正教 | 専門学校 (建設) | ドンバス生、1984年～86年:プリピャ チ、86年4月～89年1月:事故処理作 業、その後、キエフ在住 |
| ゲオルギー・イヴァ ノヴィチ・ラダトコ 1943年(66歳) <43歳> | 男性 | ウクラ イナ人 | キリス ト正教 | ハルキウ 工科大学 | ポルタヴァ州、1974年～86年:プリピ ャチ、86年～89年:事故処理、事故後 キエフ在住 |
| アンナ・マーニ 1970年(39歳) <15歳> | 女性 | ウクラ イナ人 | キリス ト正教 | キエフ工 科大学 | ベラルーシ・ペロオジョールスク生ま れ、1975年～86年4月:プリピャチ、 事故後86年8月まで祖母のいるチェル ニヒウ州に避難、同年9月以降キエフ在 住 |
| オレクサンドル・シ ロタ 1976年(34歳) <9歳> | 男性 | ウクラ イナ人 | キリス ト正教 | キエフ国 立大学 | ヘルソン州生、1981年～86年、事故後 キエフ→ミンスク郊外→オデッサ州(サ マーキャンブ)、86年9月末以降キエフ 在住 |
| アンナ・ヴァセツカ ヤ 1960年(50歳) <26歳> | 女性 | ロシア 人 | キリス ト正教 | 専門学校 (建設) | ロシア生、1980年～86年:プリピャチ、 事故後キエフ→モスクワ→ウクライ ナ・エネルギーゴダール(ザポリヅジャ原 発)、86年11月以降キエフ在住 |
| ナディーヤ・マカレ ーヴィチ 1955年(54歳) <31歳> | 女性 | ウクラ イナ人 | キリス ト正教 | 専門学校 (医療) 准医師 | リヴィウ州生、1980年～86年:プリピ ャチ、事故後キエフ州イヴァンキウ地区 →リヴィウ、86年11月以降キエフ在住 |
| マリア・ロパーチナ 1938年(72歳) <48歳> | 女性 | ロシア 人 | キリス ト正教 | クラスノ ヤルヤル スク教育 大学 | ロシア・アスキス生、1970年～86年: プリピャチ、事故後ボリスケ→ヴォロネ ーヅ(ロシア)→パヴロフスク、86年 12月以降キエフ在住 |

凡例

- (1) インタビューは、基本的に、末尾に付した質問票の順に従って質問した。編者らによる日本語の質問を竹内高明がロシア語あるいはウクライナ語に訳した。
- (2) 回答者は、ロシア語あるいはウクライナ語でインタビューに答え、それを竹内が通訳した。その内容をテープ起こししたものが、本インタビュー記録である。
- (3) テープ起こしした原稿に対して、編者が教校を重ね、原文の文意を損なわない範囲で加筆・修正を行った。その段階で注記等の解説を加えた。
- (4) ウクライナの人名・地名についてはウクライナ語発音に、ロシアの人名・地名についてはロシア語発音に、それぞれ従って表記した。また、英語アルファベットのV音は「ヴ」と表記した。但し、「キエフ」、「チェルノブイリ」のようにすでに日本語表記が固定化しているものを除いた。
- (5) 2010年5月25日以降の原稿については、インタビュー冒頭の調査趣旨と録音についての承諾部分を割愛した。
- (6) 本インタビュー記録の公開にあたっては、回答者本人の了解を得ると共に、「ゼムリャキ」の了承を得た。

謝辞

本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C) No. 20510232、基盤研究(C) No. 20402001、基盤研究(B) No. 23310183 および基盤研究(A) No. 21249041 による成果の一部である。

附録 チェルノブイリ原発事故被災者聞き取り調査質問項目（抜粋）

質問1. 基本事項

- (1) 氏名
- (2) 性別 男 女
- (3) 生年月日（年齢） _____ 年 _____ 月 _____ 日生（ _____ ）
- (4) 人種 ウクライナ人、ロシア人、その他 < _____ >
- (5) 宗教
- (6) 最終学歴
- (7) 出身地・居住歴・職歴（誕生から現在まで）

| 期 間 | 所在地（都市名） | 職業 |
|-----|----------|----|
| | | |
| | | |

*1986年4月26日原発事故発生

(8) プリピャチ市を離れるときの家族構成及び現況

| 続柄 | 生年 | 現 況 | | |
|----|----|-----|---------|----|
| | | 生存 | 死亡（死亡年） | 死因 |
| 本人 | | | | |
| | | | | |
| | | | | |

質問2. 以下の質問について、1986年4月26日以前のプリピャチ時代と現在の両方についてそれぞれお答え下さい。

1. 自宅の形態（アパートの広さなどを含む）
2. 食事の内容
3. 仕事の内容
4. 世帯収入（一ヶ月）
 プリピャチ時代：その額は十分だったか。当時の平均的月収は幾らぐらいか。十分だったか。
 現在：（その額は十分か。現在の平均的月収は幾らぐらいか。生活はどうか。）
5. 生活上の不満があるか。 6. 思い描いていた将来設計
7. 特に苦勞と考えること（不安だったこと、不安なこと）
8. 健康状態
9. 健康状態に不安を感じることもあるか
 プリピャチ時代： 1. いつも感じる 2. ときどき感じる 3. 感じない
 現在： 1. いつも感じる 2. ときどき感じる 3. 感じない
 1. あるいは2. と回答した場合→
 それは、チェルノブイリ原発事故による放射線被曝が影響していると思うか。

質問3. 以下の質問にお答え下さい。おもに現在についてのことです。

1. これまでの自身の歴史を振り返って、原発事故のせいで自分の人生が狂ってしまったという思いがあるか。
2. 事故に拘わる体験を誰かに話して聞かせたことはあるか。それは誰か。また、それを誰かに伝えなければならないと思うか。それは誰か。
3. 今一番望んでいることは何か。
4. 原子力発電についてどう思うか。原子力というエネルギーは私達人類に必要だと思うか。何故そう思うか。
5. 避難時の体験、または避難後の辛い体験など、夢で見たり、日常生活の中で思い出す

ことがあるか。(1. よくある 2. ときどきある 3. ない)

「ある」方におたずねします。その体験内容といつ思い出すのか、をお教え下さい。

6. プリピャチを避難後、子供が生まれましたか。「はい」の方→

出産や、子や孫の健康に不安を感じたことがある。(1. ある 2. ない)

7. チェルノブイリ原発事故被災者であることで差別や偏見を受けたことがある。

(1. ある 2. ない)

ある場合、それはどんな時だったか。

※これでアンケートの質問はすべて終わりです。ご協力いただき、ありがとうございました。

以下のテーマに沿って、ご自由にお話し下さい。一つだけでも、いずれもでもかまいません。

1. ご自身の体験の中で、今も忘れられないこと
2. 原発事故で亡くなった方々や次世代へのメッセージ
3. その他、訴えたいことや知らせたいことなど

ユーリヤ・ムィコライイヴナ・パヴレンコ氏（女性）

実施日：2009年6月11日

○川野 それでは、一人目の聞き取りを始めたいと思います。

これから聞き取り調査を始めます。私は広島大学から来ました川野と言います。京都大学の今中先生が、チェルノブイリ原発事故による放射線の影響をずっと調べられていて、今回、一緒にチェルノブイリの研究をやらないかというお誘いを受けて、こうやって今日、皆さんから聞き取りをするためにゼムリヤキに来ました。私は放射線の専門家ではないのですが、社会学の視点から原発事故を考えてみたいと思っています。

非常に大きなテーマなのですが、チェルノブイリ原発事故というのは、一体何だったのかというのを、われわれは考えたいというふうに思っています。そのために、1986年、プリピャチの町を離れられて新しい生活を余儀なくされた皆さんの、移住の前と後を比べることによって、チェルノブイリ事故がいったい何だったのかというのを考えてみたいと思います。1986年4月を起点とし、その前の生活と、その後の生活を比較しながら、いろいろお話を聞きたいと思っています。

今日はお忙しいなかお越しいただき、ありがとうございます。2時間か3時間かお付き合いいただければと思います。

それでは、基本的なことからお聞きします。まず氏名、性別、生年、人種、宗教、そして最終学歴。この6点を、教えていただければと思います。

○ユーリヤ ユーリヤ・ムィコライイヴナ・パヴレンコ。女性。1978年7月6日生まれ、ウクライナ人です。キリスト教です。最終学歴は大学の経済。

○川野 教育学部の経済ですか。

○ユーリヤ 教育大学の経済学部を卒業しましたが、現在は無職です。プリピャチ市で1978年に生まれました。

○川野 では最終学歴は大学の経済学部ということですね。

○ユーリヤ はい。

○川野 では質問項目の7番です。出身地、居住歴、職歴を、年単位で結構で

すので、大まかなところを教えていただければと思います。

○ユーリヤ 1978年に生まれて、1986年の事故のときまでプリピャチ市に住んでいました。そのときは学校の生徒ですね。事故直後2週間ぐらいの移住先は、ヤブルニウカという村。そこに最初は疎開しました。そのときは子どもでしたので、よく覚えていないのですが、2週間ぐらいヤブルニウカ村にいまして、この事故は大きな事故で、おそらく戻れないだろうという話になったので、私の家族は母方の実家であるポルタヴァ州のほうに移動しました。

○川野 2週間後にポルタヴァ州のほうに移られたんですね。

○ユーリヤ はい、そうです。

○川野 ポルタヴァ州というのはウクライナですか。

○通訳 ウクライナですね。中部です。

○川野 そこにどのぐらい滞在されましたか。

○ユーリヤ そして1987年10月まで、母方の実家であるポルタヴァ州にいました。1987年10月、母親がキエフでアパートの配給を受けましたので、そのときにポルタヴァからキエフに移りました。1987年10月以降は、ずっとキエフに住んでおります。

○川野 1978年にお生まれだということは、現在30歳ですね。わかりました。

大学を卒業されてからは仕事をされましたか。

○ユーリヤ 大学は経済学部を出たのですが、卒業後にしていた仕事というのは縫製というか、服の仕立ての仕事ですね。服の仕立屋さんというか、そういう作業所で服をつくる仕事をしていたのですが、子どもが産まれて、結構、仕事もきつかったんで、その仕事を辞めて現在に至っています。

○川野 仕事は何年されたんですか。

○ユーリヤ 12年間働きました。この服を縫う仕事は、卒業後、12年していたのですが、勤め先はいくつか変わりました。最後の職場で働いたのは2年ぐらいでした。

○川野 ときどき写真を撮りますけれども、あまり気にしないでください。調査の様子を撮りたいだけです。

○ユーリヤ 私は写真写りが悪いので。

○川野 いえいえ(笑)。

それでは質問項目 8 番に移ります。プリピャチを離れるときの家族構成、今の家族構成、それぞれの現況を教えてください。

○ユーリヤ 事故当時、父母と兄がおりました。兄は 1974 年生まれ、母は 1951 年生まれ。父については自信がないんです。なぜかという、事故後両親が離婚して会っておりませんので。

○川野 わかりました。では、お父さまとは、その後、全然会っていないということですね。

○ユーリヤ 離婚後は会っておりません。

○川野 いま、お母さまはどうされていますか。

○ユーリヤ いま現在、母も同居しています。3DK のアパートで、母と私と私の子どもと暮らしています。私は離婚していて夫はいません。それに兄と兄の奥さん、彼らの子どもも一緒に暮らしています。三世帯が一緒に暮らしていません。

○川野 わかりました。これまでは基本的な状況をお聞かせいただいたのですが、次からはいくつか、より具体的なことをお聞きいたします。二つの大きな時代区分でお考えいただき、お答えいただきたいのです。一つは 1986 年 4 月プリピャチから離れる前の話、そしてもう一つは現在の話です。

1986 年当時は 8 歳ということになりますね。

○ユーリヤ 1978 年 7 月生まれなので、厳密に言うと 7 歳です。

○川野 お聞きする前に一つ確認なのですが、原発事故があり、プリピャチを退去させられる際には、かなり混乱があったと思うのですが、そういったときの様子は鮮明に覚えていますか。

○ユーリヤ 事故の日、プリピャチでは、数日間の避難だということでラジオ放送があつて、両親から一番持って行きたいものだけ持って行くようにと言われました。小雨が降っていたりして、それでも兄と外で遊んでいたという記憶があります。

しかし、その後、ずっと兄と、あのとき何があったかというのをお互いに話し合っているのです。兄の記憶も混同しているかもしれません。

○川野 なるほど。

○ユーリヤ その後はバスに乗せられて移動しました。

○川野 わかりました。では、プリピャチ時代のことを少しお聞きしたいのですが、当時のアパートの大きさとか、アパートの部屋数とか、そういったものを覚えていらっしゃいますか。

○ユーリヤ 実際、何部屋だったとか、間取りとかは、よく覚えていなかったのですが、実は 2 年前にプリピャチに行きまして、自分たちが住んでいたアパートに入ったんですね。そうすると、ほかのアパートと一緒に、中にあった家具類は全部持ち去られていまして、その後 2 週間ぐらいは、ずっと鬱状態だったのです。

○川野 当時の部屋の広さというのは覚えていらっしゃらないようですが、7、8 歳の子どもですから、記憶があいまいであることは仕方ないですね。それで 2 年前に行かれたときに、家具とかなかったというのは非常にショッキングなことでしょうけれども、スペース自体はどういうふうに思われましたか。充分だなというようなことを思いましたか。

○ユーリヤ 3DK ですね。その 3 部屋の使い方というのは、いま思うと、自分と兄が 1 つの部屋、それで両親の部屋が 1 つあって、あと 1 つは客間として使っていました。

○川野 いまの生活の状態は先ほどお聞きしましたよね。三世帯が同居しているということですね。

○通訳 はい。

○川野 わかりました。当時の起床時間なんかは、覚えていますか。朝、学校には何時ぐらいに行っていましたか。

○ユーリヤ ちょっと覚えていません。

○川野 わかりました。当時の食事とかは、いまと違いますか。覚えていますか。

○ユーリヤ ソ連時代というのは、いま出回っているものに比べると添加物などが少なく、健康的な食品でした。いまは添加物とかがいっぱい入っていて、何を食べているのかわからないという感じです。

○川野 なるほど。

小学生だったから、特に家が豊かだったか、そうではなかったのか、というのは、なかなか判断しにくいと思うのですが、プリピャチ時代、経済的なことを何か感じたことがありますか。それとも、自分の家は比較的豊かだなというふうに考えていましたか。そんなことは考えたこともなかったですか。

○ユーリヤ 子どものときの家族の収入については、小さかったので、もちろん意識もしていませんでしたし、よく記憶に残っていないのです。

○川野 これは仮定の話なのであれですが、もし事故がなくて、そのままプリピャチにいたら、いま、どんな生活をしていたと思いますか。

○ユーリヤ 事故のころも、プリピャチという町は、町として発展していたんですね。ですから、もし、そのまま事故もなく住んでいたとすれば、いまみたいな狭いアパートに三世帯で住むようなこともなく、それぞれに住居も得られていただろうし、いまのキエフでの生活よりは楽だったのではないかと思います。

特に、いま自分たちは、この大都市キエフのなかで、被災者として誰にも必要とされないというか、構ってもらえないというような感じですし、またプリピャチという町は周りが自然に恵まれていて、大変環境的によかったです。このキエフは、いま車も増えて、当時のプリピャチと比べて環境的にもよくないと思います。

○川野 では、ウクライナがソ連から独立して、いまのウクライナになったわけけれども、仮にそうならなくて、現在もプリピャチにいたほうがよかったなと思ったことがありますか。

○通訳 それはソ連が崩壊しなくて？

○川野 崩壊しなくて、なおかつ、ずっと同じような状況でプリピャチに居続けるということを想像したことがありますか。

○ユーリヤ いや、考えたことはないです。

○川野 やはり独立したほうがよかったんですね。

○ユーリヤ ソ連崩壊後の現在、特にいまは金融危機後ですね。あまり収入のない人にとって、生活は苦しいです。特に家賃、公共料金とか、食費を払うの

にもかなり苦しい状態なのです。そういうことを考えると、もちろん私はソ連当時は子どもだったわけですがけれども、当時、自分の両親とか祖母などがどういうふうに暮らしていたかということを考えれば、生活の面ではソ連時代のほうがよかったと思います。

○川野 プリピャチでの7歳、8歳のころ、将来は何になりたいな、といったような夢はありましたか。

○ユーリヤ それは、どんな子どもでも思うことではないかと思いますが、将来、温かい家庭に恵まれて、そこでいろいろな愛情に恵まれて育つということを描いていたのではないかと思います。

○川野 そういった思いとかというのは、やはり移住後も、ずっと思い続けましたか。温かな家庭があって、生活があってという夢を描き続けていましたか。

○ユーリヤ 実際には自分の両親は離婚してしまったわけですがけれども、それで彼らを責めようという気にはなりません。それは彼らの事情というか、致し方なかったことだと思いますので。

○川野 わかりました。少し話が飛びますけれども、プリピャチ時代で非常に楽しかった思い出がありますか。いまでも忘れないような印象深い思い出がありますか。

○ユーリヤ プリピャチの自分たちの家自体も、町外れの森の近くにあったのですが、自分の通っていた幼稚園も、その森のすぐそばにありました。その森のそばでブランコをこいだりとか、そういう楽しかったことを覚えています。

○川野 プリピャチを離れてからは、そういう思い出はないですか。楽しく公園で遊んだとか、そういった楽しかった思い出はありますか。

○ユーリヤ これといったものは覚えていません。

○川野 いまの健康状態はいかがですか。

○ユーリヤ 子どものときに比べて、年々いろいろな診断名がついているのですが、昨年、甲状腺の健診を受けたときに、甲状腺肥大の第1ないし第2段階と言われました。その後の検査で甲状腺に嚢胞（のうほう）ができていますということで、いまはL-チロキシンという甲状腺ホルモン剤を服用しています。それを飲まないと、やはり具合が悪くて、外に出ても目まいがしたりということ

があります。

○川野 では、いまの健康状態には、やはり不安がありますね。

○ユーリヤ もちろんです。

○川野 そういった状態は、やはりチェルノブイリ事故の影響だと思いますか。

○ユーリヤ はい、そうだと思います。というのは、自分の知り合いなどの被災者の人たちでも、事故前それから事故後、健康だったのですが、事故後15年ぐらいたってからいろいろな病気が出てきて、いま言ったような甲状腺の病気とかという人が多いので、やはり自分の場合もその影響だろうと思います。

○川野 わかりました。自分自身の健康不安というのもあって、なおかつ同じ出身の人たちが次々と病気になっていく。そういったものを見るというのは、やはり、とても不安なことですよ。

○ユーリヤ そうです。

○川野 これからお聞きするのは、少々漠然とした質問なので、なかなか答えにくいところがあると思うのですが、自分の中で、これはと思うようなことがあれば教えてください。

これまで30年生きてこられて、チェルノブイリの事故で、自分の人生がすごく大きく変わってしまったなというような思いがありますか。もしあるとすれば、それは何だと思えますか。原発事故で自分の人生が大きく狂わされてしまったというようなことを思えますか。思ったことがありますか。

○ユーリヤ はい。もし事故がなければ、いまよりも、もっといい生活、人生があったかもしれないし、いまとは違うふうになっていたのではないかという気持ちはあります。

○川野 一番変わったとすれば、何が変わったと思えますか。

○ユーリヤ まず、それまで住んでいた住居とか、あるいは学校、仕事から引き離されて、また一から生活を始めなければいけなかったということが、一番心理的に大きな影響を与えていると思えますし、それはわれわれ子どもたちだけではなくて、母親についても同じことがいえるのです。

母は、キエフに移住してからもチェルノブイリ市のほうに仕事に行っていました。それは事務の仕事だったのですが、やはり生活を支えるためということ

で行きました。

○川野 わかりました。いまお話しいただいたような話を誰かにしたことがありますか。例えば子どもさんとか、もしくは、その周りの人たちとか。

○ユーリヤ キエフに来てからも、自分もプリピャチにいたんだよという人に会うと、どこに住んでいたのという話になって、そこの店の近く、私はこっち、というような話をひとしきりするということもあります。

○川野 プリピャチ以外の人には、こういった経験の話はしませんか。

○ユーリヤ それ以外の人に話すことというのは、ほとんどないです。それは、事故後だいぶ時間がたってしまったということもあるし、自分自身の記憶もだいぶ薄れているということもあります。2年前に行ったことで、かなりよみがえりました。母がチェルノブイリ市で働いていたところにプリピャチにも行っていたことがあるので、そのときに話してくれたことというのは記憶にありますが、それ以外に自分が住んでいたときの記憶自体は、もう薄れてきているのです。

○川野 薄れてきているという理由もあるでしょうし、当時のこと、プリピャチ時代のこと、もしくは移住退避のときのいろいろなことをプリピャチ以外の人に話しても、たぶんわからないだろうといったような思いはありますか。

○ユーリヤ 10年か15年ぐらい前だったと思うのですが、自分の友だちの女の子に、自分はプリピャチの出身で、そういう避難とかがあつてという話をしたときに、最初は信用してもらえませんでした。「嘘でしょう」という感じで。ですから、うちへ連れて行って、母親がチェルノブイリで働いていたときの写真とかアルバムを見せて、初めて信用してもらったということがありました。

○川野 だから、あまり話をしてもわかってもらえないだろうという気持ちがありますか。

○ユーリヤ やはり自分で体験していなかったり、自分の目で見ている人にはわかりにくいことが大きいと思います。それは事故のとき、どんなにストレスがあつたかというようなことも。

例えば、事故があつたのは26日の午前1時台なのですが、そのとき、母の兄弟、兄か弟かが原発で当直勤務をしていたので、その当直時間が終わって、すぐに彼がうちへ来て、こういう事故があつたから避難したほうがいいぞと言わ

れたのですが、うちには車もなかったですし、どうしていいのかわからない。
なすすべもなく、全員の避難を待っていたのです。

そのことは、もちろん後で母から聞いたのですが、夜中に兄弟が来て告げられたときのショックとか、そのとき、お父さんが外に出てみると、原発の方向の空が赤くなっているのが見えたとか、そういう話を聞いています。

○川野 そういった退避のときの記憶とか、その後もいろいろな体験があると思うのですが、そういったことを普通の生活のなかで思い出すときがありますか。もしくは夢で見たりするようなことがありますか。事故直後 2 週間、一時的に避難されて、また、それからキエフに来られたんですよね。その間のつらいこととか、あったらお教え下さい。また、そのことを思い出すことがありますか。

○ユーリヤ 4月26日前後で、テレビでもチェルノブイリ関係の報道があつて、プリピャチの画像なども出てくるわけですね。それを見ると当然思い出しますし、また、母が詩を書き、チェルノブイリのことなどについても書いており、チェルノブイリ関係の催しで朗読することもあります。母がその催しから帰ってきて、聞いていた被災者の人たちが泣いていたとか、そういう話をするので、そういうときは当然思い出します。

○川野 その思い出す中身というか内容は、どういうことですか。

○ユーリヤ やはりプリピャチからバスで避難したときのことで、それを一番よく思い出します。

○川野 それはなぜですか。例えば、バスにぎゅうぎゅうに人が詰められて、身動きできないような状態で避難したとか、そういった状況を思い出すのか、それとも町を離れなければいけないというつらかったことを思い出すのか。

○ユーリヤ そのとき自分は 8 歳ぐらいだったのですが、それは子どもだからというわけではなくて、大人にとっても、これまで住んでいた町を捨ててどこかに行くということで、全員にとって大変なストレスだったと思いますし、母親などは特に、移住先から新しい仕事を見つけて、また、そちらに行かなければいけないということもありました。

○川野 プリピャチを離れるときに、またプリピャチに帰ってくるんだ、とい

うふうに思っていましたか。それとも、もうここには二度と帰ってこないんだと思いましたが。その当時はどう思いましたか。

○ユーリヤ 事故翌日の避難に関するラジオ放送では、数日間の避難であるという言い方で、森の中でテント生活でもするのかとも、とられかねないような言い方だったので、その時点で、はっきりとは言われていなかったわけです。もちろん子どもだったということもあって、もう帰れないというようなことは、はっきりとは考えていなかったと思いますが、自分の両親などは、そういうことを意識していたのかもしれない。

振り返ってみると、自分たちがそれまで通っていた幼稚園とか学校からも離れてしまったということは、後になって意識したわけです。2年前にプリピャチに行ったとき、自分が通っていた幼稚園や学校にも行って見たのですが、もうすっかり荒れ果てていて、どこの教室で勉強していたのかということも、はっきりとは思い出せないぐらいの様子でした。

○川野 結婚されたのはいつですか。

○ユーリヤ 結婚したのは22歳でした。

○川野 お子さんは、いつお生まれになりましたか。

○ユーリヤ 25歳のときに生まれました。

○川野 子どもさんが生まれるときに、先ほど健康不安があるというようなことを言われていましたが、子どもを産むことに対して不安がありましたか。もしくは、その生まれた子どもに対して、何らかの病気があるのではないかなどといったような不安がありましたか。

○ユーリヤ まず妊娠中に頭痛がしたり、血圧が上がったりというようなことがあって、2回ぐらい流産しないように入院をしました。

○川野 入院されたときに、やはりこれはチェルノブイリの原発事故の影響だというようなことを考えましたか。

○ユーリヤ それは事故のとき被ばくしたことで、妊娠時などにも問題が出てくるのではないかなどということは思いました。

○川野 生まれたお子さんの健康、生まれたお子さんの体調とかに対して、将来の不安がありますか。

○ユーリヤ 女の子なのですが、乳歯が生えてきたときに、数カ月ぐらいで黒くなって抜けてしまったんです。その後は、もちろん生えていますけれども。あるいは、手足がすぐにだるくなるとか、風邪をひきやすいとか、いま現在でもそういう状態があります。ですから将来についても、そんな状態が、これからもっと悪くなるのではないかという不安はあります。

○川野 チェルノブイリで被ばくされてキエフに来られて、チェルノブイリの原発の被害者、被災者だという理由で、差別とか偏見、嫌な思いをしたことはありますか。

○ユーリヤ 例えば病院の廊下で診察とか治療の順番待ちをしているときに、何かで自分が被災者だというのがわかると、順番待ちをしているほかの一般の患者さんから、「すごい。チェルノブイリの被災者ね」とかいう感じで、そういう態度で接する人もあります。もちろん、それは人によるのですが。

また思い出しますと、事故後ポルタヴァ州に行ったときに、そこで放射線の検査を受けると、やはりある程度の線量が出たんですね。それで、そのとき着ていた衣服は全部没収されて、新しいものを提供されました。そういうこともあって、チェルノブイリの方から来たということで、周りの人が警戒するということが、その当時ありました。

○川野 先ほど12年仕事をされていたとおっしゃいましたね。就職するときに、チェルノブイリ出身者だからということで差別を受けたようなことがありますか。または職場で差別を受けたことがありますか。

○ユーリヤ 2年前まで仕事をしながら、通信教育で大学の教育を受けていた時期があつて、そのころは忙しかったこともあって、よく病気になって熱が出て、仕事を病欠したんです。そうすると上司の女性から電話がかかってくる、「何をしているんだ」と言われるので、「病気で休みを取っています」と言うと、「本当は仕事に来たくないのか」とか、そういうふうにもいろいろ叱責を受けたことはありました。

○川野 そこで、チェルノブイリだからというようなことを言われるわけではないんですね。

○ユーリヤ 上司は、なぜそんなに病気をするんだというようなことを聞いて、

私は子どものときから風邪もよくひいていたし、年々悪くなっているんだということを言ったんです。

○通訳 では、ご自分でチェルノブイリ被災者だということを言われたわけではないんですね。

○ユーリヤ 就職のときに身分証明書提示というのがあって、それにプリピャチ生まれというのが書いてあるわけです。それを見て、「被災者証明も出してください」と言われて職場のほうに出すので、被災者であることは職場の人は知っています。

○川野 もし答えたくないということであれば、それで結構ですが、結婚された相手の方は、プリピャチ出身の方でしたか。それとも、全然違うところの方ですか。

○ユーリヤ キエフ市の出身でした。

○川野 結婚されるときに、プリピャチ出身だということで、彼、もしくは彼の家族から何かを言われたことはありますか。

○ユーリヤ そんなことはありませんでした。彼の家族から、そのことで何かを言われたことはありませんでした。

○川野 これもちょっとお聞きしにくいのですが、死にたいなと思ったことはありますか。

○ユーリヤ いえ、そんなことはありません。将来のことを気にかけて育てている子どもがいるので、死のうとか思ったことはありません。

○川野 よくわかりました。あと二つほどお聞きして、私の方からの質問は終わります。後ほど、ほかの先生方からも質問があるかもしれませんが。原子力というエネルギーについては、どう思われますか。

○ユーリヤ 正直なところ、その原子力発電の是非とかいうことについて、これまで深く考えたことはなかったので、どうお答えしていいかわからないのです。

○川野 考えたことはなかったんですか。

○ユーリヤ ええ。

○川野 原子力事故によって、それまで住んでいたところから離れなければい

けなかった。それでも原子力について考えたことはなかったですか。

○ユーリヤ やはり人類にとって、原子力エネルギーなしでやっていくという事は難しいのではないかと思いますし、私が思うに、もしその当時、チェルノブイリ原発にかかわっていた人たちが、もっと責任をもって運転していれば、こういう事故にはならなかったのではないかと、やはり過ちを犯してしまったための事故だというふうに思っています。

○川野 核兵器という存在について、どう思いますか。

○ユーリヤ もちろん核兵器というのは、あって何もいいことはないし、必要なものとは思っていません。

○川野 最後です。これまでプリピャチからの退避のときの体験、あるいは、原発事故で多くの方々が亡くなっているのですが、それらに関する事、または全く関係のないことでも構いません。何か伝えたいこと、言いたいことがありますか。もし、何も言いたくなければ、それでも結構です。いまお話しした以外のことで、何かお話ししたいことがあればお聞かせください。

○通訳 一般的に、ほかの人に伝えたいことということですね。

○川野 ええ。

○ユーリヤ ちょっと考えてみないといけません。

○川野 すみません、急に難しい質問をして。また何か思いついたら教えてください。私が用意した質問は以上です。今中先生のほうから何かご質問があればお願いします。

○今中 では、私のほうから少し質問をさせてください。

ヒロシマ・ナガサキをご存じですね。

○ユーリヤ ええ。

○今中 どんなイメージを持っておられますか。

○ユーリヤ もちろん、原爆のせいで、ヒロシマ・ナガサキの多くの方々が被害を受けたということは知っていますし、また彼らは現在も病気にかかって、健康状態も悪化しているということは聞いています。おそらく、いま残っておられる被爆者の方で、健康な方はいないのではないかと想像しています。

というのは、いま自分たちの経験からして知っている限り、プリピャチにい

た人たちというのは、ほとんど健康な人はいません。その事故の直後、外に出なかったとか、すぐ避難したとかいう人を除けば、みんな病気なので、おそらく日本の被爆者の方もそうだろうと思っています。

○今中 ということは、チェルノブイリの被災者として、やはりヒロシマ・ナガサキの被災者にシンパシーなり、そういう感情は持つておられると思っていんですか。

○ユーリヤ はい、そう言っていると思います。というのは、もちろん日本の方は、私たちと変わらない人たちが、やはり原爆によって、原子力によって被害を受けたということです。その被害の程度については、ヒロシマ・ナガサキのほうがもっと深刻だったかも知りませんが、私は専門家ではないので、ちょっと比較はできませんけれども。

○今中 ちょっと別の質問ですが、ユーリヤさんは、法律的にもチェルノブイリ被災者ですよね。それで、現在どんな社会的な補償というか、なにか特典を受けていますか。

○ユーリヤ まず食事の援助というのがありまして、これは事故後ずっとあるものです。いま正確には覚えていないのですが、ひと月に100グリブナ¹か、120グリブナとか。医薬品については、かつては被災者には無料で出るという医薬品のリストがあったのですが、いまは金融危機のせいもあってか、ほとんどそれは病院にはありませんので、自費で治療をするということになります。あと家賃、公共料金が半額になるというシステムがあります。

○川野 いまもそうですか。

○ユーリヤ いまもそうです。

○今中 それはお母さんも一緒ですか。お母さんはお母さんで、同じような補償を受けているんですか。

○ユーリヤ はい。被災者はみんな一人ずつが、この額を支給されています。食事支援についてはですね。

○川野 一人100グリブナ？

¹ 2009年6月で1グリブナ=約13円。

○ユーリヤ 一人 100 ぐらいということで、お母さんはお母さんでもらっています。しかし、これもいまの物価を考えれば、たいした額ではないのですが。

○今中 私の最後の質問ですが、チェルノブイリから避難してきた人で、周りの人が早く亡くなるとか、癌で亡くなる方が多いと感じられますか。

○ユーリヤ 自分とか、それより若い人たち、いま 25、6 歳ぐらいのプリピャチから来た人は、たいてい甲状腺の問題があつて、薬を飲んだり、治療を受けたりしている人もありますし、一般的に言うと、親戚知人のなかで病気になって、すでに亡くなっているという人も多いです。

例えば、28 歳だった人ですが、プリピャチ市からの移住者が、キオスクで友達と立ち話をしていたときに突然、倒れて、救急車は間に合わず亡くなってしまったという急死のケースがあつて、その人の場合は、あとで解剖しても死因ははっきりわからなかったそうです。そういう突然死とか、あるいは急に体調が悪くなって救急車で運ばれるというようなケースも耳にします。

○川野 一人 100 グリブナの支援があるということでしたが、一人いくらぐらいの支援があれば充分だと思いますか。

○ユーリヤ いくらとは、いま言えませんけれども、被災者の人でも、事故当時、いわゆるゾーン内にいたような人については、せめて医薬品代だけでも国が補償するようなシステムになればいいと思うんですけど、実際はそうならないわけです。

一方、実はチェルノブイリ被災者ではないのに、ごまかして資格を取っている人たちが特典を受けている。そういうケースもあるんです。

○川野 ユーリヤさん、少し難しい質問なのですが、1 カ月どのぐらいあれば生活できると思いますか。

○通訳 彼女の家族の場合ですか。

○川野 ええ、そうです。ユーリヤさんの家族の場合、どれぐらいあれば生活できると思いますか。

○ユーリヤ 家族全体で、食費と家賃、公共料金ぐらいで、1 カ月に 3,500 から 4,000 グリブナがあつたとしたら何とか、という感じです。病気の場合は、さら

に医薬品代がかかるわけで、例えば母は糖尿病で、脳卒中とか心筋梗塞もあったのですが、彼女は一度入院するだけでも 1,000 グリブナ、2,000 グリブナと入院費がかかりました。

○川野 先ほど今中先生がおっしゃった食費の補助というのは、ユーリヤさんとお母さんとお兄さんの3人がもらっているんですか。

○ユーリヤ そうです、3人です。その食費の補助も、ときどき遅配になったことがあるんですが。

○川野 あったり、なかつたりするんですか。

○ユーリヤ いや、遅配ですね。国の予算が足りないと、その月はお金なくて、また後で支払われます。子どもに関しては、キエフ市の方針で、幼稚園と小学校の4年生までは給食が無料です。

○川野 給食費はとられるのですか。

○ユーリヤ ええ、一般的には取られるわけですね。それで幼稚園と小学校4年生までは給食費無料になっています。被災者から生まれた子どもという理由です。そのほかにも法律に書かれている権利として、被災者から生まれた子どもは、年に一度、保養券というのがもらえます。

○川野 保養券？

○ユーリヤ サナトリウムとかの利用券です。そういうシステムはあるんですが、やはり予算の関係で全員分は出ないので、これを手に入れようと思うと大変です。

○川野 保養券というのは、あくまでも、そこにいって保養するという券ですよ。それに関わる費用、例えば、交通費まで含めて出るんですか。

○ユーリヤ 保養だけの経費です。往復の交通費というのは、障害者である場合は交通費も補償されますが、障害者でない場合は自己負担となります。

○川野 先ほどヒロシマ・ナガサキへのシンパシーがあるという話で、大変うれしく感じたのですが、われわれもやはり、同じ被災者としてのシンパシーがあります。

現在、ヒロシマ・ナガサキの被爆者は23万人ぐらいいます。原爆が投下されて63年たちましたが、ずっと原爆被爆の研究は続けられています。いま二世、

つまり被爆者の子どもの世代の調査を始めつつあります。いまのところ、放射線との因果関係はわからないという結論です。あるかもしれないし、ないかもしれないし、わからないということです。ユーリヤさんの子どもさんへの放射線の影響については、あまり深刻にご心配にならなくてもいいかもしれません。

○ユーリヤ もちろん、それはそうだったらいいと思います。子どもというのは親よりも健康でなければいけません。

○川野 そうですね。そう思います。

大変長い間、ありがとうございました。

○ユーリヤ どういたしまして。

ガリーナ・ユーレイヴナ・ドンドゥコーヴァ氏（女性）

実施日：2009年6月11日

○川野 では、お二人目の聞き取りを始めたいと思います。本日はお越しいただき、ありがとうございました。

○ガリーナ どういたしまして（日本語で）。日本語を少ししか知らないものから。

○川野 いえいえ。私は広島大学から来た川野と言います。こちらは京都大学の今中先生です。今中先生はチェルノブイリの放射線影響を調べている研究者です。私は今回、初めてチェルノブイリにきました。私はヒロシマ・ナガサキ、そしてセミパラチンスクにおける核被害の被災者の方々の心的な被害・社会的な被害を研究しています。

今回はチェルノブイリの被災者の方々からお話をお聞きし、事故前と事故後の比較から、被災者の方々に何が起こったのか、チェルノブイリでは何があったのか、といったことを考えたいと思っています。

今回は貴重な時間をいただきまして、ありがとうございます。結構多いのですが、質問をさせていただきます。率直なご意見を聞かせていただければと思います。

○ガリーナ いいですよ。

○川野 こういった声を残すことは非常に大事なことだと思っています。

○ガリーナ はい、そのとおりだと思います。

○川野 それでは質問に入らせていただきます。

まず、基本的なことをいくつかお教えいただきたいと思います。氏名、性別、生年、人種、宗教、最終学歴を教えてくださいいただけます。

○ガリーナ 初めまして、私はドンドゥコーヴァ・ガリーナです。苗字がドンドゥコーヴァ、名はガリーナ。父称はユーレイヴナです。生年月日は1945年6月2日生まれです。ウクライナ人です。

○川野 1945年生まれですか。

○ガリーナ はい。ですから、64歳です。宗教はキリスト教、正教です。

○川野 ウクライナ正教ですか。

○通訳 それは微妙な問題でして、ウクライナのなかでもロシア正教とウクライナ正教があるんです。ですから、両方を含めた広い意味での正教です。

○川野 わかりました。

○ガリーナ 学歴は大学卒業です。

○川野 お生まれになってからの簡単な居住歴、職歴を教えてくださいませんか。

○ガリーナ 生まれたのは、キエフ州イヴァンキウ地区のクラスィリウカ村です。そして、キエフ教育大学を卒業しました。キエフ教育大学には1964年に入学、1969年卒業。卒業後、教師養成の専門学校があるのですが、ドニプロペトロウシク州のニコポリにあるニコポリ教育学校の教師として働きました。当時は卒業後の派遣制度があったので、そこに就職しました。

○川野 教育大学を出られて、また1969年に専門学校に行くわけですか。

○ガリーナ その教師になったということです。

○川野 わかりました。ニコポリというのは村ですか。

○ガリーナ 町です。

○川野 教育専門学校の教員になったわけですね。

○ガリーナ はい。そこで教師をしたのは1年間で、1970年に結婚をして、ビーラ・ツェールクヴァという町へ引っ越しました。

○川野 1970年に結婚されたんですね。

○ガリーナ はい。1970年からは、このビーラ・ツェールクヴァ市で幼稚園の園長をしておりました。

その後、1972年にプリピャチに夫と一緒に引っ越しました。ちなみにプリピャチ市というのは、生まれた村から、それほど離れていないところです。

○川野 なぜ、プリピャチ市に行ったのですか。

○ガリーナ 生まれてから大学入学前まで過ごしていた村は、このプリピャチのそばで、実家もそこにあります。イヴァンキウ地区の生まれたところとは別の村、プリピャチから3キロぐらいのところに実家があって、両親が住んでいました。当時、両親が住んでいたのは、ノーヴィ・シェペルィチ村で、現在、

30 キロ圏内に入っているところです。

1972年にプリピャチに移りまして、そこでも幼稚園の園長をしておりました。プリピャチに行った後は、すぐに幼稚園の園長をしたのではなくて、最初は小学校の教師をしていました。それは1972年から1976年までの間です。そして、1976年から1986年まで幼稚園の園長をしておりました。

○川野 わかりました。

○ガリーナ 事故後は、1986年から1987年4月までチェルノブイリ市で寮の管理人をしておりました。

○川野 寮は学校の寮ですか。

○ガリーナ いえ、違います。事故後にも原発で働いていた人たちがいるわけで、その原発職員の寮がチェルノブイリ市にもあったのですが、その寮の管理人をしていました。

○川野 チェルノブイリ市の寮の管理人にならないかというのは、どこかから話があったんですか。

○ガリーナ 当時の共産党の書記からお話がありました。私はその当時、党員でしたので、党の書記から、あなたも党員として責務を果たすべきだというプレッシャーがありました。私自身としては、あまりやりたくなかったのですが、しかたがない状況でした。

○川野 なぜ、やりたくなかったんですか。

○ガリーナ キエフに移住してから仕事も見つかっていたので、また汚染地のほうで仕事をするというのは気が進まなかったのです。

○通訳 事故後、すぐにアパートを配給されたんですか。

○ガリーナ いいえ、そうではなくて、キエフ市内に兄弟が2人いて、事故後しばらくは、そこに世話になっていました。

○川野 1987年の4月以降の居住歴を教えてください。

○ガリーナ 1987年4月になりますと、体調が悪いということで、これ以上、汚染地域では仕事をしてはいけないということになり、キエフに戻りました。その後はキエフにおります。

○川野 わかりました。1986年4月26日に、ご承知のように原発事故が起こっ

たわけですが、それ以前、つまりプリピャチにお住まいのときのご家族の状況を教えていただけますか。

○ガリーナ 事故当時、夫と息子がいて、夫はプリピャチのジュピターという工場で働いていました。ジュピターという工場は、テープレコーダーとか電気製品をつくっていたほかに、実はミサイル部品などもつくっていたのですが、当時は秘密になっていました。

○川野 子どもさんは何人いらっしゃったんですか。

○ガリーナ 一人息子です。夫は1939年生まれ、息子は1971年生まれです。

○川野 現在は、どうされていますか。

○ガリーナ その当時の夫は1991年に亡くなりました。夫の死因は心筋梗塞で、突然死でした。彼は事故後も汚染地域でずっと仕事をしており、仕事内容は、ゾーン内で作業に使われるクレーン車など、いろいろな車両の管理をする施設の仕事でした。彼は1991年当時、原発からあまり離れていないところで仕事をしていました。

○川野 息子さんは、いま何をされていますか。

○ガリーナ 現在、息子は電電公社のようなところでマネジャーをしています。

○川野 わかりました。では、いまから、1986年のプリピャチ時代と現在の状況に関してお聞かせ下さい。

まず、1986年当時のアパートの大きさとか、お住まいの状況を教えてください。

○ガリーナ 3DKのアパートでした。

○川野 いまはいかがですか。

○ガリーナ いまは残念ですがワンルームです。

○川野 いまは、お一人で生活していらっしゃるんですか。

○ガリーナ 息子と2人で住んでいます。

○川野 プリピャチ時代は、学校の先生もしくは幼稚園の園長先生ということでしたから、朝は比較的早く起きて仕事をされていましたか。夜の帰りは遅かったですか。

○ガリーナ はい。学校でも幼稚園でも、結構遅くまで仕事がありました。学校ときは、子どもたちの宿題のチェックなどを学校でもやったし、自宅にも持ち帰ってやっていました。また、幼稚園は全部で12クラスあって、職員数もかなり多かったので、園長としての仕事はなかなか大変でした。

○川野 夜は遅くまで仕事をされていましたか。

○ガリーナ はい、そうですね。私も遅かったのですが、夫も先ほど言った工場で、結構遅くまで、毎日仕事をしておりました。

○川野 仕事から帰られて、家でゆっくりする時間は何時間ぐらいありましたか。

○ガリーナ 寝るまでの時間と考えると、それでも毎日4、5時間ぐらいはありました。遅くても8時ぐらいには帰っていたので。それプラス、休日は夫と一緒に過ごす時間もありました。

○川野 わかりました。少し話が飛びますけれども、プリピャチ時代の食事とかは覚えていらっしゃいますか。いまはそれとは変わりましたか。

○ガリーナ もちろん非常に大きな違いがあります。まず価格ですが、事故当時は自分たちがもらっていた給料も、それほど多くなかったとはいえ、食品の価格は非常に安かったんです。また、プリピャチでは食品不足もなく充分にありました。

例えば、その当時、肉類だと1キロあたり1.9ルーブル、ドクターという名前のソーセージも1キロあたり2.2ルーブル。パンは1斤というか1つの塊が18コペイカで、牛乳は1リットル11コペイカというように、当時の感覚でも安い、そんなに値段のことをいちいち考えながら買わなくてもいいぐらいでした。

○川野 食べていた食事の内容は、いまと当時は違いますか。

○ガリーナ 当時は肉なども、いまよりは食べられていました。ソーセージや加工品についてもです。しかし、いまは食品を入手するにあたっては節約をしないとけません。

○川野 わかりました。プリピャチ時代のお給料は、当時、ガリーナさんとご主人のお二人で、どのぐらいでしたか。

○ガリーナ 私が園長としてもらっていた給料は、月240ルーブルぐらいで、

夫のほうは、ボーナスなども入れると月 300 ルーブルぐらいです。

○川野 当時の平均的な月収は、おわかりになりますか。

○ガリーナ 国全体ということですか。それともブリピャチで。

○川野 そうですね、国全体はおわかりになりますか。

○ガリーナ 国全体というとな難しいですが、例えば幼稚園で、ほかの職員がいくらぐらいもらっていたのかということわかります。

○川野 ええ、それでいいです。

○ガリーナ 保育士でも当時はいろいろな分類があって、一番低いランクの子守さんや乳母さんというような資格の人は 60 ルーブル。それより、もう少し上の大卒で、教育学部を出たような教育係という肩書きの人は 85 ルーブル。看護師さんなどは 100 ルーブル。私の園長としての給料は、本来 170 ルーブルなのですが、私が幼稚園に新しく 2 つの発音矯正のクラスをつくったので、その報酬として上乘せがあり、240 ルーブルもらっていました。

当時の国の平均収入は覚えていないのですが、一方、原発職員の人は、いまの幼稚園職員よりも、もっともらっていて、当時、250 ルーブルや 350 ルーブルという給料でした。

○川野 なるほど。お二人で 540 ルーブルあったのですね。十分な額でしたか。

○ガリーナ そうですね、当時の生活としては、それで問題はなかったと思います。アパートを最初に手に入れたときも、自分たちで内装や家具などは、いまで言うローンを組みました。親にもお金を出してもらいました。そのほかに車もありました。最初の車は、ウクライナ製のザポロジェツというものですが、その後、車も買い換えたりしています。

○川野 540 ルーブルもあれば、貯金もされていましたか。

○ガリーナ どこかへ特別に預けていたのではなくて、自分たちで貯金していました。特別にいくらずつためるというかっこうではなくて、自分たちの給料が振り込まれる口座に余裕があるときは残してというぐらいです。それほど特別にためていたわけではないのですが、それで不自由はなかったです。

○川野 なるほど。そういった状況と比べるのもなかなか難しいのですが、現在はいかがですか。現在の収入源は何ですか。

○ガリーナ いま現在、息子は金融危機のあおりで給料が遅配になっていて、私の年金で食べているんです。しかし以前、彼が給料をもらっていたときは、そうかつかつというわけでもなくて、車もローンで買いました。いまは、そういう状態です。また給料が出るようになれば助かるのですが。

○川野 現在の年金は、おいくらですか。

○ガリーナ 私の年金というのは悪くはないです。と言いますのは、実は、汚染地での仕事を辞め、キエフに戻ってから18年、ここ²の幼稚園の園長をしておりました。私が園長時代、ゼムリャキに、ここを貸すというように計らったんです。その職歴があるので、いまの年金額は1,500グリブナです³。これは、こちらの相場で言いますと悪くない年金です。

○川野 それはキエフで働いたものもあるし、それ以前の1986年以前のものも全部累積ですね。全部足されたものが1,500グリブナということですね。

○通訳 計算根拠ですか。

○川野 ええ、計算根拠です。

○ガリーナ こちらは年金計算システムが違います。例えば、ある人がずっといろいろな職を経てきたとします。年金計算の根拠となるのは、5年以上働いた職のなかで一番給料のよかった5年間で根拠に年金計算をすることができます。ただし、飛び石ではいけないのですが⁴。あるいは、最終的に仕事を辞める前に働いていた2年間とか、いくつかバリエーションがあります。

私の場合は、ここで幼稚園園長をしていたときの5年間を取って、それを基礎に計算した額が1,500グリブナになります。つまり、プリピャチで働いていたときの5年間よりも、こちらで働いていた5年間のほうが金額的に大きくなるということで、それを根拠にしたんです。

○川野 では、長く勤めていたから年金が高いというわけではないんですね。

○ガリーナ はい、そうです。つまり働いた期間にかかわらず、ある人がある職で20年働いても、別の人が30年働いても、長く働けば高くなるというもの

² ゼムリャキのオフィスは幼稚園の敷地内にある。

³ 年金は労働の期間・給与額などの「勤労歴」によって算出される。

⁴ ある時期の給与の最もよかった3年間に、別の時期の給与のよかった2年間を加えるといった意味。

ではなくて、それぞれの職の中での 5 年間で、どれだけ稼いでいたかというのが根拠になるわけです。

○川野 それは非常にユニークですね。日本の年金制度は、基本的には積み上げなんです。長く働けば働くほど、年金額は高くなるのです。

○ガリーナ そのほうが、とても正しいと思います。残念ながら、われわれが法律をつくっているわけではないので。人によっては、実際に 30 年も 40 年もお医者さんをしてきたような人でも、例えば、もらう年金は 500 グリブナとか 400 グリブナとか、そういう人もあるわけなんです。

○川野 なるほど。いまのお話を聞く限りにおいては、あまりご不満はないのかもしれませんが、プリピャチ時代で何か大きな不満などはありましたか。生活の不満とか。

○ガリーナ 全般的に言って、何か不満があったということは思い出せないんです。それは若かったということもあるでしょうけど、働く意欲もあって、人口 5 万人ぐらいのプリピャチの町で、私は結構大きい幼稚園の園長をやっていたわけです。仕事に対する意欲というか、自分の職務に最善を尽くしてやり遂げたいというエネルギーもありましたし、仕事に対する興味や意欲に燃えていたわけです。

またプリピャチという町は、パラがいっぱい咲いているきれいな町で、人口 5 万人ぐらいという規模ですので、町を歩いていても知っている人に会ったらあいさつをするというところなんです。いまのキエフのような大都市で、すれ違っても知らんぷりというのではなくて、みんなお互い仲良く生活を楽しんでいたと思います。

それに何か影がさすようなことがあったとしたら、それはキエフの人が来たときに、「こんな原発のそばに住んでいて、あなたたちは怖くないのか」と言われたことがあります。それに対してわれわれは、「いや、全然怖くも何ともないよ」と言って、われわれ自身は怖くはなかったんです。

○川野 それは、いつごろの話ですか。

○ガリーナ たぶん 1980 年代になってからだと思います。1982 年から 1984 年ぐらいのころ、キエフの学生時代の友だちがプリピャチに来たり、また私がこ

ちらに來たときに、そういう話が出るがありました。

そのころ、ある医師が言ったことによると、プリピャチは統計でも癌の罹病率が高いということでした。もちろん、その統計を見たわけではないので、それが、どの程度、信頼できる情報かはわかりませんが、そのようなことを言った人がいたのは事実です。

○川野 当時、原発の近くに住んでいると危ないという、プリピャチ市民の意識はあったと思いますか。

○ガリーナ いいえ、プリピャチではありませんでした。みんな、町での生活に満足していましたので、何かそういう悪いことは考えたくないという感じでした。

○川野 なるほど。では、できることなら事故がなくて、プリピャチに住み続けられたらよかったと、いま思っているのでしょうか。

○ガリーナ はい、もちろんです。というのは、事故の後、キエフに住むようになったときも、私は本当にキエフが嫌だったんです。それは14年間プリピャチに住んで、そこの生活に満足していたわけです。こちんまりとした快適な町でしたので、キエフやモスクワに行かせてあげると言われても行きたくなかったんです。学生時代はキエフに住んで、それなりに好きだったのですが、ここに来てからは、もう嫌でした。

○川野 プリピャチという町は、そんなにいい町でしたか。何が一番良かったのですか。

○ガリーナ 町自体はコンパクトで美しく、しかも両親もすぐそばに住んでいました。ですから両親のところにも、いつ、ふらっと行ってもいいような感じでしたし、いまのキエフでの生活に比べると、もっとシンプルで気楽な生活ができていました。

○川野 1986年の前までは、もうプリピャチに、ずっと死ぬまでいようと思っていましたか。

○ガリーナ はい、そう思っていました。

本当によかったです。ポリツィヤ地方の自然は本当に素晴らしくて、きれいな川が流れて、自然のままの草原が広がって、野の草花も咲いている。プリ

ピャチ川というのは、ドニエプル川などから比べると少し流れが速いのですが、その周りに小川が注いでいて、エデンの園のような美しいところです。

○川野 いまのキエフでの生活は嫌ですか。

○ガリーナ いまでもキエフが嫌ということはないです。というのは、もうブリピャチに戻れないこともわかっていますし、いまさら、ここからどこかに行こうとは思いませんので。姉妹がクレメンチュークという別の町にいて、そちらに来ないかという話があったときも、やはり断りました。というのは、キエフのほうがブリピャチに近いこともあるし、生まれ故郷自体がブリピャチのそばで、その村に母や祖母が葬られていますから。

○川野 なるほど。少し話が飛びますけれども、いま現在の健康状態はいかがですか。

○ガリーナ とても自慢できるようなものではありません。いま問題はいっぱいあるのですが、診断名も重病の名前がついていて、ずっと恒常的に治療を続けられないといけません。

それは事故後から始まっています。事故前は、頭痛がするようなことは一度もなかったのですが、事故後、頭痛が起こるようになり、自律神経失調とか脳の循環障害という診断名がついています。それから、心臓血管系も問題があります。虚血性心疾患です。また、心臓の弁にも問題があります。

○川野 そういったものは、やはり原発事故の影響だと思っていますか。

○ガリーナ はい、そうだと思います。というのは、事故後もゾーン内で仕事をしていたわけですが、その結果、目まいがしたり、1分ぐらい意識がなくなるというような状態になったので、もうこれ以上、ゾーンで仕事をしてはいけないうことで辞めたわけです。ですから、やはり事故と関係していると思います。

親戚関係でも高血圧の人はいなかったのですが、いま私は高血圧ですし、やはり事故のせいだと思います。そして、両親とも癌で亡くなっています。

○川野 それは、いつですか。

○ガリーナ 母は事故前の1978年ですが、父は1992年です。

○川野 死因は何ですか。

○ガリーナ 癌です。父が亡くなったときは肺癌でした。事故後、1カ月ぐらい着ていたフード付きのレインコートを後で測ったところ、ちょうどフードのところで放射能の高い値が出たということがあって、それによる被ばくも影響しているのかもしれない。

○川野 わかりました。原発事故があったことで、自分の人生がすごくゆがんでしまったという思いがありますか。

○ガリーナ それはもちろんです。まず第一に、非常に大きな精神的ストレスがありました。

○川野 それは、やはり新しいところで生活を一から始めなくてはいけないということに対するストレスですか。生活環境が変わるということでのストレスですか。

○ガリーナ ちょっと想像していただきたいのですが、例えば、うちで寝ているとして、そこで14年間過ごしていたんです。私の場合、そこに夫の兄弟が突然、家のなかにやってきました。

彼は釣りが好きなんです。原発のそばには冷却水の池があったのですが、そこはそれほど汚染もなく安全だと言われていて、その冷却池では養殖というか、特別に魚を放していたんです。ですから、そこで彼は事故の起こる直前の午前1時ぐらいまで、釣りをしていました。事故は1時20何分でしたので、ちょうど彼が釣り道具を片付けて、車に乗せて、プリピャチ川を渡っている橋にかかったところで、轟音が聞こえて。

○今中 いや、鉄橋、陸橋ですね。

○通訳 跨線（こせん）橋ですね。プリピャチ川の橋ではなくて、線路を越えていく橋ですね。

○川野 ちょっと待ってください。いまのはどういうことですか。

○ガリーナ つまり、1時まで釣りをしていた主人の兄弟は、片付けて車で帰ろうとしたときに轟音を聞いて、振り返ってみると原発が爆発していた。それで彼は慌てて、私たちの家まで来て、主人に「大変なことだ。原発が爆発している」と教えてくれたんです。

○今中 発電所があって、鉄道が走っていて、発電所から跨線橋を通過してプリ

ピャチの町に入る。ここは有名な所で、橋の上で4号炉が目前に見える。

○ガリーナ すみません、ちょっと勘違いをしていましたが、彼が私たちのところに来たのは、そのすぐ後ではありません。彼は「おおっ」と思ったのですが、しばらく見物をしていて、家に帰って寝てしまったんです。そのときには、それほど大事件だとは思わなかった。

ところが彼の友だちが、そのときに当直勤務で原発内にいたんです。その人が朝になって電話をしてきて、プリピャチでも放射線量が高くなっているから、早く子どもを連れて逃げたほうがいいぞと彼に言ったので、彼はそれを聞いて初めて、これは大変だということで私たちのところに来たんです。

当直していた人から彼に電話があったのは午前6時ぐらい。つまり、1時から6時ぐらいまでは家に帰って寝ていました。そして6時半になって彼がわれわれのところへ駆けつけてきて、「起きろ。原発が爆発しているのに、そんなにのうのと寝てはいけない」と。私はどういうことかと思って、あちこちに電話をして知ろうとしたんですが、誰もきちんとしたことはわかりませんでした。

それで、主人の兄弟であるサーシャの一家と私たち一家は、その車で避難したのですが、そのときも私は、家のなかにあったソーセージや缶詰を持っていただけで、月曜日になったら、また戻ってきて仕事に出ると思っていたんです。

その後、途中で交通封鎖しているところもあったので、結果として、ポリスケという町に当座は避難したんです。でも、そのときも自分のアパートのドアを閉めて、それ以来、戻らなかったわけです。

だから、どういうストレスかと言われれば、そういう状況を想像していただければいいと思います。

○川野 なるほど。つまり、それまで蓄積して大切に育ててきたすべての生活環境を、そこで失ってしまったということですね。

○ガリーナ そのとおりです。

○川野 わかりました。それは大変なことですね。ヒロシマ・ナガサキの原爆被爆者もそうなんです。一発の原爆で、すべての生活環境を失ってしまう。やはり一番変わってしまったものというのは生活そのものですか。

○ガリーナ　そうです。もう完全に生活、人生が変わってしまいました。それまでは安定した生活があり、明日という日について不安もなく、子どもも大きくなって、無事に学校を終えて将来がある。問題というほどのものはなく、安心して安定した生活を営んでいたのが、突然失われてしまって、何も持つものもない状態になってしまった。次の瞬間、何が起こるかわからないという状況でした。

そのときの私たちの状態は、まったくそのようなことが起こるとは予想してなくて、何の不安も抱いていなかったところに、例えば、いきなり誰かが足元の穴に落ちてしまって、何でこんなことになったのだと思うような感じでした。

○川野　なるほど。

○ガリーナ　私たちにとって一番問題だったのは、先がどうなるかわからないということです。4月27日には3日間の避難と放送があったのですが、私はそれより前に避難していたわけで、先ほど言ったように月曜日には職場に戻るつもりでした。それで、またフェリーで戻ろうと思ったら、すでにプリピャチから避難がおこなわれていて、もう行けないと言われたんですね。

そのときには新聞やテレビなどではまったく報道もなく、どういう状況なのか、どうなるのかもわからない。事故後1週間ぐらいたってから、やっとゴルバチョフのテレビ放送があって、もう住民は戻れないと言われました。そのときに私はヒステリー状態になって、誰か近しい人が突然亡くなってしまったかのような状態でした。

○今中　（ロシア語で質問）。

○ガリーナ　ですから、私たち家族が避難したのは26日の朝早くで、自分たちの車で避難しました。

○川野　当時、ソーセージとか、ほんの少しのものだけ持って避難されたんですね。もし、もう少し何か大きいものを持ってこられる、それも一点持ってこられるということであれば、何を持ってきたかったですか。

○ガリーナ　寝間着ぐらいは持って出たでしょうね（笑）。

○川野　そこに残してきたもので、いま、あれがあったらと思うようなものが

ありますか。持ってくればよかったというものがありますか。

○ガリーナ 家具セットですね。それは1986年の2月にやっと手に入れたんです。ローンで毎月少しずつ払って返すという条件で手に入れた新しい家具セットがあったんですが、それはそのままになってしまって、しかも事故後半年ぐらいいは、ずっと請求がきていました。その後、さすがにこなくなったのですが（笑）。当時はそういうシステムだったんです。

もちろん、服も全部置いてきてしまったので、また買わなくてはいけなかった。いま思えば、すべてが残念というか、食器であるとか、カップも受け皿もスプーンも、全部なくなってしまったわけです。

○川野 いまのお話を聞くと、結局、生活基盤すべてを失ったということですよ。そういった話を誰かにしたいと思いませんか。それとも、したことがありますか。もし、したとすれば、誰にしましたか。

○通訳 被災者同士で、あるいはそれ以外でとか関係なく。

○川野 そうですね。

○ガリーナ 初期のころは、そういう話をすることもよくあったのですが、このころはそうでもないです。というのは、われわれ、特にここに集まっている人はプリピャチから来た人がほとんどで、いま被災者同士で話をするとなれば、暗くなってしまうような話なわけです。起こってしまったことをお互いに話すというのは、非常に後になって神経とか感情に影響がありますので。

ですから、事故前・事故後というのは、戦前・戦後というような例えの言い方をするぐらいです。どうやって避難したかとかは、それぞれの人にとって、本当に話すこと自体が辛い、思い出すのも辛いことなんですね。だから、被災者同士で話すときは、もっと楽しいことを話すようにしています。こういう避難時の話などを引き合いに出すのは、お互いにとって非常にヘビーなことなので。

○川野 そういったヘビーな避難時の体験や避難後の生活、それもチェルノブイリの事故に関係するようなつらい出来事などを、普通の生活のなかで、ふと思い出すようなことがありますか。

○ガリーナ 前に比べて、いまではほとんどないです。かなり時間もたちまし

たし。

○川野 昔はありましたか。

○ガリーナ 2006年の20周年のときですが、ウクライナのあるテレビ局と一緒にプリピャチに行ったんです。私は、先ほど話に出た橋を渡ったときに、少しヒステリー状態になって、わあっと泣き出してしまったんです。

プリピャチに入る前、橋を渡ってこれからというときに、突然発作のように泣き出してしまって、テレビ局の人が「もうやめましょうか」と言ったんですが、何か絶望や悲しみの気持ちというのを、そこではき出してしまったんです。

○川野 僕は、そのビデオを見たことがあります。プリピャチを訪ねて行って、自分が住んでいたアパートに入って、号泣する女性の映像を見たことがあるんです。2006年ではなかったでしょうけど。

○今中 いっぱいある。

○川野 そういう映像は、いっぱいありますよね。

○今中 あれは、広河隆一さんが作ったやつ。

○川野 たしか、そうです。

○ガリーナ 20周年でプリピャチに入ったときは、私は自分のアパートでは泣かなかったのですが、働いていた幼稚園の壁に、まだ子どもたちの絵がかかって残っていたんです。それで、覚えている男の子の絵があったときに、やはり泣き出してしまいました。

○川野 1986年当時から、どのぐらいの期間、避難時のこと、プリピャチのことを思っていましたか。思い出す時間というのかな。1986年からどのぐらいまで、頻繁に思い出していましたか。

○ガリーナ かなり長かったです。最低5年は、そういう時期が続いたと思いますが、その後は、もう少しまれになったかと思います。それでも、やはり思い出さないことはありません。

○川野 最近は、あまりないですか。

○ガリーナ はい、最近は減りました。それは当然です。でも、べつにそれで心が痛まなくなったわけではなくて、テレビでチェルノブイリの記念日の番組などを見ると、やはり昔と変わらないような悲しい思いをします。

○川野 それは、そうですね。話が飛びますが、1971年生まれのお子さんが1人いらっしやいますね。独身ですか。

○ガリーナ 息子は以前、結婚していて、8年ほど結婚生活がありました。3回流産がありました。彼は血液型がRHマイナスで、彼女はRHプラスでした。それは私の初婚相手である彼のお父さんがRHマイナスで、その遺伝なんです。それも関係あるのかはわかりませんが、そういう残念なこともあって不和になりました。

私は、最初の夫が亡くなった後、再婚をしたのですが、再婚相手も亡くなりました。その後、息子は離婚して、私と一緒に住むようになりました。

○川野 やはり息子さんも原子力の事故で被ばくされていると思うのですが、息子さんの健康に関して不安などはありますか。

○ガリーナ はい、もちろん不安はあります。彼も健康状態はよくありません。目まいがしたり、消化器系の問題があったり、記憶も減退しています。それが確実に被ばくと関係あるのかどうかはわかりませんが、まだ37歳で若いですから、それにしても、やはり健康状態はよくないと思います。

○川野 わかりました。1987年にキエフに來られて、チェルノブイリの出身者、チェルノブイリ原発事故の被災者、経験者だということで、いろいろな差別や偏見などを経験したことがありますか。

○ガリーナ 私個人はありませんでしたが、息子の学校で、そういう問題がありました。

○川野 どのようなことですか。

○ガリーナ 息子の友だちでプリピャチから来た子は、やはり学校で、冬場に着ていったコートが切られたり、学校の催しにも入れてもらえないとか、嫌がらせのようなことが、当初ありました。

なぜかと言いますと、われわれがあてがわれて入ったアパートは、本来、別の人が入るはずのものだったんです。そういうことも影響しています。

○川野 なるほど。だから、放射線を浴びた人たちという意味の差別ではなくて、当時、住む予定の人たちを差し置いて入ってしまったことに対する嫌がらせということですか。

○ガリーナ そうですね。被ばくしたからという意味の差別ではなくて、例えば、その当時、アパートの配給を25年ぐらい、ずっと待っていた人がいるわけです。その順番待ちをしていて、やっと手に入りそうになったと思ったら、突然、誰か知らないプリピャチから来た人に先取りされてしまった。

もちろん彼らにも、われわれの状況に対しての同情はあったと思うんです。また彼らも最終的には別のをもらえたわけですが、それにしても腹立たしいというか、やっともらえると思っていたものが後回しになったことへの不満や、やっかみがあったと思います。

○川野 よくわかりました。先ほど来、いろいろお話を聞くと、原発事故が人生のなかで非常に大きな分岐点になったというか、とても大きな事故だったわけですね。

そういう原子力発電について、どう思われますか。原子力発電は必要なものと思われますか。それとも、もうあんな事故は嫌だからいらないと思いますか。

○ガリーナ 私は原発そのものに反対というわけではないんです。やはり、それは人類の進歩だと思いますし、進歩を押しとどめることはできないものです。こんにちでは火力発電所もいろいろ問題が出てきて、それだけではやっていけないわけですから、原発も必要なのではないのでしょうか。

しかし、きちんと安全の保安システムというものが、原発の稼働に伴っていなければいけない、安全が保証されていなければいけないと思います。そしてその前に、人の安全についてきちんと配慮しなければいけません。しかし、一方で科学は進歩していかなければいけないものですから、原子力そのものについて私は反対ではありません。

○川野 チェルノブイリの原発事故は、なぜ起こったと思いますか。

○ガリーナ 答えるのは、なかなか難しいです。なぜかと言いますと、いろいろな見方がありますので。

○川野 個人的な意見で結構です。

○ガリーナ 私個人で考えますと、人を原発の危険性から守ることが不十分であった。充分考えられていなかったし、またそれに対して配慮しようという意

欲もあまりなかったことが問題です。

また、保安の管理がきちんとしていなかったことプラス、チェルノブイリ型の原発を開発したアレクサンドロフという人は、原発は安全なものであって、ベッドの下にしびんを置いておくのと同じ程度のものだと思うと言ったそうです。これはいろいろな説がありますが、そのように開発した人自身が、原発に対していいかげんな態度で、本来取るべき、きちんとした真剣な扱いをしていなかったことが、それ以下の人々にも影響して、ずさんな管理になってしまったと思います。

そのようないろいろなことが重なって、大きな惨事を引き起こしてしまったことは、その構造上の問題もありましたし、運転にあたっての人的な問題もありました。もちろん、安全システムの不在ということも問題だったと思います。

○川野 ちょっとお答えしづらい質問かもしれませんが、先ほど、プリピャチ時代はとてもよかったというお話でしたが、ウクライナはソ連から独立したほうがよかったですか。

○ガリーナ それは正しかったと思います。正しかったかというご質問でしょうか。

○川野 いや、個人的に良かったと思うかどうかという意味です。旧ソ連時代は懐かしいですか。

○ガリーナ ノスタルジーということで言えばですね(笑)。ただ、それがあるといっただけではなくて、非常に強く感じています。つまり、過去に対する懐かしむ気持ちは大変強いです。ソ連の崩壊ということでは、それ自体は遅かれ早かれ起こっていたらと思う。その崩壊は、実際に起こったかたち以外の可能性もあったのではないかと思います。実際に起こった崩壊のプロセスは、いろいろあった可能性のなかで、最良のものではなかったと思っています。

ソ連内の共和国の結びつきは非常に強固だったので、実際に起こった崩壊の過程は、必ずしも望ましいものではなかったというだけではなく、それが起こったことによって、人々の生活状態が一気に何十年も前に戻ってしまうような結果をもたらしました。特に、それは経済に関してですが、悲惨なことです。

現在、ウクライナで起こっていることは、ウクライナのいまの政治家は、しかるべく国を運営していくことができていない、そういう能力がない人たちです。ことわざで、「国を指導する人は国民に見合った人」という言い方もありますが、私は必ずしもそれに賛成ではありません。

このウクライナについて、ご覧になればおわかりかと思いますが、ウクライナの人は一般的に善良で、非常に友好的な国民性です。それは日本の方もそういう傾向だと思います。日本の方々も本当に善良で、友好的で、人の悩みに応えるの方々だと思います。それでも、日本の政治家のほうがウクライナよりも自国民のことを考えていると思うのですが、ウクライナの政治家は、自分たちの取り分のことしか考えていません。もちろん、それは大変悲しいことです。

○川野 では、旧ソ連時代の政治は、非常にうまく、円滑に機能していたと思いますか。

○ガリーナ そうだと思います。それは間違いないです。もちろん、共産党の独裁があったのは、まぎれもない事実です。しかし、一方で規律というものがありました。人々は、これはいい、これはいけないということのわかまえがありました。例えば、「盗むなかれ」ということがあれば、それはあたりまえです。しかし、いまはちょっとでもすきがあるものは全部盗めという。

○一同 (笑)。

○ガリーナ いえ、本当ですよ。そういう風潮なんです。

そして、お金の流れというものは、国の経済を豊かにするほうに行かずに、政治家の懐にどんどん行っているという状態です。

○川野 なるほどね。

○ガリーナ しかも、それを隠そうともしていないんです。かつては、まだ秩序がありました。党は一つで、その党に従わなくてはいけないとなっていて、実際に従っていたわけですが、いまはいくつも政党があります。何という作家でしたか、昔の寓話詩で『白鳥と川カマスとザリガニ』というのがありますが、三者が争って、みんなつかまえて放さないんです。三者とも行きたいほうが別々だけど、誰もどこにも行けないというのが、いまのこの国の政治家の状態です。

私個人は、ソ連の崩壊を非常に残念に思っています。以前は自分の国に対す

る誇りがあって、愛国心がありました。

○川野 愛国心があったというのは、ウクライナに対するものですか、ソ連に対するものですか。

○ガリーナ ソ連に対する愛国心です。もちろん、ウクライナもその一部ではあったわけですが、われわれはソ連という巨大な国があるということは誇りでした。その国のなかで秩序があり、ソ連の首都はモスクワであって、モスクワのもとに多くの国家が緊密に結びついている。祖国という意識がありました。ソ連という祖国です。

○川野 1991年の崩壊時に、残るか残らないかという選択肢が、二つに一つしかなかったのですが、ウクライナ国民の総意としては、たぶん独立を望んだんでしょう。しかし、個人的なご意見としては、1991年当時、ソ連にとどまったほうがいいと思いませんか。

○ガリーナ いえ、そのときに国民投票があったのですが、私は独立に賛成に投票をしました。その当時は、みんな盛り上がっていて、もちろんウクライナが独立しても、そのときは石油もガスもあるし、農業もあるのだから、むしろ独立したほうが豊かになるのだと、みんな考えていました。ただし、そう思っていたのが、現実はその夢とは一致しなかったわけです。

ですから、私も賛成に投票しました。そのときは90パーセント以上が賛成だったんです。

○川野 わかりました。

○ガリーナ そのほうがよくなると、みんな思っていました。

○川野 私からの質問は、だいたいこれぐらいですが、今中先生、これまでの話も含めて何かあればお願いします。

○今中 われわれ日本人はヒロシマ・ナガサキを経験しています。そして、ヒロシマ・ナガサキとチェルノブイリは似たところもあるし、違うところもあります。ガリーナさんはヒロシマ・ナガサキに対して、どのようなイメージを持っておられますか。

○ガリーナ 共通点は大変大きいと思っています。先ほどおっしゃったとおり、ヒロシマ・ナガサキの被爆者の方もわれわれも、生活環境を一気に失ってしま

ったということがあります。そして、日本の被爆者の場合は、多くの方が短期間の間に熱線などで亡くなられたのですが、われわれの場合は、その後、時間がたってから出てきた影響が大きいわけです。

例えば、私の二人目の夫も事故処理作業者でしたが、彼も亡くなりました。また、この地区の被災者が住んでいる集合住宅をとってみると、やはり職員であったり、事故処理作業者だったりした男性が、たくさん亡くなっています。統計は、いま私にはわかりませんが、代表のタマーラ・クラスイツカさんが持っていると思います。元ブリヂャチ市民のなかでも、どのくらい亡くなったかというのは、かなりの数です。犠牲者の最終的な数ということでいえば、チェルノブイリにおいても多くの人が亡くなっています。

○今中 では、ガリーナさんは、放射能被害者として、ヒロシマ・ナガサキと共通のシンパシーを持っていらっしゃるということですか。

○ガリーナ はい、もちろんです。ここにも、これまで日本の被爆者の方が来られてお話をしたこともあるのですが、そのときに共通点が多いなと感じました。病気の内容にしても、同じような病気にかかっておられますし、甲状腺の問題、白血病の問題などですね。また、日本からそういう病気を理解して、例えば、甲状腺検診などに来ていただいて、おかげで早期発見などもできていますので、そういう日本の方の支援に対しても大変ありがたく思っています。

○今中 ですから、今日こうやってインタビューをさせていただいて、また日本の被爆者の方にガリーナさんのことを紹介して、お互いの理解が深まるようにやっていきたいとわれわれも思っています。

○ガリーナ もちろんですね。

○今中 別の質問ですが、ガリーナさんはチェルノブイリの被害者として、国からどのような補償なり特典をもらっていますか。

○ガリーナ 法律はいいものができているのですが、それが実際に施行されているわけではありません。法律では支援とかいろいろ決まっています、例えば、バスなどは無料で乗れます。しかし、それが必ずしも実際に生かされているわけではなくて、残っているものといえば、家賃・公共料金の半額で、これは大きいのですが、第1級障害者の場合には、2、3年に一度は無料の保養券がもら

えるぐらいのものです。

○今中 現金の手当は。

○ガリーナ 食費支援ということで、障害者の場合、食費手当が 326 グリブナ。

○今中 障害証明のようなものを持っていたら。

○ガリーナ 障害者である被災者ですね。

○今中 障害者と認定されていたら倍になる。それがなかったら。

○ガリーナ 障害認定のない被災者であれば、160 グリブナの食費手当がありません。

○今中 それと、あなたは事故の後、チェルノブイリで働いていましたが、被曝線量はわかっていますか。30 レム？。

○ガリーナ はい、検知器をつけて仕事をしていたので。そのときの勤務体制というのは、2 週間チェルノブイリ市で仕事をすると、あとの 2 週間はキエフに戻るという体制でした。そのときの仕事は、チェルノブイリ市内だけではなくて、原発のほうやプリピャチ市のほうにも行く仕事でした。

○今中 けっこう大きい、思っていたより大きい。

最後、事故が起きたときに、朝、自動車で避難されますけれども、そのときに発電所の煙とか何かを見られましたか。

○ガリーナ それは自分のアパートの窓からも見えていました。何か小さい炎と煙。それは事故の晩に、自分のアパートから多くの子どもたちも見ていましたし、27 日の避難のときも、バスでかなり近くを通ったわけです。だから、そのときにみんなの線量を測っていたら、かなり大きいのが出ているはずではないかと思っています。

金曜日の夜遅くというか、土曜日の午前 1 時ぐらいだったので、高校生ぐらいの子どもたちは夜遅くまでぶらぶらしていた子がいて、そういう子どもたちも外にいました。ほかに、事故の日に、ちょうど私が住んでいた集合住宅の管理人が、アルバイト的にプリピャチ川の砂地のところで砂を取る作業をしていて、その人は甲状腺癌で、わりと早く亡くなりました。やはり事故後、放射線のヨウ素をだいぶ吸ってやられたのではないかと思います。

砂を集めたというのは、例の 4 号炉の上から投下した砂ですね。近場で砂を

掘って、それをヘリコプターに乗せて運んでいった。集合住宅の管理人は、その作業をやって、かなりいいお金がもらえたということですが、きっと事故直後の放射性ヨウ素を吸いすぎたのでしょう。それは彼の奥さんから後で聞いた話ですが。

○川野 大変貴重な話をありがとうございました。長々と 2 時間以上もありがとうございました。

○ガリーナ いえ、そんなに長いということはありません。もっと時間がかかると思っていたくらいですから。

○川野 この記録は、すべてテープから起こして原稿にして、もう一度読み直して校正をします。そして、レポートのかたちにしてまとめます。

○ガリーナ 問題ありません。ありがとうございます。

アナトーリイ・ダヴィドヴィチ・マズル氏（男性）

実施日：2009年6月12日

○川野 それでは、今日、三人目のオーラルを始めたいと思います。

私たちは広島から来ました。私は広島大学の川野と言います。広島大学で原爆の研究、チェルノブイリの研究をしています。今回、チェルノブイリの被災者の方々から、チェルノブイリ事故で何があったのか、チェルノブイリ事故とはどういう意味があったのか、といったことを知るために、特に社会的な被害、そして被災者の方々の心の問題を検討したいと思っています。

これからいろいろとお聞きいたしますので、率直な気持ちを聞かせていただければと思います。

○マズル わかりました。

○川野 それでは、まず基本的なことを、いくつかお聞きします。氏名、性別、生年、人種、宗教、そして最終学歴、この6点をお教えいただけますか。

○マズル アナトーリイ・ダヴィドヴィチ・マズル。

○川野 生年は。

○マズル 1950年5月4日。59歳です。ウクライナ人で、宗教は正教、大学卒ですね。

○川野 どちらのほうで大学を終えられましたか。

○マズル キエフ工科大学です。

○川野 それでは、お生まれになってから現在までの簡単な居住歴と職歴を教えてください。

○マズル 生まれたのは1950年、ヴィーンヌィツャ州というウクライナの州です。生まれたヴィーンヌィツャ州で学校に入り、卒業して、その後、キエフ工科大学に入学したわけですが、最初はヴィーンヌィツャ州の工業専門学校に入りました。最終学歴のキエフ工科大学というのは、実はもう少し後で、この工業専門学校を卒業した後は仕事もしていました。1972年に工業専門学校を卒業した後、現在はロシアですが、当時はソ連で極東のコムソモリスク・ナ・アムールという町に行きまして、そこでタービンを運転する仕事をしていました。

○川野 極東の町で一番大きな町というのはどこですか。

○今中 大きいのはハバロフスク。

○マズル ロシアのハバロフスク州というところの、潜水艦とか軍用飛行機をつくる工場がある町で、アムール製鉄所という製鉄所などもあるところです。

そこで1974年まで仕事をして、1974年にウクライナのほうに戻ってきました。それはなぜかと言いますと、ウクライナから離れたソ連の東の端っこまで行ってしまったわけで、しかも両親に事前の断りもなく、専門学校を出て自分が勝手に決めて、ぱっと行ってしまったものですから、両親たちからも早く帰ってきてほしいというプレッシャーがありまして、自分も懐郷の気持ちがあつて戻ることにしました。

ちなみに、1972年から1974年までコムソモリスク・ナ・アムールにいたんですが、そこで働きながら大学にも入りまして、1974年にキエフに戻ってからは、学業の続きということでキエフ工科大学に入学しました。

失礼しました。話があちこちに飛んだのですが、キエフ工科大学に入学したというのは、実はもっと後で事故後の話です。1974年にウクライナへ戻ってきて、当時はチェルノブイリ原発が建設中で、プリピャチという町も建設中ででした。そこで原発のタービンの建設の仕事があるということで、そちらへ行きまして、そのとき、原発のタービン関係を建設している会社があったんですが、そこに入って原発建設の仕事に携わりました。

○川野 1974年の何月にプリピャチのほうに行かれたんですか。

○マズル 1974年の5月から原発建設の仕事に入ったんですが、その当時、プリピャチという町も、まだ完成はしていなかったんですね。しかし、私が行った当時、もう500人ぐらいは住めるような集合住宅が建っていました。まだ町として完成はしていなかったのですが、中心のレーニン通りとかもできていまして、町としての体裁を整えつつあるところでした。

○川野 1974年の5月にプリピャチに来られ、当時、どのぐらいの人が住んでいましたか。

○マズル いま考えてみますと、その当時、すでにプリピャチには5,000人から1万人ぐらいはいたのではないかと思います。プリピャチと原発の建設に来てい

た人たちというのは、若い独身の人が多くて、ソ連時代のコムソモール（共産青年同盟）という組織から派遣されて来ていた人も多かったんですが、まず彼らは就職と将来の住居が手に入るといことでプリピャチに来ていました。子どもたちが生まれて増えてきたのは数年後からです。

○川野 1986年当時、人口は5万人ぐらいたとお聞きしているのですが、1986年当時の人口、そして1986年当時の町が完成するのは何年ごろですか。

○マズル 事故当時も、まだ完全に町として建設が終わっていたわけではないんですが、主な町の施設、文化会館とか映画館とかレストランとか、そういったものは1980年ぐらいにはみんなできていました。ですので、1980年ぐらいには、だいたい町としてのかっこうが整っていたと言えるでしょう。

○川野 ありがとうございます。続きをお願いします。

○マズル 1986年まではプリピャチに住んで、その仕事を、ずっと続けておりました。

事故前後のことは、また詳しく話すと思いますが、簡単に言いますと、事故が起こった後、まず私は車で家族を先に避難させまして、自分はまたプリピャチに戻ってきて事故処理作業にあたりました。

その最初の仕事というのは、事故の後、ヘリコプターが砂や粘土を軍用のパラシュートで4号炉の上空から落とすという作業をしていたので、その砂や粘土を積み込む作業を自分はやっていました。これは、そのときの学者が、原子炉内の核反応を止めるという考えで、そういうものを投下したんです。

○川野 すみません。ちょっと確認しておきたいんですが、1986年4月の事故後、何日後ぐらいに、家族を連れて、どこに避難されたんですか。

○マズル 家族を車に乗せて避難させたのは、4月27日の夜です。プリピャチの一般の人たちは、4月27日の午後にバスに乗せられて避難させられたんですが、私は27日の晩に自分の車に家族を乗せまして、妻の両親が住んでいたポリスケという町に行きました。そのとき、娘は3歳ぐらいでした。

ちなみに、そのポリスケというところへは、事故後、プリピャチにあった行政のソ連当時の執行委員会という組織なども移動させられていました。

そのポリスケに行った後、娘や自分はキエフに行って入院したほうがいいと

勧められ、自分もいったん病院に入ったんですが、自分が感じるに、そんなに健康状態が悪いとも思えないので、いわば病院を脱走して職場に戻りました。それで、先ほど言ったヘリコプターに砂や粘土を載せる作業をしたのですが、その作業の後は、またプリピャチとかチェルノブイリ市で事故処理作業にあたりました。

○川野 1986年の4月27日にご家族を送って行って、ポリスケには、どのぐらいおられたんですか。そして、いつごろプリピャチのほうへ帰ってこられたんですか。

○マズル ポリスケにいたのは2日ぐらいでしょう。その後、キエフに家族を連れて行って、娘と自分は病院で検査を受けたわけですが、自分だけ戻ってきました。最初は、ポリスケのそばにキャンプがあって、そこには自分の職場の人たちが仮住まい状態でいて、その職場の上司が事故直後の事故処理作業についての指令を受けていたので、自分たちはそれに基づいて仕事をしておりました。

○川野 わかりました。

○マズル ちなみに、ちょっと事故前に戻りますと、事故当時にはチェルノブイリ原発の5号炉、6号炉は、まだ建設中だったんですが、そのタービンを設置する作業に関して私は班長をやっておりまして、自分が自分の班のスタッフを仕切って、その仕事をやっておりました。

事故は金曜日から土曜日にかけての深夜、土曜日の午前1時台に起こったわけですが、私はいま言いましたタービンの取り付けの作業だけではなく、クレーンを使った原子炉取り付けの作業などもやっておりましたので、原発内に何がどこにあるかという設備装置の構造は頭に入っているわけです。

ところで、このチェルノブイリの事故が起こる前にも、例えば原発の炉内で圧力が高まると、その蒸気を逃がすために弁を開いて、外部にぱっと放出するというようなこともありましたし、液状の放射性廃棄物なども流すようなこともやっていたんですが、職員とか一般住民に対して、それに対する情報は全然流されていませんでした。だから、いわばそういうかたちで、われわれは少しずつ放射能に慣らされていたわけです。

私が事故のときに住んでいたところは、プリピャチのなかでも学校とかプールとか、バザール、バスステーション、デパートなんかが固まっている地区で、それは原発に近いほうなんですね。原発との間には森がありましたけれども、その森というのは事故後、いまはなくなっています。

原発には近くて、比較的好く見えるほうなんです、そのとき自分は集合住宅の二階に住んでおり、月末ですので、ちょうど自分が仕切っていた班の仕事を締めて給料計算などをする時期で、自分は夜なべをして、その計算表をつくっていました。そして事故のときには、いつも蒸気を逃がしているときにするようなプーッという音が聞こえて、その音自体はプリピャチ全体でよく聞こえたと思うんですが、そのとき、それは爆発の音で事故だというふうには、すぐには思いませんでした。

そして、26日の朝7時ごろに起きて原発に行こうとしたところ、プリピャチから原発方面に行く例の橋のところで検問に遭い、ここからは行けないと言われました。バスとか、そういう特定の車しか行けないと言われて、自分はしかたがないので引き返し、別の回り道をして行こうと車で行っていたところ、ちょうど原発のほうから車が走ってきました。それは、その時点で倒れていた消防士とか、あるいは原発職員の人たちを運び出す車だったんです。

そのときは金曜日から土曜日にかけてですので、当直の職員とかはいたわけですが、当時建設中だった5号炉、6号炉の建設現場のほうでは、人はほとんどいなかったと思います。コンクリート打ちの作業をしているような人は、ひょっとして夜中もやっていたかもしれないんですが。

○川野 ちょっと待ってください。今中先生は途中で退出されますので、5号炉、6号炉のタービンの仕事をされていたということで、先生のご興味のあるようなこととか、関連するようなこととかあれば、いまどうぞ。

○今中 どのくらい被ばくされたんですか。

○マズル それは、また後で話します。

○今中 ちょっと時間がないので、一つ聞きたいことがあるんです。事故が起こって爆発が起こったとき、最初の火事というのは、それほど大きなものではなかった。26日のお昼の時点では、火事はほとんどなかった。その後、夕方ぐ

らいになって、さらに火事が大きくなったと聞いているんだけども如何ですか。

○マズル 火事の話について一般に言われているストーリーに対しては、自分はかなり懐疑的なんです。なぜかと言いますと、爆発が起こった後、4号炉の原子炉で何が火事で燃える可能性があるかという、タービン室の天井なんです。しかし私は、その天井に自動消火装置が付いていたのを知っています。つまり爆発後、そこから水が出たはずなんです。そこに消防士たちが行って消火活動をしたと言われていますが、そこで燃えるものといったら原子炉のなかから出てきた黒鉛ぐらいで、それは消火装置がはたらいたはずではないかと私は思っているんですが。

○今中 いまおっしゃった、夕方にさらに火事が大きくなったという話については、作り話の可能性もあると思います。というのは、先ほど言いましたように、燃えるべきものがないわけですね。つまり基本的に構造は鉄とコンクリートで、もちろん、非常な高温であれば鉄やコンクリートも溶けてしまうかもしれませんが、火事が大きくなって火の柱が立つようなことはあり得なかったのではないかと思います。

○マズル それで先ほど話したところの続きなんですが、橋のところで止められて、ここから先は行けませんということで、私は車で戻って、近くにあったガレージに車を入れて、橋の下をくぐって徒歩で原発の敷地のほうに行きました。そのときに、5号炉と6号炉に設置されるべきタービンが、シリンダーとかコンデンサーとかもすでに一式、2つ来ていたんですね。

そこへ行きまして、自分はこれまでの仕事の締めという仕事があったわけなので、状態点検などをして、そこに2時間ぐらいいたと思います。しかし、そのときにはすでに、野外に置いてあった設備にしみのような汚れが点々とできていたのに気が付きました。その自分がいた場所というのは、4号炉から200から300メートルぐらい離れているところですが、当然そのとき、その場所は非常に線量が高いというようなことは、私は意識しておりませんでした。

後で聞いたところによりますと、その2時間ぐらい自分がいたところの事故直後の線量というのは、1時間あたり80レントゲンぐらいだったということで

す。しかし、そのとき自分は放射線について特に何も感じませんでした。ただ、空気に変なにおいがあるなどと思って、そのときに着ていた服で鼻を覆うようなことはしたんですが、それ以外、特に何も異変は感じませんでした。

しかし、そのとき無意識にというのか、4号炉のほうには行かないで、また徒歩で車のところに戻り、それからうちへ帰った。そして、うちに帰ると小さい娘が飛びついてこようとしたんですが、そのときにも、あまり深く考えてというのではなくて、「ちょっと待ちなさい」と言って、服を脱いでシャワーを浴びました。だから、そのときにすごく危険を意識していたというのではなく、なぜか無意識的に自分はそういうことをやりました。

その後は、うちにいて、あとはバザールに買い物に行ったりして、町のほかの人たちと事故の話をしたんですが、そのときになると原発のほうには、まったく近づけない状態になっていました。

ちなみに、事故後、自分が2、3時間いた作業現場には作業小屋みたいなものがあり、そこに私物などを置くロッカーがあったんです。自分は事故後、ちょっと正確に覚えていないんですが、事故処理作業をしていた間に、1週間後だったか、1カ月後だったと思うんですが、そこにもう一度行って、自分の私物を取ってきたんです。しかし、そのときにはすでに放射線がすごく高いと知っていたので、本当に数分ぐらいで、ぱっと取って、ぱっと逃げたのですが、そのときは汗をびしょりかいているような状態でした。

しかし、そこに残されていた私物というのは、その時点では誰も取りに来ない状態だったので、取ろうと思えば、盗んで好きなようにできるような状態でした。事故直後、現場に行ったのは2時間から2時間半ぐらいの時間です。

○今中 2時か2時半に帰ったというのではないかな。

○通訳 いやいや、2時間ないし2時間半ぐらいの長さですね。

○マズル 11時ぐらいには、うちに戻りました。12時かもしれません。

○川野 80レントゲンというのは、どんなものなんですか。

○今中 80レントゲンだったかどうか、よくわからないんだけど、私はもっと高かったと思う。

○マズル 自分たちはプリピャチの原発に近いほうに住んでいたの、26日の

午後は、ほかの人たちと一緒に、外で原発のほうを見ながら、「これは何が起こったんだろうね」というようなことを話し合っていました。

○今中 26日の晩の話で、また火事が強くなったという話を聞いているんだけど、それはご覧になっていないですか。

○マズル 自分は見えていません。

○川野 先生、よろしいですか。

それでは、ちょっとまた話を戻したいと思います。1986年以降にキエフに帰ってこられて、その後の居住に、もし変化があれば教えていただきたいと思います。1986年以降の仕事の内容も含めて、お教えいただければと思います。

○通訳 事故後、現地で事故処理作業にあたられたわけですがけれども、どのぐらいの期間でしたか。

○マズル 1年ぐらいだったと思います。当初は、先ほど言ったヘリコプターに砂とか粘土とか鉛とかを積み込む作業をしていたんですが、事故後ひと月ぐらいたった時点から、その間はほとんど雨がなかったんですが、雨が降り始めた時期に、プリピャチ市内や原発の敷地内の雨水が、プリピャチ川にそのまま流れ込んで汚染しないようにということで、下水を特別な貯水池みたいなところにポンプで集めるという、下水の改造工事みたいなこともしていました。

ヘリコプターで鉛とかを運んだときの作業の話ですが、事故直後の作業の組織というのは、その当時の共産党や政府のほうで委員会をつくって、その作業を組織していました。しかし、必ずしも、それがきちんとできていなかった。

と言いますのは、鉛を積んで落とすという話があったんですが、その鉛というのは、スペインから輸入したような特別な鉛で、それも60キロぐらいの塊を、パラシュートと一緒にヘリコプターが持ち上げて落とすというようなことをやっていたので、当然パラシュートが破れてしまったりしていて、自分はそんなものではだめだという進言をしたのですが。

○通訳 ちょっと話が細かくなってしまったので、もうちょっと飛ばしてもらいましょうね。

○川野 それで結局、そこに1年いて、いつキエフに帰ってきたんですか。まだ、そこまでいっていないんですか。

○通訳 いってないです。ここから話が余談に入っているんですが。

○マズル キエフで住居を配給されたのは1987年です。

○通訳 何月かは正確に覚えていらっしゃいますか。

○マズル いや、正確に覚えていない。最初にキエフであてがわれた住居は2DKでした。自分たちは3DKが欲しかったんですが、その2DKのアパートの部屋の中を、念のため放射線検知器で測ってみると、ある壁のある個所に1,000マイクロミリレントゲンという、すごい値が出る。「これはどういうことだ。自分たちは、ただでさえ被ばくしているのに、こんなところに入れたい」と苦情を述べて別のところに移してもらいました。

なぜ、その壁がそんなに汚染されていたかと言いますと、ちょうどその建物は、事故後ぐらいに仕上げをしていた建物で、おそらくモルタル塗りなんかをするときの砂に、飛散した汚染物質が入っていたのではないかということでした。

事故後、先ほど言ったヘリコプター関係の作業を5月14日ぐらいまでしていたんですが、そのころに涙が流れて止まらないとか、顔の鼻のあたりがすごく腫れて、むくんでしまっているという状態になったので、念のためにとキエフに連れていかれて、1カ月ほど入院治療をしました。5月15日から入院しました。

1カ月ぐらい入院していた後、さらに1カ月、サナトリウムで保養し、その後、またチェルノブイリ原発のほうに戻って行って、3号炉の運転が停止していたんですが、その運転再開のための作業にあたりました。

○川野 わかりました。

○マズル その後、1986年の事故以降、1990年ぐらいまで、いろいろな事故処理作業をしていました。1987年にキエフで住居をあてがわれた後も、交代制でチェルノブイリ市に行って、2週間仕事をして、また2週間キエフに帰ってくるというやり方で、先ほど言った3号炉の復旧作業とか、原発職員が仮に住むための仮設住宅の建設とか、ずっといろいろな作業をしていました。

1990年になると、本来の自分の原発のタービン設置作業というのが、ロシアのオリョールという町でありまして、そちらのほうに行きました。

○川野 ロシアの。

○通訳 ロシアの。

○マズル ちなみになんですけど。

○川野 ちなみに、何ですか。

○マズル これは、1986年から1990年まで事故処理作業をしていたと言いましたが、その間、実は自分が元仕事をしていたコムソモリスク・ナ・アムーレという町で火力発電所の建設があつて、それにも出張で行きました。そのときに、ウラジオストクから日本に行くツアーがあつて、自分は2週間ぐらい日本に行ったんです。そのツアーで、東京・京都・長崎とか、あまり詳しくは覚えていないんですが、長崎で被爆した鐘のある教会とか、そういうところも見た記憶があります。

その後は、最終的には1992年ぐらいまで、ずっと恒常的にはなくて、ほかのところに出張したりしながら、ゾーンでの仕事というのもやっていました。1990年以降になると、もう事故処理作業という言い方ではなくて、ゾーン内の一般的な作業という認識だったのですが、自分のほかにもいろんな人がいまして、15日交代の勤務作業で都合がいいのでやっている人もいたし、汚染地域内での食費は全部ただになるとか、そういう理由で行っている人もいました。しかし、やはり放射能が嫌で、そういう仕事は嫌だという人もいました。

自分の場合は、たぶん最後にそのゾーンでの仕事をしたのは1992年ぐらいで、その後はやっていません。本来の自分の専門のタービン設置という仕事は、その後、ウクライナで需要が少なくなってきた、あまり関係ないような仕事もしていました。

その後、あまりキエフで仕事がなかったので、いろんなところに行ったのですが、1997年にチェルノブイリ事故と関係のある障害者資格というのを取りまして、障害者等級としては2級です。1999年から、キエフ市内の第6火力発電所というところで働き始めたんですが、そこで働いているときに上司とうまくいなくて、結局は首を切られてしまいました。その首を切られた理由というのは、この障害者資格を取ったことと関係しておりました。

首を切られたのは2000年なんですけども、上司とのあつれきの起こりという

のは、タービン設置の手順について、そのとき、自分は自分のイニシアティブで、コンピューターにプログラムを全部入力して行って、そのパターンをつかって、作業の各過程を入力して行って誰でもわかるようにしようという提案をしたんです。それで、自分でお金を出して職場にコンピューターを入れたんですが、上司はそれが気に入らなくて、「そんなことをするな」と言って、結局、そのコンピューターも取り上げられてしまいました。

そのとき、辞めさせられる理由として、こちらでは労働手帳というのがありまして、どこかで働くときに、何年からどこそこで、どういう肩書きで働いたかということが全部書き込まれるんですが、その労働手帳に、私は2級障害者であって、こういう仕事には適さないというような記載をされてしまったんです。それで2000年に首になりました。

○川野 わかりました。2000年以降はどうされていきましたか。

○マズル 職を辞めさせられた後、法的には、首を切られたことに異議があれば、1カ月以内に裁判を起こさないといけないことになっているんですが、そのときは労組も自分の側につかないで、非常に強引に辞めさせられまして、労働手帳というのも職場で管理するものなんですが、郵便で自分のところに突きつけられたんです。それで自分は、こんなのを認めるわけにはいかないと言って、またそれを送り返しました。

しかし、その辞めさせられたときに、最初の言い方では、「2カ月ぐらい、おまえは頭を冷やせ」と言われたんです。これは、いま思えば、その1カ月が過ぎてしまうのを待っているということだったのですが、それで2カ月たって行ったところが、「もうおまえは、うちとは関係ない」という言い方をされて、労働手帳はその後、2000年に首になったのですが、9年間、いまだに自分のところに戻ってきていません。

また、給料も5,000グリブナぐらいが未払いになっていたので、自分はこの未払賃金に関する訴訟を起こしました。その結果、精神的なダメージを受けたことに対する補償も含めて、14,000グリブナを払うという裁判所の決断が出ました。それで、そのお金は戻ってきたわけですが、私はさらに、これは不法解雇であるから自分を職場に復帰させろということで別の訴訟を起こしました。

最初、自分の住んでいる地区の裁判所では勝ったのですが、向こうが控訴しまして、その裁判の決定が取り下げられまして、最高裁に持っていかうとしたんですが、もう最高裁は受け付けないと言うのです。もう一度、今度は職場がある地区の裁判所へ持っていったのですが、そこでも同じパターンになりました、最終的にはだめだというので、自分は三度目の正直で、もう 1 回やろうとしているんです。

そんなこんなで、この 9 年間、自分の労働手帳は、元の職場でずっと押さえられたままという状態になっています。

○川野 労働手帳がなければ仕事はできないんですか。

○マズル 基本的には、こういう特殊事情なので、いまは労働手帳がないけれども、どこかで働こうと思えば働けないことはないんです。例えば運転手とか、自動車修理工場で働くとか、建設労働だとか、そういうことをやろうと思えば理論的には可能なんです。

妻は、年金だけではときどき生活が厳しいこともあると言うんですが、私はポリシーの問題として、元の職場が不当に自分から労働の権利を奪っていると思うのです。憲法に書かれている労働する権利、それから職場を選ぶ権利を奪っているということで、これが不当であると訴えたいのです。ですから、首相とか大統領などにも陳情を書こうと思っているんです。

だから、自分が働かないというのは、働けないからというのではなくて、信義の問題なんです。

○川野 わかりました。少しだけ確認させてください。1986 年以降は、ご家族はずっとキエフに住まわれたんですか。

○マズル はい、そうです。

○川野 わかりました。

○通訳 ご家族のことですが。

○マズル 妻は 1949 年生まれ、娘は 1982 年生まれでして、いま妻と一緒に住んでいます。娘は国立のキエフ大学を卒業した後、いまドイツにいまして、レーゲンスブルクの大学に行っています。ドイツの国会とかで実習していますが、妻の話によれば、彼女も将来は帰ってきたいようなことを言っているというこ

とです。

先ほどの話の続きで、元の職場との係争は、自分は今度、欧州裁判所に人権侵害の例として訴えようと、いま準備しています。というのは、自分が首になったときに、会社のほうが冤罪をでっち上げて、自分は3日間ぐらい警察に拘留されていたようなこともあって、これは明らかな人権侵害だということで、いま訴えようとしているんです。

○川野 いま、ご家族はそういう状況ということですね。

○通訳 はい。

○川野 わかりました。1986年の4月に、基本的にはキエフのほうにご家族で避難していらしたということですが、いまからいくつか質問します。1986年のプリピャチ時代とキエフ時代という二つの対比のなかでお聞きしますので、お答えいただきたいと思います。

まずは、プリピャチ時代の住居の状況を教えていただければと思います。

○マズル プリピャチ時代は1DKで、独身のときに配給を受けたアパートです。その後、結婚して子どももできたので、自分は申し込んで、もっと広いアパートをあてがってもらうように待っているところでした。

○川野 1986年ということですね。

○通訳 はい。

○川野 わかりました。

○マズル その狭いアパートですけど、家具はブルガリア製のいい家具があって、車も新しいジグリーという車を持っていました。その前に、父がくれたモスクヴィチという古い車もあったんですが、その事故のときは新しい車に乗っていました。しかし、これらも事故によって全部失ってしまったわけで、国はそういうものに対する補償というのは何もしてありません。

○川野 現在の広さは2DKでよろしいんですか。

○マズル 現在は3DKのアパートに住んでいます。

車については、法律では車を持っていた被災者は、補償として別の車をあてがわれるという文言があるんです。自分は事故時、古いのと新しいのと2台持っていたわけですが、1台分はその後、与えられて、法律によれば、もう1台、

1986年当時の価格見積もりで車を買えるように戻してもらわなければいけないところなんです、それがずっとそのままになっているので、自分はこの件についても争おうという考えがあります。

○川野 わかりました。プリピャチ時代といまの生活と比べて、食事の内容で何か変化がありますか。プリピャチ時代と同じようなものを、いまでも食べていますか。

○マズル 食事の内容は、特に変わったということはないんです。と言いますのは、事故前も自分は当時として平均的な収入でしたし、現在も、もちろん服とかについては当時と比べて節約しているんですが、食事について、当時もそんなにぜいたくをしていたわけでもありません。自分はもともと、肉とか高価な食品はあまり食べないほうで、お酒もあまり飲みませんので、現在、お魚とか野菜とか果物で食事をとるぶんには、特に不自由していることはありません。こちらの平均的な食事ということで、そういう意味では事故前とあまり変わっていないと思います。

○川野 わかりました。ちょっと5番目に飛びますけれども、プリピャチ時代、平均的な月収だったとおっしゃいましたが、当時どのくらいもらっておられましたか。その額は充分でしたか。

○マズル 事故当時の自分の収入は、月に250ないし280ルーブルでした。これにボーナス的なものも入れると、ひょっとしたら月に300とか350ぐらいになっていたかもしれませんが、事故直後の事故処理作業をしていたころというのは、かなり給与もよかったので、先ほど家具とかも全部なくなったと言いましたけれども、それも事故処理作業をしている間に、また新しいのを買うこともできました。

○通訳 すみません。また話が余談に入ってしまったんですが。

○マズル 娘がまだキエフの学校でドイツ語を勉強していたときに、その学校でドイツ人の先生がおられてドイツ語を教えていたんですが、その先生とわれわれは仲良くなりまして、彼は1987年製の日産の車を持っていたんです。

彼がキエフでの仕事期間を終えてドイツに帰るというときに、1990年ごろだったと思いますが、彼はその車を私に譲るということで車を置いていって、そ

の車に付随する証明書関係のものも置いていったんです。それで、きちんとドイツの役所のほうから証明書ももらって、私に譲渡するということになったんですが、ウクライナのほうでその手続きをしようとしたところ、認めてもらえなくて、自分のところにあるのはあるんですが、それを使用することが、いまだに許されていないということがあります。

その後、いろんな役所へ行って、ああでもない、こうでもないをやっているんですけども、まだ解決していない。これも併せて欧州裁判所に訴えようかなと思っています。

○川野 わかりました。当時の生活は 300 ルーブルぐらいの月収があったわけですが、その額というのは充分でしたか。

○通訳 ちょっといまの話になってしまったんですが。

○マズル 現在、自分の年金額は 2,000 グリブナでして、これは障害者資格もあるということで、以前はもう少し少なかったんですけども、徐々に増えまして、現在では自分の年金額は 2,000 グリブナです。

○川野 奥さんは。

○マズル 妻は 500 グリブナの年金額です。なので、合わせれば 2,500 になります。

○川野 被災者として食事の援助というのがありますか。

○マズル 食費補助というのは、250 グリブナぐらいもらっていると思います。

○通訳 いまの話が続いてしまっているんですけど。

○川野 いいですよ。

○マズル 妻の年金を合わせて、いまの生活と言いますと、家賃と公共料金を払って食費に充てると、あとはたいして残らなくて、やはり着るものとかはぎりぎりまで着て、被災者への人道支援とかで、リサイクルの衣服なんかをもらったりするときもありますが、新しいものを簡単に買える状態ではない。ときどき、アパートの改装などのお金もかかるので、家電製品のテレビとか冷蔵庫の新しいのを買いたいと思っても、それはちょっと難しくて、ましてや新しい車などはとても買えないという状態です。

○川野 いま、さまざまなご不満をお聞きしたんですけども、プリピャチ時

代に生活上の不満という、何かありましたか。

○マズル 抽象的なのですが、不満ということ言えば、人生で何も不満がないという人はあまりいないと思うんです。当時はソ連時代のシステムのなかでみんな生活していたわけで、それはその人の性格にもよると思いますが、それが不満な人もいるし、不満でない人もいたと思うんです。

ソ連時代のいろんな問題というのは、例えば、私は当時、タービン関係の専門家ということ言えば、国内でも数少ない専門家であったと思うんですが、そういう自分のような専門家が働いている原発のなかでも、いろいろな闇の不祥事がありました。例えば発電機のコンデンサーというのは、冬季に凍結しないように、不凍液としてスピリッツを使うんです。それは数百リットル単位で使っていたわけですが、それがごまかされて、要するに飲んでしまうというケースもあったんですね。

不満ということ言えば、上司との衝突ということもあったと思うんですが、現在のウクライナでは、「何も手に職がない、仕事ができないやつは上役になれ」と言われているぐらいで、議員になったり、市長になったりしろと。何もできずに口だけしゃべるやつが上にいくというように、いまは言われています。

○川野 ありがとうございます。少し質問を変えて、現在の健康状況と、自分自身の健康に対して不安を感じることがあるかということについて、お聞きしたいと思います。

○マズル 健康被害のことで、プリピャチ時代のことを、ちょっと思い出しています。事故前のことなのですが、プリピャチにいたとき、健康状態は基本的には悪くなかったんですが、やはり職場でのあつれきとか、家族間での問題などもあって、十二指腸潰瘍という診断がついたこともありました。また、仕事が忙しかったり、そのほかにストレスがあつたりして頭痛になったりということはあるんですが、その程度でした。

事故後のことですが、被ばくによる健康への影響ということ言えば、私はお医者さんと話したことがあるんですが、被ばくした後の影響というのは、そのときの心理状態、精神状態にもかなり影響されるのではないかという話をしたことがあります。例えて言えば、ウオツカを飲むときに、そのときの精神状

態によって、軽く一杯飲んだだけでも酔ってしまうこともあるし、また別の状況では一本飲んでも平気というようなこともあるように、被ばくと精神状態は関係しているのではないかと感じたことがあります。

自分は、先ほど言った1時間80レントゲンとかいうところに行ったり、あるいは原発の近場でヘリコプターに鉛とか砂を積み込むような作業をしたんですが、そのころ、事故処理作業をする人たちに活性炭粉末とかを飲ませたりして、体内に入った汚染物質を吸着させるとか、そういう名目で配られたりもしていたので、それがよかったのか。あるいは、自分は前から陸上競技をやっていたんですが、事故処理のころにも、よく自分で意識的にジョギングをして、汗をかいて体内の汚染物質を出そうとか、そういうことをやっていたのがよかったのかもしれない。

自分が見ていると、そういう作業のときに非常に精神的にナーヴァスになっていた人たちというのは、その後1、2年ぐらいで癌になったり、亡くなってしまった人も多くあります。

基本的に重篤な病気の診断というのは、いまはありません。ただ、よく頭痛がしたり、関節が痛むとか、リウマチ的な症状があるとか、あるいは前立腺肥大がある、走ったときにひざの関節が痛むとか、そういうことはありますけれども。それから、鼠径（そけい）部のヘルニアがあって、それはいま手術すべきか、どうすべきかということを考えているところなんですけど、幸いにして大きな病気はないです。

それは先ほど言ったように、自分は食事で肉とかアルコールなどはあまりとらずに、マカロニとかチーズとか野菜とか、そういうもので健康的な食事をしているので、それもいいのかもしれませんが。

○川野 健康状態に対する不安というのはないですか。

○マズル どちらかと言えば不安はない。こういう問題については、自分は前向きに考えるようにしていますので、不安を持って、いつもめそめそしているということはありません。

○川野 娘さんがいらっしゃいますよね。娘さんの健康は不安ではないですか。

○マズル 彼女も小さいときにプリピャチで被ばくしましたので、その影響が

あったのかもしれませんが、小さいころはわりと病弱でした。しかし、ある年齢を過ぎると、そういうこともあまりなくなりまして、いまは幸いに不安はありません。

○川野 わかりました。最後にいくつか現在のことをお聞きして終わりたいと思います。

原発事故というのは大変大きなものでしたけれども、この原発事故というもので自分の人生を狂わされたという意識とか認識というのがありますか。

○マズル 私の人生への影響ということで考えますと、この原発事故で決定的に変ったというふうには、自分は思っていない。

一方、事故そのものについての私の個人的意見なんですが、この事故というのは偶発的な事故ではなくて、やはり何か裏があったのではないかというふうに、自分は個人的には考えています。ひょっとしたら、アメリカで言う CIA（アメリカ中央情報局）のようなものですね。

○川野 KGB（ソ連国家保安委員会）？

○マズル ええ。当時のそういうようなものが仕組んだことではないかという疑惑を、自分は持っています。

なぜかと言いますと、このチェルノブイリ事故は地球的な規模の巨大な事故なわけで、これは単なるヒューマンファクターだけで起こったわけではないと思います。構造的問題もあったわけです。そうしたら、どうしてそういう構造的に問題のあるものを、わざわざウクライナの首都であるキエフの近くにつくったのかということも疑問に思えてきます。

どの国の国民も、誰かほかの国に牛耳られるというのは我慢できないと思うんですけれども、当時、ウクライナ国内の原発で働いていた人というのは、基本的にロシアで教育を受けた専門家が多かったわけです。チェルノブイリ原発で実験がおこなわれていたわけですが、そういう実験なども中央のロシアのほうからの指令でやっていたわけですね。

しかも、その当時、そういう原発の所長とか重職に就いていた人というのは、みんな KGB のチェックを受けていたわけで、彼らだけではなくて、原発内でも KGB 職員がにらみを利かせていたわけです。

○川野 いま、いろいろと聞かせていただいた事故当時の話であるとか、その後の話であるとか、裁判の話も含めて、そういった話というのは、これまで誰かにされたことはありますか。

○マズル あまり関係ない人には話しません。仲間うちでは話すことがあるけれども。

例えば、事故後にどういうところで作業をして、どのくらい被曝線量があったかとか、そのとき誰が指令を出したかということが、後で年金を計算する基礎になったりするわけですね。そういうことについて、各人、確認をさせられることがあるんですけれども。

それで、いま自分が思うに、事故処理作業時の被ばくだけではなくて、事故前にも、自分たちは1号炉や2号炉のタービン室にも入って仕事をしていましたし、点検とか修理もおこなっていたんですね。また、5号炉、6号炉のタービン設置作業も原発のすぐそばでしていたわけなので、いまにして思えば、その当ても当然、被ばくしていたわけです。

年金のことですけれども、実はチェルノブイリに関連のある障害者ということであれば、法律によると1級障害者なら最低年金の10倍、2級なら8倍、3級なら6倍という法律があるんです。しかし、自分の場合は規定の額をもらえていないわけです。

というのは、自分の場合、先ほど言った年金算定の元になるデータというのは、事故前に働いていたときの給料を元に算定されているので、本来なら、自分はチェルノブイリの2級障害者なのでから、最低年金を500とすれば4,000グリーブナぐらいはもらっていなければいけないわけですが、実際はそうっていない。一方、実際に現地でほとんど仕事をしていないような人でも、地位の高い人などは数字を操作して年金額を増やすようなことをやっている人物もいるので、非常に不当だと思います。

なぜ、こういうことになっているかといえば、ロシアでも汚染地域とか事故処理作業をした人について補償の法律があるわけで、ロシアでは被災者は年金額もいいし、車の補償などもきちんとされているんですね。それは、やはりウクライナの被災者と比べて数が少ないということもあって、ウクライナでは法

律どおり、きちんと補償しようとする、予算にものごく負担がかかるということもあって、最低限に切り捨てるという方針なのだと思います。

○川野 わかりました。1986年以降で原子力の事故にかかわること、例えば避難したとか、キエフに帰ってきたとか、そういったことを日常的に思い出すようなことがありますか。

○マズル いま考えると、事故直後のことなどは、もちろん忘れてはいるわけではないんですが、夢に見たようなというんですか。つまり、いまの生活とは、また別の人生の一コマというか、そういう感じがします。それは自分の性格からなのかもしれません。

というのは、先ほどお話したように、プリピャチに残してきたものといえ、アパートと家具と車ぐらいで、自分はそれが特に惜しいというわけではないんです。あえて言えば、ずっと原発でしてきた仕事の結果というのが、無駄というのではないんですが、そこに置き去りになってしまった。

自分は、そこで働いて経験を得たことが無駄になっているとは思わないんですが、プリピャチの人が出ていった後に入って、火事泥棒的にもものを持っていった連中がいるというだけではなく、原発の設備なども、4号炉なんかで破壊されたものを不法に持ち出して、スクラップ金属として流して売ったりとか、そういうこともされている。よその国では、そんなことはあり得ないと思うんですが、残念ながらそういうことが起こってしまって、そういうことに対する憤りというのはあるんですが、自分個人の人生として悲しく思い出したりとかということはありません。

○川野 わかりました。原発被災者として、何か差別とか偏見とかというのを受けたことはありますか。

○マズル 個人的には、特に差別とか偏見の記憶はないんですが、一般的な話で言えば、キエフに被災者たちが住居を与えられて移り住んだとき、前に入るはずだった人から、面白くないという扱いをされたということは聞いています。

また、しいて言えば、事故後に、以前働いていた極東のコムソモリスク・ナムーレに行って事故の話をしたときに、自分は見た目はそんなに被ばくしたことでダメージを受けていないので、みんな「ああ、それは大変だね」とは言

ってくれるけれども、それ以上は気を入れて聞いてくれない。そういうことは、しいて言えばありました。

もう一つ思い出すのは、1986年から1987年ぐらいにかけて、被災者に住居の提供があったとき、基本的に、希望すれば、ソ連中どこでも住居を割り当ててもらえるという可能性はあったのですが、当時のレニングラードとモスクワはだめということがありました。

考えてみれば、どうしてそれがだめなのかというと、おそらく当時、そういうことなら、みんなモスクワに行きたがるといけないから、それはだめということにしてキエフにしたのではないかと。その結果、多くのロシア出身の人もキエフに住んでいますけれども。

制限をしなれば、当時、ソ連の首都だったわけですから、モスクワとか、あるいはレニングラードとか、そういうところに住めるのならといって、プリピャチの人はみんな、そちらに行っていたかもしれない。

○川野 わかりました。ところで原子力というエネルギーは私たちに必要だと思いますか。

○マズル やはり必要だと思うのですが、もちろんそれは、例えば日本とかフランスとかのように、きちんと最新の機器を用いて、国の安全とか将来というものをしっかり考えている人が運営・運転するという体制のもとです。自分が思うに、ソ連時代のように、例えばロシアからウクライナに来て、ウクライナのことなど、あまり考えていないような連中が、ずさんに管理しているという条件では、もちろんいけないと思います。

いまのウクライナのエネルギー事業として、ウラン鉱山というのがウクライナにあるんですね。だから、それを開発すれば、原発の燃料とかも充分供給できるのですが、きちんと国がそれをやろうとしていない。だから外国の助けを借りて、そういう開発をしていけば、ウクライナでも原発を発展させる可能性はあると思うので、自分としては、やはり将来的には必要であると思います。

○川野 わかりました。大変長い間、ありがとうございました。これで終わります。

この内容については、報告書とか論文というかたちで使わせていただくこと

があるかもしれません。よろしいでしょうか。

○マズル 構いませんよ。私はいま時間がありますので、今日お聞きになったことで、また疑問がおありになったり、追加してお聞きになりたいことがあれば、いつでもお会いしますのでおっしゃってください。

○川野 ありがとうございます。大変貴重なお話を長い間ありがとうございました。また何かお聞きしたいことがあれば、ご連絡させていただきます。

ゲンナージイ・イヴァーノヴィチ・ムズィチェンコ氏（男性）

実施日：2009年6月12日

○川野 始めさせていただきます。今日はお忙しいなかありがとうございます。

○ムズィチェンコ どういたしまして。

○川野 私たちは広島大学から来ました。原爆被爆の問題を研究しています。特に社会的な被害と心的な問題を研究しています。今回はチェルノブイリの被災者の方々の、そういった被害の実態を聞きたいと思って、皆さんにインタビューをしています。

これからいろいろお聞きしますが、率直なご意見を聞かせていただければと思います。今回の調査のテーマは、1986年4月の原発事故を起点にして、その前と後を比べることによって、チェルノブイリの被災者の方々に何が起こったのかということを知ることです。

まずは基本的なことからお聞きします。氏名、生年、人種、宗教、学歴までお教え下さい。

○ムズィチェンコ 名前はゲンナージイ・イヴァーノヴィチ・ムズィチェンコ。1963年8月22日生まれです。現在は45歳。ソ連時代はロシア人と書いていましたけれども、いまはウクライナ国籍でウクライナ人です。母がロシア人、父がウクライナ人です。前はロシアに住んでいたこともありまして、そのときはロシア人だと思っていましたが、いまはウクライナ人です。

○川野 そういう人は多いですか。

○ムズィチェンコ たくさんいますよ。私はウクライナとロシアのどちらの人にも敬意を払っていますが、いま現在はウクライナに住んでいて、いわば第二の祖国として大事に思っていますので、いまの自分の意識としてはウクライナ人です。

○川野 どちらが第二の祖国なんですか。

○通訳 ウクライナがですね。生まれたのはロシアなので。

○川野 わかりました。

○ムズィチェンコ 宗教は正教ですね。中等専門教育というのが学歴です。

- 川野 これは日本で言えば何ですか。
- 通訳 専門学校卒とか。
- 川野 どちらの学校を出られたんですか。
- 通訳 直訳しますと建設学校という専門学校ですね。
- ムズィチェンコ クレーン運転手というコースで勉強しました。
- 川野 次に1963年以降の居住歴、職歴、学校歴を教えてくださいなと思います。
- ムズィチェンコ 生まれたのはウクライナのドンバスです。
- 川野 ドンバスはどこにあるんですか。
- ムズィチェンコ 石炭が採れるところですが、ウクライナの東部です。父親は炭鉱夫でした。ドンバス生まれなのですが、1972年になりますと、彼は健康診断の結果、炭鉱夫をやっていた関係か、じん肺であるということで、これ以上、そこにいるのは健康によくないということで、母親の実家であるロシアのカフカース地方のほうに引っ越しました。
- 川野 カフカースですか。
- 通訳 コーカサスとも言います。
- ムズィチェンコ 1982年に専門学校を卒業しまして、徴兵で軍に入りました。その軍というのは海軍で、カムチャツカの基地で従軍しておりました。国境警備の海軍ですね。1984年まで海軍に勤務しておりまして、徴兵期間が終わった後でカフカースに戻ったのですが、その母方の実家というのは田舎の村で、ここでは仕事もありません。そのとき、父親の親戚がウクライナにたくさんいたわけですが、いま、プリピャチという新しい町ができていて、そこでは専門学校で勉強した建設の仕事もあるし、新しい町だから住居の配給も早くあるよということを知りまして、プリピャチで働こうというふうになりました。
- 川野 プリピャチに行かれたのは、いつですか。
- ムズィチェンコ そのプリピャチのすぐそば、チェルノブイリ市に近いザリツィヤという村に父方のおばあさんが住んでいまして、自分は徴兵の時期を終えてカフカースに戻ったのですが、そのとき、すでにプリピャチの話を聞いていたんです。ですから、軍の勤めを終えて1週間か2週間ぐらいしかカフカー

スにはいなかった。

そして、すぐにプリピャチを見に行きました。自分で見てみたところ、きれいな、若者の多い町で、将来、発展の可能性も大いにありそうだとということで気に入って、プリピャチで働こうと決めて、またカフカースに戻り、今度は本格的にプリピャチに引っ越しました。1984年のことです。

○川野 わかりました。ちょっと話が脱線するのですが、当時の徴兵は何年ですか。

○ムズィチェンコ 徴兵期間というのは、当時、基本的に3年でしたが、この極東の国境警備隊というのは当時7,000人ぐらいの人数がおりまして、そのカムチャツカの大きな基地にいたわけですが、そのとき、9カ月は養成期間でした。

自分の場合は、軍艦の工兵としての教育を受けたのですが、もちろん軍艦の操舵員とか、整備工とか、いろいろな人を養成していたと思います。そして、その養成期間が終わって警備隊に勤めました。その警備隊というのは、もちろん、その当時はソ連全体で、中国との国境にもあるし、カスピ海、黒海、バルト海のほうにもあったわけですが、極東の国境警備隊が一番大きな基地でした。

○川野 1984年にプリピャチに移住されて、それから1986年までいらっしたんですか。

○ムズィチェンコ そうです。

○川野 そこではクレーンの仕事をされていたんですか。

○ムズィチェンコ 私はプリピャチで、まずクレーン運転手として住宅建設の仕事をしたかったんです。というのは、そういう人には優先的に住居が与えられるという当時のシステムがありましたので。しかし、その住宅建設のほうは間に合っているということで、そのかわり、プリピャチ川の港があるのですが、当時、そこで原発の建設物資などを川で運んできて陸揚げするという仕事がありましたので、それをやり始めて、結果として原発の建設の仕事をやるようになり、事故時まで、その仕事をしておりました。

○川野 それ以降の話をお願いします。

○ムズィチェンコ 1986年4月の事故後、1989年1月まで汚染地域で事故処理作業にあたりました。1989年1月に解雇されて、それは自分の意図とは違って

いたのですが、いま考えると、そのとき辞めていてよかったかもしれません。
というのは、かなり汚染の激しいようなところでも作業をしていましたので。

○川野 1989年以降は。

○ムズィチェンコ その後はキエフで仕事をして現在に至ります。

○川野 いまはどういった仕事をされているんですか。

○ムズィチェンコ いま現在は駐車場の警備員をしています。

○川野 それは1989年1月以降、ずっと同じ仕事をされているんですか。

○ムズィチェンコ 1989年1月に事故処理作業を辞めて後は、キエフで仕事を
探したのですが、そのときはクレーン運転手としての仕事が見つかりまして、
それをしばらくはやっておりました。その後、基本的にキエフ市内の建設現場
でクレーンの仕事をしておりまして、たまにはキエフ市外で、例えば汚染地域
の人を移住させる村での建設作業をやったこともありますが、主にはキエフ市
内での仕事でした。

このクレーン運転手の仕事は1995年までやっておりました。その後は駐車場の
警備員になりまして、現在に至っております。

○川野 ありがとうございます。1986年の4月にプリピャチを離れるときの
家族構成を教えてくださいたいと思います。

○ムズィチェンコ 1985年に結婚しておりまして、事故時、妻は妊娠しており
ました。妻の生年は1964年です。

○川野 奥さんのご出身はどちらですか。

○ムズィチェンコ 彼女はキエフ州のチェルノブイリ地区のチャパエフカとい
う村の出身です。

○川野 そのとき、奥さんはプリピャチで働いておられたんですか。どうやっ
て会われたんですか。

○ムズィチェンコ 最初の出会いは偶然で、バスの中だったんです。そのきつ
かけというのは、私はプリピャチに来た当初、寮に住んでいまして、やはり原
発建設現場で運転手をしている男と同室だったんです。そのとき、妻はチェル
ノブイリ市内の店で働いておりました。それで、先ほど言った寮で同室の運転
手の実家へバスで行ったのですが、妻の実家というのは、そこに行く途中にあ

りまして、同じバスに乗り合わせたんです。

○川野 わかりました。では、1986年当時はムズィチェンコさんと奥さんが住まわれていて、4月の段階で奥さまは妊娠何カ月だったんですか。

○ムズィチェンコ 子どもが産まれたのは秋です。

○川野 何月ですか。

○ムズィチェンコ 10月です。

○川野 それでは、これから1986年の4月、プリピャチ時代の話と現在の話を並行して聞いていきますので、質問にお答えいただければと思います。

プリピャチ時代は、最初に寮におられて、結婚とともにアパートに移られた。そのアパートの大きさとかは覚えておられますか。

○ムズィチェンコ 結婚した後は、私はプリピャチで自分のアパートの配給を待っていたのですが、結婚までに間に合わなかったので、チェルノブイリ市内の一戸建ての家を借りて家内と住んでおりました。木造のあまり大きくない家でした。

○川野 現在はいかがですか。

○ムズィチェンコ 現在は2DKのアパートに住んでおります。

○川野 ご本人と奥さまと、お子さまは。

○ムズィチェンコ 現在、妻と息子がおります。

○川野 1986年の10月生まれの息子さんですか。

○ムズィチェンコ はい、1986年生まれの息子です。

○川野 では、プリピャチ時代、寮にいらっしゃるときは寮から仕事場まで行かれて、結婚後はチェルノブイリ市から仕事場まで行かれたということですね。

○ムズィチェンコ 当時、チェルノブイリ市からプリピャチ行きのバスは30分おきぐらいに出ておまして、距離的にも原発から17キロぐらいのところなので便利でした。

○川野 1日に何時間ぐらい働いていましたか。

○ムズィチェンコ そのときは当直交代勤務で、働く日は1日12時間。そういう勤務態勢でした。

○川野 1日12時間働いて、日勤一休ですか。

○ムズィチェンコ 例えば1日目が朝8時から夜8時までとすると、2日目の夜8時から3日目の朝8時まで、そして3日目は休むという態勢でした。

仕事の内容というのは、砂利とか、その他すべて、原発建設に必要なとされる資材を運ぶという仕事です。

○川野 それをクレーンで運ぶということですね。

○ムズィチェンコ はい。

○川野 当時、奥さんは働いておられましたか。

○ムズィチェンコ はい。妻は事故のときも、その店で働いていたばかりでなく、事故後もそのまま働いていました。というのは、チェルノブイリ市というのは、事故後すぐには避難はおこなわれなくて、その5月1日、2日というのはメーデーの祝日でしたので、それを祝う必要もあって、どこにも行くなと、きちんと仕事をしていなさいという指令がありました。

○川野 それで結局、キエフには、いつ避難されたんですか。

○ムズィチェンコ 自分については、事故後チェルノブイリ市で待機させられました。というのは、自分の職場の上司もチェルノブイリ市内に住んでいて、私がチェルノブイリ市にいるのを知っておりましたので、いつ必要になって呼び出しがかかるかもわからないから、どこへも行かないでいるようにと待機の指令がありました。

○川野 それで、いつまでいたんですか。

○ムズィチェンコ その後、自分が待機していた間も、情報はずっと隠ぺいされておりまして、実際、何が起きているのかということについては何もわかりませんでした。

それで私は妻に、彼女が妊娠していたということもあって、早くどこかに避難したほうがいいのではないかと何度か提案しましたが、彼女はどこへも行きませんでした。

○川野 それは、その事故の影響によって放射線が漏れていて、体に悪いんだといったような認識があったんですか。

○ムズィチェンコ 実は海軍で勤務していたときに、カムチャツカのすぐそばに原子力潜水艦の基地がありました。そのころ、原子力の危険性というものに

ついては耳にしておりました。

ちなみに、その事故が起こったときの事情として、ちょうど、その事故の起こった 26 日は妻の姉妹の誕生日で、私は妻と一緒にキエフへ行っただけです。そのとき、妻の兄弟は原発で働いているのですが、彼は事故が起こった 26 日に当直の予定だったので、たまたまほかの人に代わってもらっていた。そして、彼と一緒に当直するはずだった人たちは、その後、みんな亡くなったんです。ですから、彼はその責任を感じて、仲間がみんな亡くなったのに自分が持ち場を離れるわけにはいかないと行って、その事故後も、ずっと原発の 2 号炉で働いておりました。それで彼も亡くなったのです。

○川野 カムチャツカで放射線の影響を知っていたという話でしたが、事故があつて、悪い影響があるんだというようなことを奥さんに話をし、それでも奥さんは、なぜ退避することに承諾しなかったのですか。

○ムズィチェンコ 先ほど言いましたように、彼女の働いていた店のほうで、このメーデーまではどこにも行ってはいけないというような指令があつたので嫌がっていたのですが、ついに私は妻を説き伏せまして、バスでキエフの姉妹のほうへ行きなさいということで行きました。

○通訳 いつごろでしょうか。

○ムズィチェンコ はっきりは覚えていないんだけど、5月の初めだったと思います。

○川野 わかりました。1986 年の事故の前の話ですが、1 カ月の収入はお二人でいくらぐらいありましたか。

○ムズィチェンコ 当時のルーブルで言いますと、私はそんなに稼ぎがよかったわけではないのですが、自分の給料は 250 ルーブルぐらいで、妻が 120 から 130 ルーブルぐらいもらっていました。妻のお母さんも近くの村に住んでいて、彼女も家計の足しに補助してくれていたりで、たくさんではないけれども、何とか生活はできていました。

妻の実家が肉や卵、ジャガイモやニンジンなども持たせてくれて、それも生活の足しになっていました。

○川野 では、生活に困っていたというわけではありませんね。2人で 370、380

ループで生活はできたということによろしいでしょうか。

○ムズィチェンコ はい、足りていました。いつもレストランやカフェに行っていたわけではないですから。

○川野 ちょっと話が横道にそれるのですが、当時のチェルノブイリ市とプリピャチ市というのは、全然違った感じの町でしたか。

○ムズィチェンコ やはり、当時のチェルノブイリとプリピャチ市というのは非常に大きな差がありまして、プリピャチは自分にとって夢のような町でした。白くて清潔で、若い人の町という感じでした。周りは森に囲まれていて、川も流れていて、非常に美しいところでした。

○川野 やはり、ずっとアパートの配給を待っていましたか。

○ムズィチェンコ はい。

○川野 わかりました。先ほどの話に戻りますが、現在の収入状況を教えてください。

○ムズィチェンコ 私が現在、駐車場の警備をしてもらっている給料というのは800グリブナです。

○川野 奥さまは働いていらっしゃいますか。

○ムズィチェンコ 働いています。

○川野 どんな仕事をされていますか。

○ムズィチェンコ ガスのメーター検針の仕事です。

○川野 お二人で月収はどのぐらいありますか。

○ムズィチェンコ 2人合わせると、いま2,000グリブナぐらいでしょう。私は本職のほかにもバイトをしていますので。もちろん、たいした額というわけではありません。

○川野 2,000グリブナで1カ月の生活というのはどうですか。大変ですか。

○ムズィチェンコ やはり薬に困っています。私は糖尿病なのですが、インシュリンが非常に高いです。いま現在はドイツのインシュリンを使っています。ウクライナ製のは質が悪くて、いま現在使っているドイツのインシュリンは、ひと月あたり800グリブナかかります。

○通訳 だから、駐車場で働いている賃金は、それに消えてしまうということ

ですね。

○川野 1986年生まれのお子さんは、いま何をされていますか。

○ムズィチェンコ 息子はお店の仕事をしています。

○川野 では、いまのところ医療費が大変ですね。800グリブナというのは。

○ムズィチェンコ いまは無償では治療はできませんので。きちんと効くようないい薬ということになると、病院のほうで無料で出してくれるということはありません。インシュリンにしても、ウクライナ製の質の悪いものだと効果がないので、ずっと血糖値も気を付けて計ったり、食べ物にも気を付けたりしているという状態にならざるを得なくて、それでは生活しているとは言えないわけです。

○川野 わかりました。チェルノブイリにお住まいのところに、大きな不安とか、心配事とかありましたか。

○ムズィチェンコ いや、特に不満なことはありませんでした。やはり将来の展望もありましたし。というのは、自分は港で建築資材を陸揚げしたりという仕事をしていたのですが、そのとき、やはり原発の5、6号炉というのは建設中だったわけで、原発の建設現場で働いているクレーンの人は、もっと給料がよかったわけです。500とか600ルーブルぐらいの給料をもらっていましたので、自分も将来的には、そういう仕事に移りたいなという希望を持っていました。

○川野 ということは、チェルノブイリ市にいて、将来はプリピャチに住んで、原子炉で仕事をするというような将来の設計があったんですか。

○ムズィチェンコ もう少しいい稼ぎで、いい生活をしたいなという気持ちがありました。

○川野 では、原発事故が仮になれば、プリピャチ市に住んでいたというふうに、いま思えますか。

○ムズィチェンコ 喜んで働いていただろうと思います。

○川野 話が少し変わりますが、糖尿病以外で現在の健康状態はいかがですか。何か病名とかがついている病気はありますか。

○ムズィチェンコ 甲状腺の結節ができていまして、これは癌の疑いを言われたこともあったのですが、細胞診をして、いまのところ、手術の必要はないと

ということです。

○川野 細胞診は、ここで取られたんですか。

○通訳 武市先生です。

○川野 ああ、そうですか。僕はよく会いますので言っておきます。

○ムズィチェンコ 本当にいい方ですよ。

○川野 甲状腺以外には何か。

○ムズィチェンコ そのほか高血圧がありますけれども、これは事故処理作業をしていたころから、かなり血圧が上がっていきまして、汚染地域で作業していたころは鼻血が出るようなことも、よくありました。

○川野 では、現在の疾患としては、糖尿、甲状腺、高血圧ということですね。

○ムズィチェンコ はい、そうですね。この3つが主な病気です。

○川野 これらの病気は放射線の影響だと思いませんか。原発事故の影響だと思いませんか。

○ムズィチェンコ 100パーセント、そう思っています。

○川野 糖尿もそうだと思いませんか。

○ムズィチェンコ それは、やはりストレスとか気苦労が常にありましたので、そういうことも関係しているかなと思います。ちなみに徴兵検査のとき、私はすぐ海軍に受かったわけです。ということは、当時、健康診断をきちんとクリアしていなければ、そういうところには行けなかったもので、ロシア語の言い方だと「クマのように健康」という状態でした。

○川野 奥さまの健康状態はいかがですか。

○ムズィチェンコ 妻は、正確には覚えていませんが、やはり9年から10年前に甲状腺の癌ということで、右葉か左葉か、半分を切除しています。その手術後、やはり妻は心臓とか神経の支障がありまして、あまり体調はよくないです。

○川野 いまも、あまり体調はよくないですか。

○ムズィチェンコ ええ。

○川野 お子さんはいかがですか。

○ムズィチェンコ 息子も問題がないわけではないのですが、背中とか足が傷むので、足湯をして痛みを取ったりとかもしていました。そういうふうの問題

がないわけではないのですが、彼はスポーツ好きでサッカーをやったりしているので、非常に病弱で困るというわけではない。まあまあでしょう。

しかし、徴兵検査には通らなかったので、徴兵には行っていません。

○川野 徴兵検査は、そんなに厳しいですか。

○ムズィチェンコ それはソ連時代のほうが、もっと厳しかったといえば厳しかったのですが。徴兵検査委員会というのがありまして、かなり年季のあるお医者さんたちが厳しく調べて、その結果、潜水艦とか上陸部隊とか、いろいろ仕分けをしていました。いまはそれほどではないにしても、やはり体調がよくないという場合には徴兵は免除になります。

○川野 そういった現在の健康状態が、ますます悪くなるのではないかというような将来の不安、健康に対する不安というのはありますか。

○ムズィチェンコ それはもちろん不安です。

○川野 次は現在の状況についてお聞きしたいのですが、1986年4月の原発事故によって、自分の人生がすごく大きく変わってしまったというような思いがありますか。

○ムズィチェンコ はい。大変大きく変わったと思うし、その変わり方も、もちろんいい方向ではありませんでした。正直なところ、キエフに住みたいはなかったんです。もし、いまプリピャチは汚染がなくなって住めるよと言われたら、歩いてでも行きたいぐらいです。

○川野 やはり、それはプリピャチという町が、夢の楽園で非常に豊かであったということですね。そこに行けば仕事もたくさんあって収入もいい。プリピャチという豊かな町に、ずっと魅力を感じていたんですか。それは1984年に越してこられる前にそう思っていましたか。それとも1984年以降の話ですか。

○通訳 1984年にプリピャチについて知ったので、そうだと思うんですが。徴兵の後ですね。

○ムズィチェンコ そうです。自分の考えでは、プリピャチみたいなどころには、サナトリウムなどをつくるべきだったと思うのです。非常に空気もよくて、森に囲まれて、魚もキノコも豊富に採れるようなところだったんです。

お聞きになったかどうかわかりませんが、プリピャチに原発ができる前のこ

とですが、チェルノブイリという町は、ユダヤ人が非常に多いところだったんですね。そういうふうに非常に環境がいいということもあって、もともとルーツのないユダヤ系の方は、そこにたくさん集まっていったということなのです。

それで、その地元の古老の話によりますと、原発の建設が始まってから、それまでチェルノブイリ市内に住んでいたユダヤ系の人というのは、みんな引越して、よそへ移ってしまったということです。

○川野 それは政府の指示で移ったということですか。

○通訳 いえ、そうではなくて、自分たちが勝手に移ったということです。

○川野 事故後、1986年4月26日以降で、非常に印象深い出来事、つらい体験、そういったものがありますか。

○通訳 事故後、事故に関係のあることですよ。

○川野 そうですね。

○ムズィチェンコ 例えば、事故後、自分が事故処理作業をしていたときですけども、これが4号炉としますと、ここからあまり離れていないところに、石棺をつくるためのコンクリートを練る作業場をつくる作業をされていて、クレーンを使っていたのですが、そのときに自分が使っていたクレーンというのは、その事故のとき、5号炉、6号炉の建設用に使われていたものなんです。

そのクレーンは多少洗ったぐらいで、そのままそこに使っていたのですが、その作業をしているときには、何度も瞬間的に気を失うということがありました。それは、きっと線量も高かったのだらうと、いま思うのです。

○川野 そういったことを、いまでも時々思い出したりしますか。

○ムズィチェンコ はい、いまでも思い出します。自分がそういう現場で働いていたときは、軍服を着た軍人などが非常に多く現場に導入されていて、自分の印象としては、あそこの現場で働いていた2年ぐらいの間、ずっとそこで戦争をしていたかのような感じなんです。ただ、その敵が何だったのかというのは、誰にもよくわからない。

○川野 では、そのときのいくつかのシーンというのが、ときどき走馬灯のごとく、頭の中でぐるぐる回ったりということもあるんですか。

○ムズィチェンコ ありますよ。その現場で軍のヘリコプターが飛んでいたりと、

装甲車が走っていたり、そういうときの印象が、ぱっと浮かんできます。いまは、もちろんそうでもないのですが。

その当時、全部で2年半ぐらい事故処理作業をしていたのですが、その後、キエフで仕事をするようになってからも、例えば道を渡るときに、車をふっと見るとひかれてしまうのではないかという恐怖感に襲われたり、そんなに車が近くに来ているわけではないのにですね。そういういわれのない恐怖感というのは、しばらくありました。それはだんだん消えていくのですが。

○川野 事故後の処理でいろいろな作業をされていたと思うのですが、そういったいくつかのシーンというか、情景を夢で見たりすることはありますか。

○ムズィチェンコ よくあります。原発とか、そこでやっていた仕事については、よく夢に見ます。

○川野 それは怖い夢ですか。

○ムズィチェンコ 恐怖です。

ちなみに、1988年には、4号炉の周りをコンクリートの塀で囲むという作業をしました。自分ともう一人、ペアで働くクレーン運転手と一緒に作業をするわけです。そのコンクリートの塀をめぐらすという作業は、4号炉そのものから100メートルないし150メートルぐらいのところ、ずっとやっていました。

○川野 それで、そういった情景を思い出すということですか。夢に見たりするということですか。

○ムズィチェンコ 夢に見ることもあります。これは、もう消えることのない記憶だと思います。

○川野 目覚めたら、すごく恐怖心みたいなものが、わき出てきたりといったようなことがありますか。夢を見た後に、どういう感じがしますか。

○ムズィチェンコ 抑鬱感でしょう。

○川野 いま考えれば、事故処理なんかしなければよかったと思っていますか。

○ムズィチェンコ ほかの仕事があれば、それはやっていたと思いますが、だからといって後悔する必要はないと思います。あったことは、あったこととして。

○川野 わかりました。

1986年に息子さんが生まれておられます。当時、1986年には放射線の影響とかは知っていらっしゃったということですが、子どもさんが生まれるときに放射線の影響があるのではないかといったようなことで、不安に感じたりしたことがありましたか。

○ムズィチェンコ はい、もちろん不安はありました。

○川野 いまでも、子どもさんの将来の健康に対しては不安ですか。

○ムズィチェンコ もちろん不安はあります。

○川野 原子力発電については、どう思われますか。必要だと思いますか。

○ムズィチェンコ もちろん、それは必要だと思いますよ。

○川野 チェルノブイリの事故というのは、なぜ起きたのだと思いますか。

○ムズィチェンコ 一般的に聞いている話として、また妻の兄弟からも聞いているのですが、事故のとき、実験がおこなわれていたということです。

○川野 その実験が失敗したということですか。

○ムズィチェンコ はい。純粋な実験が事故のときもおこなわれていたということですし、私が聞いている限りでは、4号炉というのは、軍事用のプルトニウムをつくるというのも運転の目的であったそうです。あのころ、こういうことを部外者に言っていれば銃殺されていたと思いますけれども。

○川野 要するに原子力というのは、ああいう事故も起こり得るということだと思うんです。原発は必要だと、原子力はエネルギーとして必要だということですが、仮にああいった事故の可能性が、今後またあるとしても原子力は必要ですか。

○ムズィチェンコ やはり必要だと思います。というのは、例えばガスとか石炭を燃やすという火力発電にしても、いずれは枯渇してしまう燃料ですし、環境汚染という負荷も大きいわけですから。そういうことを考えると、やはり原子力というのは必要だと思うのです。もちろん、もっとプロフェッショナルな人が運転管理にあたり、監査もきちんとやり、賢い人の運営に任せるといふのであればなりません。

○川野 要するに、安心・安全が一番ということですね。

○ムズィチェンコ その安全と、それから職業意識があるということが大事で

す。

○川野 最後の質問です。チェルノブイリの被災者であるということ、そして事故処理などにあたられて放射線を浴びたといったようなことで、他人から、差別とか偏見とかを経験したことがありますか。

○ムズィチェンコ ありました。われわれは理解してもらえないというところがあります。

○川野 それは誰からですか。

○ムズィチェンコ 例えば、アフガニスタンの戦争を経験した人、アフガニスタンではなくても、どこかで紛争の現場を経験している人というのは、われわれには理解できないところがあるわけです。それと同じように、われわれのような経験をしていない人、目で見て、実際に感じていない人には、やはりわれわれのことは理解できないと思います。

○川野 どういった場面で、その偏見とか差別というのを感じたことがありますか。

○ムズィチェンコ 一般のキエフの人が、「あなたたちはプリピャチから来て、いろいろ恩恵があつて、特典があつていいですよ」という言い方をされるのですが、では、いまどんな特典があるのかといえば、市バスが無料だとかというぐらいです。保養券とかも以前は出たのですが、いまはないに等しいですし、医薬品でも、被災者に無料で出るといふものが、いまはどんどん減っている状態です。

ですから、そうやってうらやましそうに言う人たちが、では自分たちが汚染地域に行って仕事をするかといえば、誰もしないと思うんです。それにもかかわらず、そうやって「あなたたちはいいよね」というような言い方をされます。

○川野 そういった特別な、当事者しか知らないような体験、つらい体験をされたわけですが、そういった体験を誰かに話したいというような思いはありますか。話してもわからないということであれば、そう思われぬのかもしれませんが、如何ですか。

○ムズィチェンコ たぶん必要のないことだと思います。というのは、誰でも自分の問題を抱えているわけで、もし私が被災者以外の人に、自分はこういう

被災者で、事故処理の作業をして健康を冒してしまったのだと言ったら、予想される答えというのは「私たちがあなたを行かせたわけではないんだよ。自分が行きたくて行ったんでしょ」という、つまりまったくの無関心ですね。

現実問題として、そういう被災者の治療に特化した放射線医学センターというところがあるので、自分もそこで年に一、二度ぐらいは入院加療を受けているのですが、そこでも使い捨て注射器などもないという状態ですので、持参していかなければいけないし、もちろん医薬品も有料です。しかも、医者がきちんと診断して薬を投与してくれるには、医者に心付けを渡さなければいけないし、看護師さんに入院中きちんと面倒を見てもらうには、看護師にも何か渡さなければいけないというのが実情です。

この国にとっては、健康な人でなければ、もう必要がないと言われているようなもので、病人であれば人でないかのような扱いです。これが正しいこととは思いません。

○川野 正しくないと思います。本当に貴重なお話をありがとうございました。私が用意した質問は以上です。今中先生のほうから何かお聞きになりたいことがあればどうぞ。

○今中 私のほうからいくつかあります。もちろん、ゲンナさんはヒロシマとナガサキのことはご存じだと思いますけれども、いつごろから、どのようにしてヒロシマ・ナガサキのことを知りましたか。

○ムズィチェンコ 最初は学校の授業で聞いたのですが、そのとき起こったことを考えてみますと、アメリカのやったことというのは、自分たちの頭では理解できない、理解を超えた悲惨なことだと思います。

○今中 ヒロシマ・ナガサキの被爆被災者は、いまでも放射能障害に苦しんでおられる方がたくさんおられますけれども、そのへんはチェルノブイリの皆さんと似たような共通点があると思います。そのことはどう思われますか。

お互いに経験を交流して親しくなって、いろいろな問題を共に解決していく、共に考えていくというようなことは考えませんか。

○通訳 そういうことは可能だと思いますか。

○ムズィチェンコ はい、可能だと思いますし、そういうことができれば、自

分たちもうれしいと思います。

○今中 別の質問ですが、リクビダートル（事故処理作業員）として働いていて、あなたの被曝線量はどれぐらいか知っていますか。

○ムズィチェンコ 具体的な線量というのは、当時、非常な機密でして、それを実際に本人が知るといのは特別な場合、例えば急性放射線障害になったとか、それで年金算定の根拠が必要だとか、そういう人は数字を知る可能性があります。

しかし、われわれの場合、クレーンで作業をしているときに線量計をもらって、それを決まった場所に置いておくわけです。例えば汚染された車両なんかを廃棄する、そういうところで1時間半ぐらい働いたこともあるので、線量はかなり高かったはずですが、その積算線量計を持ち帰って係に提出しても、「たいしたことはない。問題ない」というような言い方で、具体的な数字については何も言ってくれません。

そのころ、そういうデータについては、KGB（ソ連国家保安委員会）がすべて管理していました。当時、KGBというのは非常に権力を持った組織でした。

○今中 だから、個人の記録としての線量をご存じではないんですね。

○ムズィチェンコ 「何も問題はない。結構だ」という言い方しかされたことがないので。

○今中 それで1年に一回、入院して検査してもらっているんですね。

○ムズィチェンコ 放射線医学センターというところの健診のときに、骨にストロンチウムがどのぐらい残っているかとか、そういう検査はあるそうですが。

○今中 それで入院するんですね。いつも行っていますか。

○ムズィチェンコ 春、秋はセンターに毎年入院していますが、それは治療というよりも、ただベッドをあてがわれて寝ているだけです。

○今中 最後の質問です。リクビダートルとして登録されていると思うのですが、そのことで、いま現在、受けている特典とか特別な手当は具体的には何と何でしょうか。

○ムズィチェンコ いまお見せしますが、この被災者証明書を見せると地下鉄などの市内公共交通機関は無料になるというのがありまして、あと家賃、公共

料金が半額です。

○通訳 あと食費援助というのがありますよね。

○ムズィチェンコ 食費手当というのものもあるけれども、額もたいしたことはないし、遅配もあります。

○川野 大変貴重なお話をありがとうございました。こういったオーラルの記録を残すというのは、とても大事なことだとわれわれは思っています。

○ムズィチェンコ まだ、ほかにもご質問があればどうぞ。別に急いでいませんので。ご関心があれば、実際にどういうことがあったかというのをお話しします。こんなことを言ってはまずいのではないかと行って、なかなか言わない人もいるのですが、私は何も恐れるものはありませんから。

○川野 こういった記録を通し、被災者の立場からチェルノブイリ事故とは何だったのか、ということを考えていきたいと思っています。そのためにも、こういった記録というのは、しっかりまとめて公開する必要があります。

この成果というか、ここでお聞きした内容をまとめて報告しようと思っているのですが、この内容を出してよろしいですか。

○ムズィチェンコ はい。

○川野 この内容について、疑問とか、さらにお聞きしたいこと等がありましたら、またご連絡差し上げるかもしれませんよろしいでしょうか。

○ムズィチェンコ 喜んで。本当に率直な気持ちですけれども、われわれは日本の方々のことを愛しています。本当に勤勉でまじめで、心のきれいな方々であると思っています。一般にウクライナでは日本の方は尊敬されているのですが、われわれ元プリピャチの住民というのは、その二倍ぐらい尊敬しています。

○川野 そういった日本人であるように努力します。ありがとうございました。

ゲオルギー・イヴァノヴィチ・ラダトコ氏（男性）

実施日：2009年12月17日

○川野 これからお一人目へのインタビューを始めたいと思います。

私たちは広島・長崎の原爆研究をしている者です。同じ放射線被ばくの被害者であるチェルノブイリの人たちを対象にして、チェルノブイリの人たちがどんな被害を被ったのかを、いま研究しています。非常に大きなテーマですが、みなさんからいろいろなことをお聞きして、チェルノブイリ被害とはいったい何だったのかを、考えてみたいと思っています。

特に1986年の事故前、そして1986年の事故以後の話を中心にお聞きしたいと思っていますので、少し長い時間をいただくことになってしまいますけれども、よろしくお願いたします。

このようにテープを録らせていただきます。そして写真も何枚か撮らせていただきますけれどもよろしいでしょうか。

○ラダトコ はい。

○川野 あと一点ですが、ここでお聞きした内容を論文あるいは報告書で一部引用させていただくことはあると思います。ご了解いただけますか。

○ラダトコ お役に立つようなことがありましたら使っていただいて構いません。

○川野 ありがとうございます。では早速、始めたいと思います。質問要項の1番から8番まで、基本的なことをお聞きしたいのですが、氏名・性別・生年月日・人種・宗教・学歴・出身地、さらにはプリピャチを離れる時の家族状況および現況。この8つについてお教えいただければと思います。

○ラダトコ 苗字がラダトコ、名前がゲオルギー、父称はイヴァノヴィチです。1943年10月10日生まれです。人種はウクライナ人、宗教はキリスト教の正教です。最終学歴はハルキウ工科大学電気エネルギー学部卒業、卒業資格は電気技師です。

生まれたのはウクライナのボルタヴァ州です。もっと細かく申し上げますか。

○川野 では、お生まれのポルタヴァ州の町はどちらですか。

○ラダトコ クストロヴィークッシー村の生まれです。1961年に日本でいう高校を卒業、そして徴兵に行きました。もっと細かく言いますと、1961年に高校を出た後、一度専門学校に入ったのですが、その専門学校の途中で徴兵に行き、徴兵から帰ってきてから大学に入りました。徴兵時期は1962年から1965年でした。大学は1965年から1971年までハルキウの工科大学で勉強しました。

○川野 ハルキウというのはどのあたりにある町ですか。

○通訳 ハルキウというのはウクライナの東部の町です。

○ラダトコ その後、私は1971年から1974年までは配電会社で電気技師としての仕事をしていました。そして、1974年から事故後の1989年まではチェルノブイリ原発で仕事をしていました。1989年の医学鑑定委員会の結論で、これ以上、原発のゾーン内での労働はしてはいけないという結論が下されて原発での仕事を辞めました。私は1986年までチェルノブイリ原発の職員をしていて、事故後、プリピャチからキエフに引っ越してきました。

その後、1989年から2001年までは、キエフに事務所がありました原子力安全委員会です仕事をしていました。2001年から2006年までは原子力関係の仕事に戻りまして、それは国営の原子力発電の会社で、ウクルエネルゴという会社で働きました。

○川野 その会社はどちらにあるんですか。

○ラダトコ 私はキエフのオフィスで働いていました。2006年6月まで、そこで仕事をしていましたが、それ以後は働いていません。

事故当時、妻と2人の娘がおりました。事故の時の年齢ですが、上の娘は15歳、下の娘は6歳、妻は1947年生まれですので38歳か39歳ですね。

○川野 家族の皆さんは、現在どのようにされていますか。

○ラダトコ 現在は、妻と結婚した下の娘の家族と同居しています。

○川野 基本的なことを確認したいのですが、1971年から1974年まで勤められていた配電会社の場所はどこですか。

○ラダトコ ポルタヴァ州のある地区に電気の配電をする会社でしたので、ポルタヴァ州にありました。

○川野 もう一点。1974年にチェルノブイリに移られて仕事をされますよね。チェルノブイリに仕事に来られた理由というのがあれば教えていただきたいのですが。

○ラダトコ 大学の専攻でもあるし、本来は発電所での仕事がしたかったので。しかし、当時は卒業後の就職規定制度というのがありまして、卒業後、まずこの配電会社に行かされました。そこで3年間任期を終えた後で、やはり発電所での仕事をしたいということで行きました。妻も同じ専門でした。

○川野 チェルノブイリには自分の意志で行かれたということですね。

○ラダトコ その時、父は反対したのですが、自分は前から発電所で働きたかったので自分の意志で行ったわけです。

○川野 なぜお父さまは反対されたのですか。

○ラダトコ まず両親はポルタヴァ州にいたため、私に遠くに行つてほしくないというのもありました。配電会社にいた時点で、私は自分のアパートもあったし、なぜわざわざ遠い所に行くのか、と父からは反対されました。それと父は原子力という言葉にも少し引っ掛かっている、危ないのではないかと思つていたようですが、自分は反対を押し切っていました。

○川野 行く前にチェルノブイリについて、情報としてどういうことを知っていましたか。

○ラダトコ 1971年当時ではチェルノブイリ原発は建設途中でした。原子力発電所がどういうものかというのは、もちろん大学でも勉強して知っていましたし、就職する前に実際にそこへ行って自分で見てみると、なかなかいい環境だと思つてひかれたんです。

○川野 そのひかれた理由というのは、自分の専門に近いということ以外に何かありますか。例えば給料がいいとか、そういったことは情報として知っていましたか。

○ラダトコ いえ、給料というよりも、やはり仕事内容が自分にとって興味のあるものということが理由です。もちろん給料も当時の平均よりはよかったです。前職の配電会社でも自分はそれなりの給料をもらっていました。前の会社で3年働いていた間に、配電会社の地区支部の副支部長になっていましたか

ら。

だから転職するにあたっては、給料が目当てというわけではなかったです。むしろ転職当初は、それまでの給料に比べて45パーセントぐらいは減りました。その後、原発が稼働し始めてから徐々に給料も上がっていったのですが、転職当初は、給料は減りました。

○川野 1974年当時のプリピャチというのは、どういう感じでしたか。

○ラダトコ 1974年当時というのは、まだプリピャチの町自体も完成していませんでした。プリピャチの最初の建物ができたのは1971年です。私が最初にプリピャチに行ったのは1973年でしたが、その時は原発当局に行って、自分はここで働きたいという希望を話してそこに連絡先を置いてきました。その後、具体的に原発職員の募集が始まって、私が呼ばれたんです。最初は妻と娘をポルタヴァに残していきました。プリピャチは森も川もあって、とてもきれいな所でした。

○川野 では、原子力発電所のほうで働いていらっしやった際の具体的な仕事の内容と、事故後の仕事の内容を教えてくださいませんか。

○ラダトコ 1974年6月に原発で働き始めた時の私の肩書きは、原発の運転にあたる上級技師です。この後、昇進がありまして、ただの上級技師ではなくて、熟練技師という職に就きました。

○川野 上級より上の職階ということですね。

○ラダトコ 上級技師よりもさらに上ですね。マスターと言いますか。その次は、運転スタッフの中の電気部の副部長になりました。

仕事内容は、最初の上級技師では直接の運転が主ですが、二番目の熟練技師という肩書きになりますと、人事課的なこととか、ほかの設備の管理とかになって、最後の副部長職になると、もう少し広い範囲の全体の管理にあたるような内容です。

○川野 副部長になられたのはいつですか。

○ラダトコ 1985年です。

○川野 では、事故当時は副部長でいらっしやったということですね。

○ラダトコ そうです。1989年に辞めるまで同じ職名でした。

○川野 1986年の事故当日は何をされていたんですか。

○ラダトコ 事故の起こった午前1時20何分は自宅で寝ておりました。2時ごろになると原発のほうから連絡があつて起こされて、2時半ぐらいには原発に到着しました。そして、その深夜から翌日の午後2時ぐらいまで原発にいましたが、それは本来の自分の勤務時間ではなくて緊急に呼び出されたのです。その後、いったん自宅に戻りました。そして今度は自分の当直であった26日の23時ごろ、また原発に入りました。

当時、私の副部長としての担当は1、2号炉で、3、4号炉のほうは、私と同じ職名に就いている別の人物が担当していました。

○川野 でも、原発の事故の様子というのはよく分かったわけですよ。それを見られてどう思いましたか。

○ラダトコ その時に何が起こったかというのは、とても判断できる状況ではありませんでした。われわれは電気技師ですので、その原子力そのものの物理的なことは専門ではないから、よく分からなかったというのもありますが、おそらく専門家でも、その時すぐには事故の様子を把握できなかったのではないかと思います。いまだに、どういうことが起こったかについての公式の見解はありますけれども、果たしてそれが本当に正しいのかどうかわかりません。

もちろん、その時に見た原発の様子というのは非常に恐ろしいものでした。しかし、ではいったい具体的に何が起こったのかということは、すぐには分かりませんでした。その事故直後、4号炉の設計をした主任技師というのも現地に呼ばれたわけですが、彼らも具体的にどういうことが起こったのかということ、すぐには説明できませんでした。

○川野 しかしプリピャチの住民の避難が始まっていくわけですよ。そこに至るまで、どういった情報が住民に流されたんですか。住民はどういうふうな事態を理解したんですか。

○ラダトコ 町の住民は基本的に日常生活のリズムが続いていたわけで、子どもたちも普通に遊んでいるし、店も学校もやっていました。もちろん町を装甲車が走っていたりして、何か起こったという緊張感はありませんでしたが、では具体的に何が起こったのかということ、みんなが理解していたわけではあり

ませんでした。

○ラダトコ 1985年の末か1986年初めぐらいに、当時のソ連の雑誌で『アガニョーク（ともしび）』というのがありまして、これに原発についての記事が載っていました。それによると、ウクライナでも将来、さらに20機ぐらい原発を建てるということが書かれていて、チェルノブイリ型の原発の設計者であるアレクサンドルという人物、当時のソ連の科学アカデミー総裁ですが、その彼が言った「原発は安全だから赤の広場に建てても大丈夫」というような意味の言葉が載っていました。

その時は、みんなそういうふうには思っていたわけです。私は4月26日の23時ぐらいにプリピャチを出て当直に入っていたのですが、その時も4号炉の前で当直のメンバーが車を止めて原発を眺めていて、その結果自分たちがどのくらい被ばくするかというようなことは、あまり考えていませんでした。

○川野 奥さまとお嬢さまはいつ避難されたんですか。

○ラダトコ 妻と娘たちは、ほかのプリピャチ市民と同じように27日の午後2時ごろからバスで避難しまして、私は職場に残りました。

○川野 その時にご自身の放射線被ばくについては何も考えられませんでしたか。恐怖であるとか、そういったものというのはまったくありませんでしたか。

○ラダトコ ありませんでした。

○川野 当時はそういう情報はしっかり開示されていなかったようですが、ラダトコさんは1989年まで原発に勤められていますよね。1989年までの間に、放射線被ばくについて知るようなことはなかったんですか。

○ラダトコ はい、もちろん1989年になれば被ばくについての情報もありましたし、自分にも実際に被ばくの影響も出てきていたわけですが、事故直後にはそういうことは考えていませんでした。

○川野 いろいろ被ばくについて知りましたか。被ばくについて、あるいはその影響について、いろいろ知りましたか。

○ラダトコ 人が亡くなり始めた時です。最初に亡くなったのは同僚の一人で、彼は5月6日に亡くなりました。彼はモスクワの病院に行きたがらず、キエフの病院に残っていました。亡くなった後、ポルタヴァ州で葬式がありました。

そして他の電気部の同僚の4名はモスクワの病院で亡くなりました。

○川野 その時に、もう仕事を辞めてしまおうかとは考えませんでしたか。

○ラダトコ いいえ。辞めるということは頭に浮かびませんでした。

○川野 わかりました。ありがとうございます。またプリピャチ時代の話は後ほどお聞きしたいと思います。もう23年以上前の話ですので、どこまで覚えていらっしゃるかわかりませんが、覚えていらっしゃる範囲で教えていただきたいと思います。

では、現在の状況との比較をしたいのでお聞きしますが、1986年当時と現在の自宅の形態を教えていただきたいと思います。また同時に生活のスタイルについてもお伺いします。何時に起きて、どういうスタイルで仕事をされて就寝されていたのかといったことを教えてください。これらと一緒に、事故当時と現在の食事の内容も教えていただければと思います。

○ラダトコ まず自宅の形態ですが、プリピャチ時代のアパートは3DKで、いま現在キエフで住んでいるのも広さは同じです。

起床就寝時間ですが、プリピャチ時代は12時前に寝ることはなかったと思いますが、朝は6時には起きていました。というのは、娘を7時には幼稚園に連れて行かなければいけなかったからです。妻も同じ原発で仕事をしていたので、その時によりますけれども、朝は自分が娘を幼稚園へ連れて行ったら、帰りは妻が連れて帰るというふうでした。

プリピャチ時代には、まだ自分たちも若かったこともあってか、生活について特に不満はありませんでした。寝る時間は、前の習慣が残っていて、いまもそのままです。現在の起床時間は自分の身体の具合によっていろいろです。食事の内容ということと言いますと、当時のプリピャチというのは、お金があっても、店に何でも物が売ってあったわけではないのです。ただ、笑い話で、店には何もないけど冷蔵庫には何でも入っているという話がありましたが、実際にそういうふうな様子でした。しかし現在は、店に行けば何でも置いてあるけれども、お金が足りないので買えないという状態です。食品の質ということで言えば、私が歳を取ったせいもあるかもしれませんが、むしろ昔のほうがよかったですように思います。

○川野 いま質問事項の3番までですね。4番は先ほどお聞きしたので次は5番をお伺いしますが、プリピャチ時代、1986年の事故直前でいいのですが、当時の月収は覚えていらっしゃいますか。ルーブルで結構です。

○ラダトコ 1986年の事故が起こる前は、私の給料は月額475ルーブルで、当時としてはいい給料でした。妻の給料と合わせますと車を買うこともできました。

○川野 当時の平均的な月収がおいくらぐらいかはお分かりになりますか。

○ラダトコ 当時の平均月収というと、100から150ルーブルぐらいでしょうか。

○川野 では、夫婦お二人での収入ということになれば、かなり高収入であったということですね。

○ラダトコ もちろんです。例えば車は妻の月給をそのまま毎月貯金して買いました。つまり私の給料だけでも家族は十分に生活できたということです。それは客観的に見たらどう分かりませんが、自分たちとしては、まともに生活できていると思っていたわけです。

○川野 現在の収入はいかがですか。

○ラダトコ 私の年金額は現在3,855グリブナです。

○通訳 かなりいいほうだと思います。

○川野 奥さまの収入はどのぐらいですか。

○ラダトコ 妻はもっと多いです。

○川野 以前、年金のシステムについてお聞きしたことがあるのですが非常に複雑でしたので、年金を決めるシステムというのを少し教えていただきたいのですが、よろしいでしょうか。

○通訳 5年間を基礎に計算するという話を、この間、聞きましたよね。

○川野 はい。

○ラダトコ 基本的にはそうですね。給料のよかった5年間を基礎に計算します。しかし妻の場合、2001年まで汚染地域での仕事をしていたんです。それに基づいて、彼女にはさらに加算があります。

○川野 わかりました。現在の生活はいかがですか。年金で十分に生活できますか。

○ラダトコ 以前はこの額で足りていると思った時もありましたが、いまはそうではありません。公共料金の額が前と比べて上がりましたし、ほかの物価も上がりました。薬のことを言えば、私が常用している薬が以前は一箱 10 グリブナ程度だったのが、いまは 100 グリブナ以上になっています。薬の値段は上がるばかりです。

○川野 現在の生活の不満というのは、そういう公共料金の高騰であるとか、あるいは医薬品が非常に高くなったとかいうようなことですか。それ以外に何かありますか。

○ラダトコ いまは娘の家族と同居しているのですが、孫も何人かいます、昔なら自分の給料でアパートも入手できたわけですが、いまは不動産価格が高騰しているのでとても買えるものではありません。

いかにいまの住居の問題が大きいかということですが、上の娘の夫は、いま 2 つ仕事を掛け持ちしています。しかし、そうやって稼いでも、とても自分の住居を買うことはできません。ソ連時代は企業に勤めていれば、一応順番待ちはあったけれども、ある程度働いていれば無料で提供されるというシステムがあったわけです。もちろんソ連時代でも、車の入手というのは、いまのように楽だったわけではなく、自分で買わなければいけなかったし、当時はユーゴスラビア製のエンジンのものしかないとか、そういう問題はありました。

○川野 旧ソ連時代のほうがよかったですか。

○ラダトコ もちろん簡単には比べられないと思いますが、少なくともソ連時代であれば、これだけの収入があれば、将来どういうふうに使っていったという目処が立てられました。いまは明日どうなるか予想がつかないという状態で、健康のことで、やはり歳を取って病気が出てきたこともあります。いまの保健行政の状態というのは話にならないと感じています。おそらくご存じかと思いますが。

○川野 少し話がそれるのですが、チェルノブイリの被災者として、公共機関が無料であるなど、さまざまな保障制度がありますね。医療に関する保障も若干整備されていると思うのですが、そういう保障制度についてどう思われますか。十分だと思いますか。

○ラダトコ 保障というのは十分な年金とか給料が得られていれば、なくてもいいと私は思います。例えば公共料金、家賃が半額になるという制度についてはもちろん利益は大きいですが、それも年金額が十分であれば、こういう保障がなくてもやっていけるはずです。しかし、ここ3年ぐらいは年金の額は上がらないのに、例えば薬の値段は、先ほど言いましたように10グリブナや20グリブナだったものが、いまは100グリブナ、200グリブナするというような状況です。

○川野 保障制度そのものについては、不満はないということですか。

○ラダトコ 社会保障については、法律の文言として残っているだけで、実際には全然機能していない。それは不満です。

○川野 被災者としての保養権がありますよね。毎年行かれていますか。

○ラダトコ 保養の制度というのは、市の行政のほうに書類をそろえて毎年出すと、いまは順番を待っていれば行けるという建前です。しかし去年とか一昨年ぐらいは出した人の何パーセントが行けたかなというような状態で、運良く行ける人も2年か3年に一度ぐらいでしょうか。

○川野 いまのお話ですと保障制度はあるにはあるが、あまり機能していないということでしたが、どの保障制度が一番必要だと思いますか。

○通訳 法律としてある保障制度のなかでということですか。

○川野 ええ。

○ラダトコ やはり医療に関する保障が必要だと思います。法律によれば、住居の特典とか、融資を受ける場合の特典とかいろいろあるのですが、そういうことはなくても何とかかなと思います。例えば、法律だと、被災者が障害者に認定されれば、国のほうが住居の面積を追加しなければいけないと、つまりより広い住居を得る権利があると書いてあるのですが、これも実際は順番待ちになっていてほとんど実現しません。

○川野 先ほど、保障制度のなかで医療が一番実現したらいいという話でしたが、医療のどの部分が充実したらいいですか。薬が無料になったらいいですか、それとも医療費が無料になったらいいですか。

○ラダトコ これは、やはりどれかがあればいいというものではなくて、セッ

トになっていなければいけないと思うのです。いまの实情は、被災者のなかでも全員ではなくて、べつに登録されている人は放射線医学センターという所で2年に一度検診があります。前はそれに行けば2、3日で一通りの検診を受けることができましたが、いまはそこに行ってもレントゲンのフィルムがないとか、先生がいないとかで、この項目は地区の病院でやってきなさいと言われて、結局、検診が全部終わるのに1カ月もかかったりします。

そして今度、検診が終わって治療をしなさいと言われても、治療のために病院に行ったら薬がないとか、そういう状態です。

○川野 現在の健康状態はいかがですか。

○ラダトコ 健康状態と言われれば、その日で天気によっても違うし、神様が決めるものではないでしょうか。私は特に自分の健康状態について神様に苦情を言うつもりはありませんが。

○通訳 では、具体的な診断名は何かありますか。

○ラダトコ 高血圧があつて頭痛がすることがありますし、他に狭心症も患っています。自分で分析するには、心臓の操縦というか、機能がうまくいっていないのではないかと考えています。

○川野 1989年まで原発に勤めていらっしゃって、たぶん被ばくもされていらっしゃるといことになるのだと思うのですが、ご自身の現在の健康状態についての不安はありますか。

○ラダトコ はい、あります。今日も頭痛がしていますけれども、ひざの関節も痛みます。

○川野 そういったものというのは、チェルノブイリの原発事故の影響だというふうに思いますか。

○ラダトコ 影響はあるでしょう。しかし、私はその因果関係を考えることはしません。被ばくをしていなくても若くて亡くなる人もいるわけだし、そういうことを自分で考え始めると気持ちも落ち込んできますから。

○川野 奥さまもお嬢さまもプリピャチにいらっしゃって、いまはお孫さんもお生まれになられて、ご家族の健康状態に対して不安がありますか。チェルノブイリの原発事故の影響が家族にもあるのではないかとというようなことを考え

られるようなことがありますか。

○ラダトコ 妻も病気があります。娘たちはまだ若いためにないのかもしれませんが、先のことは分かりません。

○川野 わかりました。あと二、三点お聞きしたいのですが、ちょっと大きな質問ですから、答えるのが難しいなということであれば、そうおっしゃってください。

これまでの自分の人生を振り返って、チェルノブイリの原発事故で自分の人生が狂ってしまったというような思いはありますか。

○ラダトコ それはもちろんです。自分はいまだにキエフの人間になりきっていないと思うのですが、しかしキエフを出て行く所もないのです。原発を辞めた時にどうするかと話しても、行く所もないし、どこかよそに行きたいと言っても子どもたちが理解してくれないだろうと思います。

○川野 あの原発事故がなければ、ずっとプリピャチに住んでいらっしやいましたか。

○ラダトコ そうだと思います。もちろん、私の就いていた肩書きでこの歳まで働けるはずはないので、歳を取ったら辞めていたと思いますが、その後もプリピャチに住んで、子どもたちがよそに行ったとしても、たぶん私はプリピャチに住んでいただろうと思います。

○川野 わかりました。

○ラダトコ その当時のソ連のシステムだと、子どもたちが大きくなっても、子どもたちが結婚をして申し込みをし、プリピャチで仕事をしていればアパートが新しくもらえるというような制度もありました。

○川野 原子力発電について、いまどう思われていますか。

○ラダトコ 肯定的に考えています。その質問は私の原子力発電に対する評価についてなのか、私がどういうふうに原子力に対して感じているかということについてなのか、どちらのほうでしょうか。

○川野 原子力事故が起こったということで、特に非難を受けたり、いろいろな社会的な、あるいは医学的な被害というのを皆さん被っているわけです。そういう状況を皆さん経験されていて、実際に被害者なわけですよね。そうい

った経験も踏まえたうえで、原子力について、ご自身はどうお考えですか。必要ですか、必要ではないですか。

○ラダトコ もちろん原子力は必要だと考えます。核燃料サイクルとか、廃棄物処理の問題とか、そういうものが解決されなければいけないと思いますが、いまの時点で原子力発電をやめてしまうということは狂気の沙汰であると思います。

○川野 わかりました。最後の質問です。もちろんラダトコさんは被災者であるし、ご家族もプリピャチにお住まいだったということで被災者証明をお持ちだと思うのですが、プリピャチ出身であるとか、処理にあられたということで、その後キエフで、何らかの差別、嫌な思いということはあるのでしょうか。

○ラダトコ 私や家族に関して、直接的にそういうことはなかったと思います。一般的な話として言いますと、われわれ被災者がキエフに移住してきた時に、入るはずだったアパートを待っていた人たちが不満を持って、またそういう人たちの多くを邪魔したというか、余計な人たちというカテゴリーで見られて嫌みを言われたりとかはあったかもしれませんが、われわれに直接はありませんでした。

○川野 そういったことが新聞で取り上げられたといったことがありましたか。

○ラダトコ これまで気が付いたことはありません。そういう差別問題について、国会などで取り上げられたと聞いた覚えもないです。

そもそも、いま国会などで被災者側の問題が取り上げられるかという、そういうこともほとんどないですし、事故処理作業者の日とか、チェルノブイリ事故の日とかという時になると何か言及があったりするぐらいです。ソ連時代に作られた社会保障の法律というのは、細かくいろいろな文言が決められていたわけですし、年金についての規定などもあるのですが、それが現状には全然機能していない。毎年の予算が発表される時期に、それが削られていくことに対して被災者のほうから抗議行動はあるのですが、それが国会のほうで取り上げられるかという、そういうことはありません。

○川野 長い時間ありがとうございました。大変貴重なお話を聞くことができ

ました。

○ラダトコ 本当によい自分の話がお役に立ったのでしたらうれしいと思います。

○川野 大変貴重なお話でした。こういった放射線の被害というのは、ヒロシマ・ナガサキの経験からすれば、非常に大雑把な分け方ですけれども、健康にかかる被害、心理的な被害、そして社会的・経済的な被害、この3つがあるというふうに言われています。

プリピャチに住んでいらっしゃった方、そしてラダトコさんのように原発に勤めていらっしゃった方々というのは、やはりそういった3つの領域での被害を被られているのですね。そういった観点で言えば、チェルノブイリの被災者はヒロシマ・ナガサキの被爆者と同じなんです。

だから、特に私などは広島大学に所属していますがけれども、ヒロシマ・ナガサキの経験、研究の経験、そういったものを生かして、チェルノブイリの原発事故というのがいったい何だったのかというのを、ずっと考えていかなければならないと思っています。

広島の前爆については何かご存じですか。

○ラダトコ いろいろ読みましたよ。われわれの世代ですと、当時私たちの手に入った出版物で、広島の前爆の被害についてはいろいろと書かれていましたので結構読みました。いまの子どもたちに対しては、そういう前爆被害の情報が十分提供されているかは疑問ですけれども。

○川野 わかりました。

○ラダトコ 私からもお聞きしていいでしょうか。広島の前爆者の場合、お子さんやお孫さんの世代に前爆の影響があるのでしょうか。

○川野 いわゆる前爆二世の調査というのは最近始まったんです。いま広島・長崎では前爆二世の検診をやっていますが、いまのところよくわかっていません。統計学における有意差というのは、現時点では出ていないと言われていません。

いま前爆二世の人たちは年に一回検診をすることができます。その検診の結果を蓄積している最中ですが、現時点では有意差はないということになってい

ます。広島・長崎もこの検診をずっと続けていくでしょうから、将来10年、15年たてば、もう少しいろいろなことが明らかになるかもしれませんが、いまのところはよくわかりません。

○ラダトコ 事故直後、アメリカの(ロバート・)ゲイル博士とかが来て、高線量被ばくをした人の治療にあたったのですが、その時に彼が言っていたのは、事故処理作業者の多くは5年、あるいは7年ぐらいの間に亡くなる人が多いのではないかということです。しかし現実には、われわれは頑健であって生き延びることができました。

○川野 貴重な時間をありがとうございました。

アンナ・マーニ氏（女性）

実施日：2009年12月17日

○川野 われわれは広島で原爆の研究をしています。同じ放射線被ばくの視点から、チェルノブイリの研究を行っています。

○アンナ 事故後20年たってから始められたんですか。

○川野 これまで広島大学や長崎大学で行っていたのですが、直接、住民の方々のお話を聞いて、住民の方々が経験したことを視点に研究するという機会は多くなかったのですね。そういうことを、事故から20年たってしまったのですが、始めました。

まず基本的なことをお聞きしたいのですが、質問項目の1番から8番までをお伺いします。

○アンナ 名前はアンナ、苗字はマーニです。女性、1970年6月17日生まれ、ウクライナ人です。宗教はキリスト教の正教です。キエフ工科大学の卒業です。ベラルーシのペロオジョールスク⁵という町で生まれた後、1975年に両親と一緒にプリピャチに引っ越しました。

○川野 その引っ越しはお父さまの仕事の関係ですか。

○アンナ 最初、父がチェルノブイリ原発のタービン課という所で仕事を始めて、その後、母が同じチェルノブイリ原発の化学課で働いておりました。

○川野 1975年以降は何をされておりましたか。

○アンナ プリピャチで幼稚園に入って学校に入学しました。1986年時点で私は9年生でしたが、事故のあった年に母と一緒に祖母の住んでいた田舎の村に移住し、そこで9年生を終えました。

○川野 田舎に移住されたのはいつですか。

○アンナ 事故直後に移りました。1986年8月19日からキエフに住んでいます。父も母も事故後原発での仕事を続けておまして、チェルノブイリ原発職員としてキエフに代替の住居が提供されたからです。私はキエフで学校を卒業して大学に入学しました。

⁵ ロシア語発音。ベラルーシ語なら「ペラアジョールスク」。

○川野 お父さまとお母さまはチェルノブイリでいつまで働かれたんですか。

○アンナ 母は1993年まで、父は1987年まで原発での仕事をしました。

○川野 キエフに住みながら、チェルノブイリでお仕事をされたんですか。

○アンナ はい、当直勤務制で、2週間チェルノブイリで働いて、2週間キエフに帰ってきてという体制です。

○川野 では1986年以降は、アンナさんはずっとキエフにいらっしゃるということですね。

○アンナ そうです。

○川野 では1986年4月26日当日の話をお聞きます。1986年以降も聞いておきましょうか。

○アンナ 1993年に工科大学を卒業しました。工科大学の熱エネルギー学部で、専攻は火力発電です。

大学卒業後、熱物理学研究所という所に就職し、1996年からは、その研究所の大学院に入りました。その仕事を辞めたのは2003年で、ちょうど10年間働いたこととなります。

その熱物理学研究所での仕事というのは、最初は技師という肩書きで、その後は研究員です。

○川野 そして2003年に仕事を辞められたということですね。

○アンナ はい。2003年以降は仕事はしていません。

事故時の家族構成は父と母と私でした。父の生まれた年は1937年、母は1950年です。

○川野 現在、ご両親はどうされていますか。

○アンナ 2人ともキエフに住んでいます。私と同居しています。

○川野 16歳の時の記憶ですから覚えていると思うのですが、1986年4月26日、事故以前の話をいくつかお聞きます。同時に現在の様子も合わせて教えていただければと思います。自宅の状況から質問事項の3番までお願いします。

○アンナ プリピャチのアパートは2DKでした。現在も同じつくりのアパートに住んでいます。プリピャチ時代の起床時間は7時半ぐらいでしょうか。いまは腎臓透析をやっていて、その時間によって起きる時間と寝る時間が変わりま

すので、起床時間は不規則です。

食事の内容については、両親の食事はそんなに変わっていないと思います。私の場合は、病気があるので食べてはいけないものがあるいろいろあります。それとは別に一般的な話をすると、いま出回っているような食品の添加物などはブリピャチ時代のほうが少なかったです。そういう意味では、以前の方が、もっと自然な食品であったと思います。

○川野 現在の生活で大きな不満というのはありますか。

○アンナ 私は1級障害者ですので、生活そのものが満足なものではないです。

○川野 現在は人工透析以外、何かかかられている病気はありますか。

○アンナ 腎臓以外にも診断名は付いているのですが、腎臓の病気が一番大きいので、そのほかにまであまり注意をはらっていません。透析そのものは2003年からしているのですが、いま行っている日本で言う機械式の腎臓透析は2005年からで、前段階というのが2003年から2年間ありました。

腎臓透析というのは、機械にチューブをつないで寝ているものですが、2003年からの前段階にしていたものというのは、おなかにチューブをつないで2リットルぐらいの特殊な溶液を入れて出すというものです。それを1日5回やらなければなりません。これを2年間やっていました。

○川野 いま、透析は週に何回行かれていますか。

○アンナ 週に3回、5時間ずつです。

○川野 この疾患とチェルノブイリの原発事故というのは関係があると思っていますか。

○アンナ はい、もちろんです。医者が鑑定をして、疾患と事故とは関連があると認定しています。

○川野 原発事故と疾患に関係があるという医者の判断があったのは、いつですか。

○アンナ 1995年です。

○川野 1995年当時はどういう症状があったんですか。

○通訳 糸球体腎炎ですね。一つ目の診断名がそれです。もう一つは出血性血管炎という診断ですね。それが1995年時点の診断名です。

- 川野 そして透析を開始されたのが2005年でしたね。
- 通訳 そうですね。日本で言う機械の透析を始められたのが2005年です。
- 川野 先ほど1級障害者だということをおっしゃいましたが、それに対する医療保障はありますか。
- アンナ はい。障害者年金を受給しています。
- 川野 それで透析の医療費すべてが賄えるということですか。それとも透析の医療費は自己負担しなければならないのですか。
- アンナ 透析を受けること自体については無料ですが、それに使うヘパリンとか透析溶液、注射器、そういったものは自己負担です。だから透析1回につき50グリブナを自己負担分として支払います。
- 川野 では月に12回ということですか。
- アンナ はい、12回分です。
- 川野 それは大きな負担ですね。
- アンナ はい。それで障害者年金の半分は消えます。
- 川野 障害者年金とは別にチェルノブイリの被災者の医療保障がありますよね。それはもらえないんですか。
- アンナ はい。公共交通が無料であるとか、被災者としての特典はあります。
- 川野 医療費の特典はないんですか。
- アンナ 被災者としての医療上の保障は理論的にはありますが、現実には国の予算が不足しているということで特典が実現されていません。
- 川野 そういった点は、非常に不満に感じますか。
- アンナ いや、もういらついても意味がないので(笑)。もし国が、このチェルノブイリに関する法律だけを無視しているのであれば、もっと頭に来るかもしれませんが、これはチェルノブイリに関する法律に関してだけのことでなく、すべてに関してそういう状況ですので、いまさらという感じです。
- 川野 ちょっと大きな質問ですが、原発事故のせいで自分の人生が大きく狂ってしまったというような思いはありますか。
- アンナ はい、もちろんあります。
- 川野 一番大きいのは健康上の問題ですか。

○アンナ はい、そうです。健康の問題から、ほかのすべての問題が発生してきます。

○川野 質問事項の 5 番を先にお聞きします。原発事故の後におばあさまの家にいかれて、その後、キエフに帰ってこられるわけですが、その間、つらい思いをされたことがあれば教えていただきたいのですが。

○アンナ 事故後、先ほど言いました祖母のいるチェルニヒウ州の田舎の村、これはキエフ州の東に隣接してある州ですが、そこに母と一緒に避難しました。母はその後も原発での仕事に入ったのですが、私はそこに 8 月までいて、8 月にキエフで住居の支給があったので、そちらに移り、9 月 1 日からキエフの学校に入学しました。

実は事故の時、父はちょうどプリピャチの病院に入院していました。そこで避難ということになり、病院に入院していた人はまとめて避難させられたために、父がどこに行ったかわからない状態になってしまって、私と母はひと月ぐらい、父がどこに行ったのか探し続けていました。そのことと、3 日間ぐらいの避難と言われたために、何も持たずに避難したということが重なって、われわれにとっては大変な問題でした。

○川野 おばあさまの家には、どういう手段で避難されたんですか。

○アンナ 母と避難したのは、ほかの人と同じ 27 日の午後、バスに乗って避難しました。このバスはキエフまで行くバスだったので、私たちはキエフに着いてから、夜遅くだったと思いますが、列車に乗って祖母のいる田舎まで移動しました。

○川野 やはり、その時は避難は 3 日間ぐらいだと言われていたのですか。

○アンナ はい、そうです。身分証明書とか、3 日間分程度の食べ物を持って出なさいと言われていました。

○川野 では、その時は 3 日後には帰ってくると思っていたんですね。それであれば、キエフに 3 日間滞在した後、帰ろうとは思わなかったのですか。なぜ、わざわざおばあさまの家に行かれたんですか。

○アンナ 実は行く当てのない人というのは、プリピャチからキエフまで行く途中の村の人に、ホームステイのようなかたちで順々に下ろされていったので

す。私たちは知らない人の所に行きたくなかったので、それなら祖母の所へ行ったほうがということで、祖母を頼って行ったわけです。

○川野 結局、プリピャチには帰れないと知ったのはいつですか。

○アンナ テレビのニュースでチェルノブイリ事故についての発表があったのは5月10日ぐらいだと思いますが、その時だと思います。それまでは事故についてはずっと伏せられていました。

○川野 そのニュースを聞いたのはおばあさまの家にいる時ですか。

○アンナ はい。祖母の家に着いたのが4月28日のことでした。もちろん大変な悲しみでした。

○川野 プリピャチにいろいろな物を残されてきたんですもんね。

○アンナ はい、全部プリピャチに残して避難してしまいましたから。

○川野 避難する時、プリピャチから何か持ってこられましたか。

○アンナ 本当に着の身着のままだったと思います。でも、本を持って出ました。どういう本だったかという、私の家は両親とも原発職員だったので、家に原発事故についての本があったんです。それを列車に乗って祖母の家に行く途中、ずっと母と一緒に読んでいたのですが、それは自分の記憶では、1960年代に日本のどこかの原発で事故があったとか、過去の原発事故について結果がどうだったかというようなことが書かれている本でした。灰色の表紙の本だったと思いますけれども、題名は覚えていません。

それ以外の物は特に持って出ませんでした。本当に着替えもありませんでした。

○川野 なぜ、その一冊を取られたんですか。

○アンナ われわれがこれから何をしたらいいか、どういう危険性があるかということを知りたかったからです。両親が原発で働いていたわけですから、公の報道では何もありませんでしたが、避難する前に、すでに事故が起こったということは知っていました。

○川野 その時に放射線が大量に漏れているということ、そして放射線の影響について、何かお母さんから聞かれていましたか。

○アンナ はい、聞いていました。

○川野 具体的に聞かれていましたか。

○アンナ 母は事故が起こった時、当直のはずだったのですが、都合があって変わってもらったので、母は幸い家にいたのです。事故が起こったのは土曜日の午前 1 時台で、そのころの学校は土曜日も出校日だったので、私は学校に行きました。しかし私も運がよかったのは、事故当日は寝坊をしたので、授業前にみんなが外に出てしていた体操はしなかったのです。

そして、私が授業で学校に行っていた間に、窓を閉じて開けないように、休み時間も外には出ないよという指示がありました。それからヨード剤を担任の先生が配って、すぐに飲みなさいという指示がありました。ですから、何かあったのだということはその時点で私も分かっていたわけです。

○川野 その後、結局 9 月からキエフに来られたわけですね。プリピャチからおばあさまの家、そしてキエフのほうに移ってこられた。その後、プリピャチ出身であるということで、何らかの差別とか偏見とか受けたことはありますか。

○アンナ 9 月からキエフの学校に入ったわけですが、そのクラスの子どもたちはほとんどプリピャチから移住してきた子でした。ですから、学校では特にそういう問題はなく、その後、大学に進学してからも、自分が行っていた工科大学の同じクラスでもプリピャチの子が何人もいましたので、特別そういう差別のケースがあったわけではありません。

しかし、プリピャチからバスでキエフに避難する最初の時、途中、村で止まった時に水が飲みたいと言ったけれども、その村の人は何かが伝染すると言って井戸の水を飲ませてくれなかったということがありました。そういったことはキエフで住むようになってからも、まったくなかったわけではありませんが、それは単発的なことであって、非常に広く見られるということはありませんでした。

○川野 キエフの学校では、ほとんどのクラスメートがプリピャチの方でしたよね。プリピャチ時代の話はされましたか。

○アンナ はい。いつも話をしていました。

○川野 プリピャチはどんな町でしたか。

○通訳 その時、どういうふうイメージしていたかということですか。ある

いは、いまどういうふうにイメージしているかということですか。

○川野 そうですね。プリピャチの町を話すということは、結局、懐かしいわけですよ。プリピャチの町というのはアンナさんにとってどんな町でしたか。

○アンナ 世界でも一番いい町というぐらいの感じでした。

○川野 学校もよかったし、環境などもすべてがよかったということですかね。

○アンナ はい、すべて素晴らしいという感じでした。

○川野 原発事故がなければ、ずっとプリピャチにいたと思いますか。もしくは中学校 3 年生の時に、そう思っていましたか。将来、例えばキエフに出るか、プリピャチから離れるということは、考えもしなかったですか。

○アンナ 事故前私は優等生で、当時のソ連にはピオネールという組織があったのですが、そこにも入っていました。自分の将来を考えると、やはりキエフの大学に進学したいと思っていて、卒業後は仕事に就いてキャリアを得たいとか、あるいは女性としても自己実現したい、結婚して子どもを産みたいというようなことも、もちろん考えていました。

○川野 いまプリピャチの町があったら、やはりプリピャチに住みたいですか。

○アンナ はい。

○川野 最後に一つだけ教えてください。原子力発電についてどう思われますか。原子力発電は必要だと思いますか。

○アンナ はい、必ず必要だと思います。もちろん安全な原子力発電ならば、ということですが。

○川野 新聞やテレビなどでいろいろな情報を得ていると思うのですが、あのチェルノブイリの原子力発電事故の原因は何だと思えますか。

○アンナ やはりヒューマンファクターであると思います。

○川野 人為的なミスということですね。

○アンナ はい。

○川野 人為的なミスがなくて、安全が保証されるという前提で原子力は必要だということですね。

○アンナ はい、もちろんです。

○川野 私が用意した質問は以上です。大変ありがとうございました。貴重な

お話を聞くことができました。ヒロシマ・ナガサキでもそうなのですが、放射線の大きな被害の一つというのは社会基盤をすべて失ってしまう、社会生活をすべて失ってしまうということです。これはヒロシマ・ナガサキ・プリピャチの人たちに共通したことだと思うのですね。

そして、例えば広島でも、直接の被爆者に話を聞いて、彼らが失った社会基盤の話を書くというのは、被災から20年以降に始まったんです。

○アンナ チェルノブイリの場合は医学的な問題にしても、社会的な問題にしても、20年たつてむしろ以前よりも調査がなされなくなっているということがあります。

○川野 そうですね。そういった点からも、われわれはこういった調査というのは続けたいと思っています。

○アンナ チェルノブイリの問題を研究して、どういうことが明らかになるでしょうか。

○川野 結局、医学的な問題がいつも議論されるんです。それはヒロシマ・ナガサキもそうだったし、チェルノブイリもそうなんです。

しかし、放射線の最たる被害者というのは住民の人たちなんですね。われわれができることは、小さなことですが、そういった住民の人たちの記録を残すということです。これは私のような原爆を研究する者の責任だと思っています。それを記録として残して、それをどう理解するのかというのは、また次の問題ですが、一義的にはこういった記録を残すということは非常に重要なことだと私たちは思っています。

○アンナ では皆さんのいましていらっしゃるということというのは、その情報提供というのが主な役割になるのでしょうか。

○川野 情報を収集して整理して公開するというのも一つの仕事です。それは間違いありません。ただ、「被害」と言いながら医学的な被害にばかり目が向く。

しかし、実はそうではないのだということです。例えば社会基盤そのものが無くなった、社会生活が無くなったとかいうようなことは、あまりみんなが知らないわけです。しかし、そういった社会的に非常にシリアスな被害というのも、現実的に存在している。

そういった社会的な被害の存在をまとめ、公開するというのも研究者としての仕事だというふうに私は思っています。

○アンナ わかりました。

アレクサンドル・シロタ氏（男性）

実施日：2010年5月25日

（インタビューの趣旨について説明・録音についての承諾 約3分）

○川野 まず、氏名、生年、人種、宗教、最終学歴、出身地、ブリピャチを離れる時の家族状況、そして現況を教えてくださいと思います。

○シロタ 名前はアレクサンドル、名字はシロタです。生年月日は1976年6月7日、人種はウクライナ人です。宗教はキリスト教と言っておきましょう。最終学歴はキエフ国立大学ジャーナリズム学部の卒業です。出生地はウクライナの南にあるヘルソン州です。ヘルソン州で生まれた後すぐに、ポルタヴァ州のコムソモリスクというところに引っ越しました。その後、1981年に母と一緒にブリピャチに移住しました。その時には、両親はすでに離婚していました。

○川野 お母さまはブリピャチで新たに仕事をされたということですか。

○シロタ 母はコムソモリスクで、文化会館附属の創造集団、アマチュアの人が詩を書いて朗読したり、あるいは劇をやったりするグループを指導する仕事を文化会館でしていました。母はブリピャチでも同じ職を見つけて、その仕事をしていました。

○川野 なぜブリピャチで、お母さまはそういった仕事を見つけることができたのか、そしてブリピャチで仕事を得るといふことのメリットがあったから行かれたのかどうか、というのはご存じですか。

○シロタ 私は詳しくは知らないんですが、母からはブリピャチの文化会館からの招聘だったと聞いています。母としてはブリピャチで働くメリットがある、というよりも、当時まだできたばかりの新しい、若い人がたくさんいる町で、文化会館の仕事をするということに興味を持ったために行くことにした、ということでした。

○川野 アレクサンドルさんとお母さまは、1981年から1986年までブリピャチに住んでいたということですね。

○シロタ はい。

○川野 1981年当時というのは、シロタさんは5歳ですね。

○シロタ はい、5歳です。

○川野 事故が起きた1986年当時が10歳ですね。

○シロタ 事故が起きたのがその年の4月で、私の誕生日が6月だから、10歳になるすこし前ですね。

○川野 1986年の事故発生以後の話をお聞かせいただけますか。

○シロタ 私はほかのプリピャチの方々と一緒に4月27日に避難しました。最初、私の乗っていたバスはポリスケという町まで行きました。そこで、バスに乗っていた人たちは、だいたいホームステイというかたちで、その町の一家族に被災者が10人ぐらいいまで、当座受け入れられたのです。しかし、私たち家族の場合は、その乗っていたバスがキエフまで戻るといったことだったので、母がバスの運転手に頼んで、キエフにいた母の姉妹の所に取りあえず身を寄せるというかたちになりました。

○川野 キエフに着いたのは4月27日以降の話ですよ。

○シロタ いえ、27日にはキエフに入りました。キエフに行った後、ベラルーシのミンスクのそばの軍事都市である、マリイナ・ゴールカという所に1週間ほど母と滞在しました。マリイナ・ゴールカには軍人のおじさんがいて、彼を頼って1週間ぐらいいたのですが、母はそこからチェルノブイリ原発に電話をしたり、あるいはプリピャチの知り合い等に電話したのですが、全然つながらないということでした。

最初にプリピャチから避難した時は、3日間ぐらいいの避難であると言われていたのです。だから母は、とにかくしばらくキエフにいたら、またプリピャチに帰れるのではないかと期待をして、ベラルーシに1週間ほど滞在した後、また2人でキエフに行きました。

○川野 わかりました。では、それ以降はずっとキエフで、中学校と高校に行かれて、そのまま大学にも行かれたということですね。

○シロタ はい。先程の話の続きで、私と母はキエフに戻ったのですが、やはりプリピャチには戻れないということが分かったのです。1986年の夏、つまり事故後1ヶ月ぐらいい経ったときに、キエフの子どもはみんな地方のサマーキャ

ンプに行かされたので、私もそれに行きました。しかし、それっきり母とは連絡が取れなくなってしまって、母は友人の所を点々としながら、私の行った先を探していたようです。私は9月末に母がやっと私を見つけるまで、サマーキャンプにいました。

その後、私と母はキエフに戻って、私はすぐ入院しました。それでしばらくは、私は病院で過ごしていたのですが、1986年12月31日にキエフでアパートの支給があったので、1987年の正月は自分たちのアパートで過ごしました。しかし、何も無いがらんとしたアパートでした。

○川野 私はサマーキャンプの話初めて聞いたのですが、どういった規模で、どこにサマーキャンプに行ったか覚えていらっしゃいますか。

○シロタ 最初はキエフのそばのイルペニという町のキャンプに行ったのですが、そこから、さらにオデッサ州のセルギイフカという海岸にあるキャンプに行きました。

○川野 そこからキエフに帰って、その後はお母さまと2人でキエフのアパートに住んでいた、ということですか。

○通訳 いえ、9月末にサマーキャンプからキエフに帰ってきて、すぐ入院ということになったので、12月末まで病院で過ごしていました。

○川野 アパートの支給があって、戻ってきた後のキエフの様子を教えてください。ただあればありがたいのですが。

○シロタ 1987年になって、すぐに学校に行ったかということ、そうではないのです。私は事故後半年以上、学校に行っていなかったわけですから、そのままでは進級ができないと言われてまして、1987年の秋、学年はじめの9月になって4年生に進級しました。

○川野 その後は、順調に、中学、高校と行かれたんですか。

○シロタ はい、そうです。

○川野 では続けて、プリピャチを離れる時の家族構成および現況を教えてください。ただですか。お母さまが1981年にプリピャチに転動された、その前の話ですね。お母さまの年齢と、現在の状況を教えてください。

○シロタ 母は私と20歳違いなので、事故の時も私の歳に20歳足した年齢で

す。

○川野 お母さまは現在もキエフに住んでいらっしゃるんですか。

○シロタ そうです。

○川野 現在、お母さまは仕事をされていますか。

○シロタ いえ、母は1級障害者で、もうだいぶ前から仕事はしていません。

○川野 お母さまの障害は、チェルノブイリの事故と関係している、ということですか。

○シロタ そうです。事故との関連が認定されています。

○川野 事故とお母様の障害に因果関係があるということでしょうか。

○シロタ はい。

○川野 お母さまにどういった障害があるか教えていただけますか。

○シロタ “チェルノブイリ被災者の病気セット”という言い方をしますが、それが一式そろっています。自律神経失調から始まって、白内障やその他もろもろの不調、またたいていの内臓に疾患があります。

○川野 少しプリピャチ時代の話をお聞かせください。当時のアパートの状況、お住まいだった状況とかは覚えていらっしゃいますか。

○シロタ 私が母と住んでいたのはプリピャチの寮で、1DKの部屋でした。その寮と言いますのは、正式に一般のアパートが支給される前の一時的なものという位置づけで、寮は組織としてはチェルノブイリ原発に属していたと思います。プリピャチ市内の主な施設、企業というのは、みんな最終的には原発の管轄に入っていましたから。

○川野 その寮には、どのぐらい滞在されたんですか。

○シロタ 最初、プリピャチに引っ越してから1年ぐらいは、プリピャチ市内のホテルに原発の費用で住んでいました。その後、いま言った寮の部屋に移って住んでいたのですが、1986年中には正式に一般のアパートの支給があるはずでした。

○川野 ということは、その寮に5年ぐらい住んでいた、ということになるんですかね。

○シロタ そうです。約5年です。

○川野 差し支えなければ、現在のお住まいの状況を教えていただければと思うのですが。

○シロタ 現在は母と一緒に 2DK のアパートに住んでいます。

○川野 それは 1986 年に支給されてから、ずっと同じアパートに住んでいらっしやるのですか。

○シロタ そうです、同じアパートです。

○川野 昔の話ですから、覚えていらっしやるかどうか分かりませんが、プリピャチ時代の食事の内容と、いま現在の食事の内容で何か大きな違いとかはありますか。

○シロタ 当時住んでいた所というのは、まったく別の国と言ってもいいほど違っていると思います。だから簡単に比べるとというのは、なかなかできませんね。当時、私は子どもでしたので、食事のことを自分で決めたりというのはできなかつたですから、食事の内容については詳しくはわかりません。

○川野 現在のアレクサンドルさんの仕事内容を教えていただければと思います。

○シロタ 私は現在、ネット上にある「pripyat.com」というサイトのプリピャチに関するページの編集長をしています。また、「pripyat.com」という市民団体もありまして、その副代表をしております。

○川野 「pripyat.com」というのは、どういった情報を提供しているんですか。

○シロタ プリピャチおよび、その 30 キロ圏内、立ち入り制限区域に関する、過去・現在を含めたあらゆる情報を発信しています。たとえば、プリピャチに住んでいた人の尋ね人とかもやっています。現在では、われわれのサイトは、チェルノブイリ問題に関する非公式のポータルとしては最もヒット率が多いサイトになっています。

○川野 1日にどれぐらいヒット件数があるかカウントされていますか。

○シロタ ヒット数は1日で5,000人ほどです。

○川野 すごいですね。

○シロタ このサイトでは、いろいろなプロジェクトも進行していきまして、例えばプリピャチ市内の家の住所を入力すると、その家の現在の写真が出てくる

ようなバーチャルの地図とか、あるいは先ほど言った尋ね人のページもあります。私もそれを利用して、数日前、事故後初めて、ある同級生と会うことができたのです。

プリピャチ市内の建物に関する公の書類などは全部失われてしまったので、われわれは 5 年ぐらいかけてプリピャチに通って、この住所の家が、いまどうなっているかというのを調べたのです。いまは、例のグーグルの衛星から見た写真も使えます。

また、ボランティアでプリピャチに通って、プリピャチを 3D で現在の様子をバーチャルに体験できるような、現地に行かなくてもプリピャチに入ったらこうなっている、というのをネット上で見ることができるシステムも、いま作っているところです。

ウクライナでは、いま 12 月 14 日というのが、公式に事故処理作業者の日というふうに国で決められているのですが、それに合わせて 12 月 1 日から 2 週間ほど、モスクワでこのチェルノブイリをテーマとした写真展を開催しました。

私たちはプリピャチに関係のある情報は、いかなる情報でも世界中から集めています。事故前にプリピャチで、素人の方々が映画を 8 ミリフィルムで撮るクラブがあって、その人たちが撮っていた、10 時間くらいのフィルムが最近手に入りました。いまそれをデジタル化するのに資金がないのですが、いずれ資金が集まれば、そのフィルムもデジタル化して、きちんとしたデータで保存したいと思っています。

○川野 では、いまは、できるだけ多くの現在のプリピャチの写真を個別に集めていच्छる、ということですか。いま、写真資料は全部で何点ぐらいお持ちなんですか。

○シロタ 写真資料というのは、事故前、事故後、両方合わせての枚数ですか。

○川野 事故前の写真もあるわけですね。事故前・事故後のものをあわせて、全部で何枚くらいありますか。

○シロタ 情報量で言うと、数百ギガバイトぐらいになっています。すでに出版されている写真もありますし、未出版のものもあります。自分たちが、そういうはっきりした目的をもって写真を撮り始めたのは 1994 年からですが、いま

はもう、週に一回ぐらいのペースでプリピャチに通って、写真を撮っています。

○川野 現在もプリピャチへ通っていらっしゃるのですか。

○シロタ 現在も通い続けています。当初はもちろんアマチュアの写真で、カメラも当時の一番安いようなものでしたが、いまはもう少し機材等も良くなっています。

○川野 私も去年の6月にプリピャチに行きまして、町をいろいろ散策しました。その時、非常に文化的で洗練された町だったのだなということは思ったのですが、事故当時の写真資料というのは、なかなかわれわれが目にすることはありません。そのアレクサンドルさんの作っている、ネット上のサイトにアクセスすれば、すぐにわれわれも、そういった写真資料などの情報収集ができるということなんですか。

○シロタ はい。写真のほかにビデオマテリアルもわれわれのサイトに掲載されています。例えば事故前と言っても、プリピャチが建設される当時のニュース画像、つまり1980年代のプリピャチとか、そういう動画もありますし、またムィハイロ・ナザレンコさんという方が撮影した事故直後の、4月26日、27日、28日のプリピャチの映像もあります。プリピャチにヘリコプターが飛んでいた、あるいは化学部隊が入って路面を洗浄したり、そういう動画もサイトで見られます。

○川野 そのサイトはウクライナ語だけですか。ロシア語での表記もありますか。

○シロタ サイトはロシア語、英語、それから、いまはまだ完全ではないのですが、ドイツ語バージョンもあります。このサイトは最初から広い対象を考えていましたから、ウクライナ語バージョンはありません。ウクライナにいる人も、ロシア語はみんな基本的に分かるわけですから。

このサイトの更新も、なかなか手間のかかる仕事です。というのは、私以外の多くの人はボランティアとしてかかわっていて、それぞれ自分の仕事の合間に、時間を見つけてかかわっている人たちが多く、なかなか時間がかかるのです。それでも、来年の事故25周年までにはデザインも更新して、新資料も多く掲載したいと考えています。

いま考えているプロジェクトでは、チェルノブイリ原発のそばで始まろうとしている新石棺の建設とか、プリピャチの現状、チェルノブイリ市の現状といった最新の動画をサイトに掲載して、現地に行かなくても、プリピャチの町がほしいという様子である、というのが分かるようなものを考えています。

○川野 ぜび、アクセスしてみます。アドレスを教えてくださいよろしいですか。

○通訳 はい、アドレスを書いておきましょう。

○シロタ その、下のアドレスのサイトは、写真とか動画が特に集まっているサイトで、上のアドレスのサイトはメインサイトです。ちなみに、昨年モスクワで写真展をやった時には、ステレオ・フォトグラフィーという、めがねをかけると立体に見えるというものもプロのカメラマンに作ってもらって、それも展示しましたし、また写真展の会場でセミナーをやったり、いろいろな催しも平行してやりました。

○川野 ぜび、この「pripyat.com」にアクセスして、いろいろ勉強したいと思えますけれども、1994年から「pripyat.com」の活動を始められたんですか。

○シロタ ドメインの登録をしたのは2003年か2004年だったと思います。最初にこのサイトを作ったのは自分ではなくて、元プリピャチ住民の方々なのですが、最初、彼らは写真を掲載したりして、自分たちの間のフォーラムのサイトとして利用しておりました。いまでは、だいぶ趣が変わって、先ほど言いましたようなポータルなサイトになっています。

○川野 オレクサンドルさんは、いつから「pripyat.com」の編集長をされているんですか。

○シロタ このサイトで私が仕事をし出したのは、2004年か2005年だったと思います。はっきりは覚えていませんが、最初は文学と文化欄の編集をやっていました。その後、最初からやっていた編集長が身をひいて、そのあとを誰がやるかということになって、みんなで相談した結果、私がやるということになりました。だから、私が編集長としてやり出したのは2005年からです。

○川野 やはり、こういったものに興味があったのは、プリピャチ出身であるということが一番大きいのですか。

○シロタ はい、そうです。それまで、いろいろほかの仕事もしていたのですが、常にプリピャチというテーマに巡り合わせでかかわるようなことがありまして、やはりこれは運命だと思いました。その編集をやり始める前は10年ぐらい、水泳プールを建設するという仕事をしていて、その水泳プールの仕事もそれなりにうまくいっていたのですが、編集長の仕事と完全に両立するというのは難しいので、思い切って、いまの仕事に切り替えました。

○川野 大学は、たしかジャーナリズム専攻でしたね。卒業してから建設関係のほうに携わられたのですか。

○シロタ はい。大学卒業後、ジャーナリズムを活かせる仕事が見つからなかったので、やむなくプールの建設をする仕事をしていたわけですが、大学卒業前に国連の出していたニュースに投稿して記事を書いたことがありました。それは「心にとどめておいてもらいたい」という記事で、自分の回想記事を書いたものです。

○通訳 その記事は私が日本語に訳しました。

○川野 そうですか。

○シロタ ソ連崩壊後の一般的な傾向として、大学を出ても専門の仕事は見つからないので、例えば歴史をやっていた人が建設の仕事をしていたり、ビジネスをやったりとか、本来の専門とは違う職業に就いている人が多いのです。

○川野 その「心にとどめておいてもらいたい」という記事は、アレクサンドルさんのプリピャチ時代のことを書かれたものですか。

○シロタ 主に子どもの目で見えた事故前の町の様子、それから事故が起こった後になって、自分がそれから得た結論、教訓を書いています。それは特に国連のニュース向けというので書いたのではなくて、私がある時、書きたいという気持ちに駆られて書いたものが掲載されたのですが、どういう経緯で私がこの記事を書くに至ったか、いまはよく覚えていません。

それで、その私の書いた記事が、グリーンピースの目に留まって、グリーンピース・ウクライナという所が、事故10周年の1996年に、事故の証言者のツアーというのを企画して、1996年の4月から5月の1カ月ぐらい私もアメリカに行きまして、いろいろな所でスピーチをしました。

○川野 その「心にとどめておいてもらいたい」という記事を日本語に翻訳したということですが、アレクサンドルさんはそのことはご存じでしたか。

○シロタ はい、知っていました。

○川野 ぜひその原稿を見させていただければと思います。

○通訳 はい、うちにあります。

○川野 では、ぜひ1部いただけますか。その1996年の証言者ツアーの時のインタビュー、あるいは記事というのも、この「pripyat.com」でネット上に公開されているんですか。

○シロタ はい、あります。

○川野 わかりました。ありがとうございます。先ほどのお話だと、「pripyat.com」というのは、ほぼボランティアの方で経営されているということでしたけれども、収入のほうは広告収入等が中心になっているんですか。

○シロタ サイトに載せている広告というのは、ほとんどドメインを維持していくための経費に使っておりまして、それ以外のサイトを運営していくための経費というのは、自分たちがほかの仕事をした収入の一部をあてています。

私としては、広告は一切なしでやっていきたいのですが、残念ながら、それを実現させられる可能性がいまはないので、取りあえず、そのドメインを押さえておくために広告を入れているわけです。

○川野 オレクサンドルさんは、いまはこの「pripyat.com」編集の専任でいらっしゃるんですね。

○シロタ はい、現在はこのサイトの仕事のみです。もちろん、前のプールを作る仕事のほうが、経済的にはずっと良かったわけですが、お金と自分の興味とどちらを取るかという、なかなか両立は難しいわけです。

○川野 この「pripyat.com」、あるいはネットを通じてお仕事をされていると思うのですが、ネットでのお仕事というのは、収入のほうはいかがでしょうか。

○シロタ このサイトからの収入というよりは、そのサイトに付属するいろいろなわれわれのプロジェクト、例えばゾーンへ人を連れて行くということも、われわれがオーガナイズしているのですが、それが唯一の収入源です。

もちろん、これは夢のような話かもしれませんが、できればゾーンへ行きた

い人を私たちは無料で連れて行きたいわけです。そのために助成金などをもらえればとは考えています。しかし私は10年間、プール建設の仕事をやってきたので、自分でお金を稼ぐのには慣れていますが、人をお願いをしてお金をもらうというのはどうも慣れていないので、なかなかうまくいきませんね。

○川野 少しプリピャチに住んでいた頃の話をお聞きしたいのですが、当時、アレクサンドルさんは小学校3年生ですか。当時の生活状況がどうだったのか、生活が豊かであるのか、ないのかというのは非常に判断が難しいと思うのですが、当時の暮らし向きなどについて少しお聞きしたいと思います。

○シロタ 私の母は、お金のために何かをやるという人では全然なくて、給料を求めて仕事を探すというタイプではなかったのです。しかし、その当時、私たちの生活に不自由はなかったと思います。もちろん家具としては、白黒テレビと棚とソファと椅子と、そういうものが一つずつという状態でしたが、この時、母は私を育てながら、やりたいことはやれていたと思います。つまり生活のために、ほかのバイトをしなければいけないとか、そういうことはありませんでした。もちろん、車が欲しいとか、もっといろいろな欲があれば、そうはいかなかったかもしれません。

○川野 オレクサンドルさんにとって、プリピャチはどんな町でしたか。

○シロタ 私はその町を一目見た時から気に入りました。もちろん、それまで、そんなにあちこちの町を自分で見ていたわけではないのですが、ヘルソンとか、クレメンチュークとか、ポルタヴァとか、それまで住んでいた所や行ったことのある町に比べても、プリピャチというのは、とてもいい町だという印象がありました。

○川野 それは、いまでも変わりませんか。

○シロタ いまだに自分がキエフ市民だと思えることができないんです。子ども時代に一番楽しい時を、プリピャチで過ごしたからかもしれません。その後は病院に入院したりとか、いろいろありましたので。

事故後、私はキエフに25年近く住んでいるわけですが、それでも、もしプリピャチに戻って住めると言われれば戻ると思います。もちろん、先ほど言ったように、仕事で頻繁にプリピャチには行っているわけですが、住んでいるとい

うのではないので、住みたいという思いはあります。

○川野 プリピャチ時代で一番印象深いことはありますか。今でもよく思い出
すこととかはありますか。

○シロタ 印象と言えば、いろいろあるのですが、自分がそうやって仕事でプ
リピャチに行く時にも、いまだにいろいろ思い出すことがあるわけです。

例えば2年前、9月の初めぐらいにプリピャチに行って、その時、一人で私が
当時学校に登校する時に歩いていた道を歩いていると、ふと何かのにおいがし
て、ぱっと思い出したのですが、学校のそばにマルメロという中国の小さい実
がなる果物の木があったんです。こちら国の方では学年始めは9月1日ですが、
そのころに学校に行くと、ちょうどその実が付いていた。そして、休み時間
になると、その木の所へ走って行って、実をもいで食べていたということを思い
出します。

しかし、その木のことは2年前現地に行くまで、事故後ずっと思い出したこ
とがありませんでした。そのにおいをかいで、ぱっと印象が鮮やかに戻ってき
たのです。そういうことはプリピャチに行くとよくあって、プリピャチのどの
場所に行ってもそうやって昔の記憶を思い出すことがあるわけですね。

例えば、事故後に一時倉庫として使われていて、その後しばらく閉鎖されて
いた体育館のような所がプリピャチにあったのですが、去年私が行ってみると
そこの中に入ることができました。その体育館の中ではサッカークラブがあっ
て、当時私もやってみようかと思って3回ぐらい参加したんですが、サッカー
ってもっと楽なものかと思ったら、とにかくたくさん走らなければいけないと
いうのが分かってやめたとか、そういう記憶が戻ってきたりしました。私のあ
らゆる記憶がプリピャチの町に詰まっています。

○川野 私は去年6月にプリピャチを訪ねて、その時、小学校に行きました。
校舎の中は散乱した状態で、いろいろなものが床に落ちていて、あるものは腐
っていて、そういう風景というか情景を見て、われわれは、事故前の状況は知
らないのですが、非常にもの悲しい気分になりました。

アレクサンドルさんは、いま、プリピャチのいろいろな所を訪問されて、非
常に複雑な思いがおありになるんだと思うのですが、現状を見て、どういった

ことを一番感じられますか。

○シロタ プリピャチに行く前の自分の気分とか、あるいは行った時期、誰と一緒に行くかということいろいろ感じることは変わってくるわけですが、ここ15年ぐらいは、毎年5月9日は元住民のためにプリピャチに行けるという日になっていて、以前自分の住んでいた所を見たいとか、墓地にお参りしたいとか、そういう人たちのための日があります。

しかし近年では、プリピャチに直接関係のない若者が、それに便乗して行って、ただ「へえ」とか言って面白がっている人もいます。そういう人たちが、その日を利用してプリピャチに行く傾向があつて、最近は外部から入って、いたずらをする者もいるので、私たちが行く時にはパトロールをしています。町を管理している役所と共同でパトロールをやっているのですが、そういう面白半分の若者がお酒に酔っていたずらをする、そういう跡を見ると非常にやりきれない思いがします。

しかし、学校に教科書が散らばっていたりとかいうことは、取り急ぎの移住が行われて、その後、除染のため学校に人が入ったということで、しかたのない部分もあると思います。しかし、いまプリピャチというのは、多くの人にとっては野外博物館のようなものになっていて、そこに入って、そういういたずらのような心ない行為をするというのを見る時のほうが、ずっと自分にとってはつらい。

○川野 よくわかりました。

○シロタ 今年の5月9日には200人ぐらいの人がプリピャチに行ったと思うのですが、いま年間でゾーン内に入る人は3,000人ぐらいです。私たちはプリピャチの中のごみの片付けなどもボランティアでやっているのですが、いまは見学に行った人がペットボトルを投げ捨てたりとか、そういうものが散らかつて、ゴミ捨て場のような状態です。

○川野 1986年当時のお話で、もう一点聞かせてください。4月27日にバスに乗って避難されるということでしたね。避難当時は、すぐプリピャチに帰れるものだとお考えだったということですよ。プリピャチに帰れないということを理解されたのはいつかということと、その時、どういうことを考えられたか、

感じられたか、そして、その時にお母さまとどういった話をされたのかということをお母さまに聞いていただければと思います。

○シロタ 事故後、私が初めてプリピャチに行ったのは1994年ですが、実はその時まで、どうしても帰れないというのが信じられない気持ちがあって、心のどこかでは、ひょっとして、また戻れるのではないかと考えていました。しかし1994年に再びプリピャチへ行って、自分の目で町の現状を見て、これは帰るのは無理なことなんだな、ということがやっと意識できました。

○川野 現実としてプリピャチには帰れないことが理解できたということですね。

○シロタ ええ。先ほど話した記事にも書きましたが、事故直後の、ヘリコプターが来たり、軍人が来たりというのは、私のような10歳の男の子にとってはむしろ非常に面白いことで、避難でバスに乗るとかというのも遊び半分のようには捉えていました。

○川野 では、プリピャチからキエフ、キエフからベラルーシ、ベラルーシからサマーキャンプと、そういった避難の過程というのは、特につらい思い出としてあるわけではないんですか。

○シロタ オデッサ州の海岸のサマーキャンプに最初3カ月いたわけですが、そこはたまたま当時のソ連に入っていたキシニョーフ、モルドヴァの首都ですが、その医科大学の学生や先生たちがキャンプの保養として来ていました。その人たちは、私たちが被災者の子どもであるということをよく理解していて、非常によくしてくれたんです。そこに行ってからすぐ母とコンタクトが取れなくなったのですが、母もそのうち見つけてくれるだろうと思っていましたし、私と仲の良かった友達もキャンプと一緒に行っていましたから、海のそばにいた3カ月ぐらいというのは楽しく過ごしました。ところが夏が終わって9月に入ると、ピオネールキャンプのほうに移されました。そこでは、がらっと扱いが変わって、私たちは、「早く出て行ってほしいな」という感じで周りから邪魔者扱いされるようになりました。ですから、そのピオネールキャンプでの1カ月間は非常に悪夢のようでした。

9月も末になると、親が迎えに来ない子どもたちは孤児院に移すという話もあ

って、実際に移された子もいるのですが、私の母親はぎりぎり間に合って、私を引き取ってくれたのです。

○川野 そういった避難の情景というか、様子を思い出すことがありますか。バスで避難したり、ベラルーシに行ったり、キャンプの様子とかを思い出すことはありませんか。

○シロタ いま私がサイトの仕事をしている関係で、よくそういう質問もされますので、結果としてその時の様子は思い出します。

○川野 わかりました。現在の健康状態はいかがですか。

○シロタ 避難後は被災者として年二回、春と秋の健康診断がありました。その結果、心臓が悪いかいろいろな理由で、年に1カ月から1カ月半ぐらいは入院をしていたのですが、高校卒業のころに、もうそれに嫌気がさして、それ以降、健診は一切受けていません。だから、いまの健康状態が自分ではどうなのか分かりません。2000年に一度、交通事故に遭って、その時、脊椎を傷めて1年ほど入院していたのですが、それはけがの話で、それ以外は、いまの私の健康状態というと、医者に行っていないもので、病名等は分かりません。

○川野 被災したことで、健康不安というのがありますか。

○シロタ 率直に言うと、それほど気にしていません。いまだに、その地区の病院で私が被災者だというのは登録されているわけで、地区の病院の先生が、うちの母親経由で、きちんと健診を受けなさいと圧力をかけてきます。しかし、1986年から18歳になるまで、毎年、先ほど言ったような健診を受けて、入院を繰り返していたのですが、その時に注射をされたり、いろいろ検査をされたり、さんざん痛めつけられたにもかかわらず、自分としてよくなったと思わなかった。だから、そういったことに嫌気がさして、医療というものを信じていないのかもしれない。ですから今では、病院で時間を無駄にするよりも、もっとやるべき重要なことがあると思っています。

○川野 オレクサンドルさんのお仕事からして、この質問の答えは分かっているような気もするのですが、事故にかかわる体験、プリピャチでの体験とか、そういったことを人に話してみたい、あるいはそういった情報を広く提供したいというふうに思っているのでしょうか。

思っただけでいいから、仕事でもそういうウェブサイトを立ち上げておられるのだと思いますが。そして、それは一番誰に知ってほしいですか。

○シロタ 私の気持ちとしては、誰でも一生に一度はあの町に行って、その事故の規模を意識すると同時に、そういうゴースタウンが二度と生じないように、と願う気持ちになっていただきたいのです。

私の経験として、プリピャチのそのゾーンにいろいろな人を連れて行った時に、みなさん石棺のそばまで行って、放射線被害の高い所で写真を撮るわけです。しかし、みなさん出発する時は子どもっぽい興味で、見物気分で行ったような人も、多くの人は、やはり考えが変わるようです。キエフに戻ってくると、いろいろ見せてもらって良かった、という人が多いです。

そういうふうに行った人のうち、十人に一人でも、こういう廃墟のような町が今後生まれないようにと願ってくれれば、私としては満足です。

○川野 原子力発電については、どう思われていますか。

○シロタ 私もっと若い時は、原子力は自分や家族、その他の人々の健康を害したり、亡くなったりする原因となる、ということから原発に対してははっきりと否定的な立場でした。ですから、グリーンピースから被災者のツアーとして、アメリカに行って話をするという提案があった時にも喜んで行きました。

いま現在の私の態度はどうかというと、もちろん原子力発電に賛成になったわけではありません。しかし、ウクライナの現状を見て、原発に取って代わるオルターナティブなエネルギー源というのは、いま確立していないところから考えて、前ほど否定的ではないといえます。もちろん原子力は危険な技術だと思いますので、代替のエネルギー源があれば原発はやめるべきだ、無ければ無いほうがいいと思っているわけです。

われわれのサイトでも、客観的な立場をとるということを基本にしています。ジャーナリズムの原則として、いろいろな視点からの意見を載せることが重要だと思いますので、原発賛成・反対、両方の意見も載せています。われわれのサイトの仲間でも、そんな生ぬるいことではいけないと、もっと反原発を鮮明にしなければという意見の者もいますが、私としては賛否両論を載せるべきだと思っています。ですから、私は現在も原発関係者とも付き合いがあります。

○川野 私は、そんなに多くの方々とお話したことがあるわけではないのですが、ウクライナで反原発の方はあまりいらっしやらないというようなイメージがあります。アレクサンドルさんのサイトの関係者で、明確に反原発という立場の方はいらっしやるんですか。

○シロタ 一般的な話として、いまウクライナで、どんな問題についても、はっきりした態度を持って、それを維持するという人は残念ながら少ないんです。それはウクライナでは政治的、経済的にずっと揺れが大きいということがいけないのかもしれませんが。自分の確固とした意見を持つためには、きちんと問題をよく知って調べなければいけないわけです。

原発の問題については、エコロジー関係者は、そういう反原発という人もいます。しかし、ウクライナにあるエコロジー関係の団体の一部は、残念ながら政治にかかわっているんです。政治ということになると、それこそいろいろ意見が揺れてしまうので、彼らは確固たる意見を持ち続けるということが難しいのです。

○川野 なるほど。では、アレクサンドルさんがかつて反原発という考えだったというのは、やはりそれまで慣れ親しんだプリピャチという町から出なければいけなかった、というのが最も大きな要因なんですか。なぜ反原発の考えになったのですか。

○シロタ 一言でいえば、原発というエネルギーの作り方の危険性というものを身をもって感じたからです。その当時は私ももっとラジカルだったので、グリーンピースの立場というのが、自分にとってはもっと近い感じがしていました。

○川野 なるほど。

○シロタ 先ほどもいいましたけれども、今の私が原発に反対でなくなったわけでは決してありません。いまだに危険だと思っています。

ただ、現在のウクライナの状況を考えると、原発以外の発電施設を開発するプログラムは全然機能していませんから、直ちに原発をすべてやめてしまうことはできないと思います。また、私が原発反対だという理由は、原発を運転することに伴うリスクということだけではなくて、原発使用の結果、残っていく廃棄物とか、使用済み燃料というものが、次世代へのツケとなって残っていく

ということです。いま、ウランを掘って原発を運転することは、そういった廃棄物等が負の遺産として後に残っていくという結果になることについても、私は反対です。

○川野 こういった被災者からのお話を聞く機会というのは、オレクサンドルさんで七人目なのですが、原発に対して、オレクサンドルさんのようなご意見を聞いたのは初めてです。

○シロタ いまお話したのは私の前からの考えですので、いま聞かれて、改めて考えて言ったわけではありません。

○川野 わかりました。核兵器についてはどう思いますか。

○シロタ 核兵器に限らず、どんな兵器も必要ないものだと私は思っています。

○川野 私もそう思います。

最後の質問です。シロタさんは1986年からキエフに住んでいらっしゃる。プリピャチから避難後いろいろな所を回られて、キエフに帰ってこられて、小学校4年生の時に復学されるということでしたよね。復学当時にプリピャチ市民であったということで、何らかの差別を受けたことがありますか。

○シロタ はい。私は4年生から9年生、日本でいう中学の卒業まで、ずっとそのことで戦わなければいけなかったのです。

私の場合、ほかの元プリピャチの子どもたちと違う条件がありました。私がキエフで入った学校には、プリピャチからの移住者の子どもは2人しかいなかったんです。ところが、すぐそばの向かいの学校には、たくさん被災者の子どもたちが入っていました。一般の学校は月曜から土曜までだったのですが、その被災者の子弟が多い学校では、授業も月曜から金曜までで、授業時間も少し短かったようです。それから、被災者の子弟は学校で給食として出る、朝食や昼食が無料というような特典がありました。

それをキエフの子どもたちが聞いて、自分たちの学校は月曜日から土曜日までであるのに、移住者の子どもたちが行っている学校は違うというので、子どもの心理として、自分たちがついていないというのは、こいつら被災者たちのせいだとか、被災者だけがそういういい目をみているというのでやっかみがあったんです。私は自分の学校に2人しか被災児童がいなかったので、キエフ

の子どもたちから、いろいろ嫌がらせとか、一緒に遊んでもらえないとか、からかわれるということがあって、被災者側だった私たちとしては自分の権利を守るためにずっと戦わないといけない状態でした。

○川野 そういった差別的なものが徐々に改善されるような時期というのは、いつごろだったのでしょうか。

○シロタ 学校を卒業した後は、特にそういう差別はなかったです。やはり子どもというのは残酷というか、あまり考えないでそういうことをするものだからね。

また事故から時間がたつにつれて人々も慣れてきたということがあります。事故から24年もたつと、いまの若い人などはブリピャチというのがどういふ町か、きちんと知らない人もいるぐらいですから。

○川野 かなりプライベートなことをお聞きして失礼かもしれませんが、ご結婚されたことはありますか。

○シロタ 以前結婚しておりましたが、離婚しまして、元配偶者と8歳の子どもは、いまアメリカにおります。

○川野 わかりました。われわれは、こういう調査を通して、非常に大きなテーマですが、原発事故っていったいなんだったんだろうか、ということはずっと考え続けたいと思っています。今日、われわれは貴重な話を聞かせていただきました。

この一部を使って論文を書いたり、調査報告を書いたりします。もう一つ考えているのが、今中さんと、これは今後相談していきませんが、このインタビューの全文をネットに公開するというようなことも考えています。そういったことに使わせていただいてよろしいでしょうか。

○シロタ 構いませんよ。私もそういうことが目的で、いま自分のサイトの活動をやっているわけですから、名前を載せていただいても結構です。

○川野 オレクサンドルさんのほうで、もし必要であれば、われわれの聞き取りの結果も、そちら活動のほうに情報提供することも可能です。

○通訳 どういうかたちで提供しましょうか。

○川野 それの問題なんですよ（笑）。

○シロタ 英語であれば問題ありませんよ。

○川野 何とか頑張って英語で提供できるよう考えてみます。

今日、大変貴重なお話を聞かせていただいて、とても勉強になりました。私は先ほどお話ししたように、広島・長崎の原爆被害についての研究をしています。今中さんは原爆の線量評価、チェルノブイリの線量の評価等々を研究されています。何かわれわれにご質問等がありましたら、お聞きいただければと思います。

○シロタ では、このゼムリヤキ経由で、今後、連絡を取らせていただいてもよろしいですか。

○川野 はい、もちろん。私の名刺もお渡ししておきます。

今日は本当に貴重なお話をありがとうございました。私からの質問は以上です。今中さんのほうから何かありますか。

（今中氏、シロタ氏の間でロシア語での会話有り）

○川野 今中さんの質問の要約と、回答を教えてください。

○今中 2005年のIAEAやWHO、あと数か国の代表が加わった報告書は、それまでにチェルノブイリ事故の放射線被ばくで亡くなった人は、約50人であるという内容だったそうです。一方、ウクライナ政府のデータでは、1万8,000世帯に対してその世帯主が、事故が原因で亡くなったことを認定して手当を支給している。すなわちウクライナ政府の見解では、事故の結果として1万8,000人、そしてチェルノブイリフォーラムは50人という、事故が原因で亡くなった人数についての相違があるということです。この違いをどう考えるかということは、チェルノブイリ事故を見る時に、ものすごく大きな違いになってくるから、それはどう考えますかという質問をしました。

○シロタ 私が個人的にそういうデータの収集をやったことがないので、すぐには答えられないのですが、実体験に基づいて言えば、いま私が住んでいる集合住宅、母親が住んでいる集合住宅には全部で500前後の世帯が住んでいるの

ですが、ほとんどがチェルノブイリの被災者です。その集合住宅では 3 日あかないぐらいの頻度で葬式が行なわれています。

私が子どもだった時に、学校の試験中に突然死した子もいるし、先ほど言ったように、私が毎年、入院をしていた時に、その病院の小児科の血液病部門とか、内分泌の部門などで入院している被災児童はたくさんいました。白血病の治療を受けて髪の毛が抜けていった子もいます。だから、そういう自分の体験からすれば、チェルノブイリフォーラムなんかの言っていることはおかしいと思っていました。

私は IAEA についても原子力マフィアであるというふうに思っていました。○今中 私たちの所にもそのように疑っている者が多くいます。日本で原子力発電は、どんなことが起きても安全ですと言って日本中に原発を造ってきました。私は原子力の専門家なのですが、私と私の仲間は、原発で事故が起きたら非常に大きな被害をもたらすと 30 年以上前から確信していました。それで、24 年前にチェルノブイリ事故が起きたので、これがどんな事故であったのかというのは、その時から私や私の仲間の研究課題でした。

チェルノブイリ事故から 10 年ぐらいたった時、日本の原子力を進めようとする人々は、チェルノブイリ事故は大きな事故だったけれども、実際の被害は大したことはなかったと言い始めまして、私はそんなことはないということで、彼らの意見とは反対の立場から、きっちりと事故の影響を調べて、それを日本のみんなに、世界のみんなに知らせるのが仕事だと思っています。

チェルノブイリ事故については、3 つ大きな報告書を作って、それをインターネットに出しています。

(今中氏、シロタ氏の間で少しロシア語での会話有り)

○シロタ チェルノブイリ事故のせいで記憶力が悪くなって、携帯電話の番号が覚えられないんです。メールアドレスと携帯電話の番号を書きました。

○今中 原子力発電についてですが、原子力発電を進めるかどうかは、政治家や、最終的には一般の人々が、どういう生活をしていくかという選択の問題だ

と思っています。ですから、われわれの仕事は、人々が判断するために、できるだけ客観的な正しい情報を出して行くことだと思っています。

○シロタ まったく同感です。

○今中 原子力発電に頼らない方向に行くように私も努力していきますから、シロタさんも努力していきましょう。

○シロタ はい、そうですね。協力しないと何事もうまくいきませんから。

○川野 今日は本当にありがとうございました。

○シロタ 今日は皆さんとお知り合いになることができ、大変うれしく思います。

いま私が考えておりますのは、来年の被災 25 周年に向けて、2011 年の春に世界中で移動展覧会のようなものをやりたいと思っています。これは、まだアイデアの段階なのですが、写真やビデオなどの展示、去年モスクワでそういうことをやったと言いましたけれども、それを世界各国でできればやりたいというふうに考えています。もし、それが可能になれば、日本でも開催して、また皆さんとお会いしたいと思います。

アンナ・ヴァセツカヤ⁶氏（女性）

実施日：2010年5月25日

（インタビューの趣旨について説明・録音についての承諾 約4分）

○川野 質問項目の1番目から順次教えていただければと思います。

○アンナ 名前はアンナ、名字はヴァセツカヤです。1960年2月21日生まれ、人種はロシア人です。クリスチャンですが、とても熱心というわけではありません。学歴は中等技術教育⁷の卒業です。ロシアのオリョールという町の生まれです。

○川野 オリョールという町はどこにあるのですか。

○アンナ キエフ・モスクワ街道をキエフからモスクワに行く途中にあるのですが、モスクワからいうと350キロぐらい離れた所です。

このオリョールという町で建設専門学校を卒業しまして、1980年にプリピャチに参りました。兄がチェルノブイリ市のほうに住んでいて、彼はチェルノブイリ原発で仕事をしていました。私は専門学校を卒業後すぐ、この兄のツテで、プリピャチで働くためにやってきました。兄は当時、チェルノブイリ市に住んでいまして、そこから原発に通って仕事をしていました。

○川野 お兄さんは、いつチェルノブイリのほうに来られたのですか。

○アンナ 兄はキエフの大学を卒業して、その後、アルハンゲリスクという所で仕事をしたりしていたのです。正確には覚えていませんが、そこからチェルノブイリに引っ越してきたのが、1975年ないし1976年でした。

○川野 お兄さんがチェルノブイリで働いていらっしゃって、アンナさんはお兄さんを頼ってプリピャチに行かれるわけですね。お兄さんからどういった情報を得てプリピャチに行こうと思われたのですか。

○アンナ 兄から聞いていたのは、若い人が多い新しい町であるということでした。私はオリョールの学校でも、コムソモール（共産青年同盟）という組織

⁶ ウクライナ語なら「ヴァゼツカ」。

⁷ 日本でいう技術専門学校に相当する。

に入っていて活発に活動していましたし、各地から若い人がやってきているということ、それから住居がもらえる見通しが大きい、仕事もある、ということで魅力を感じていました。またロシアから見るとプリピャチは南のほうで気候も良いとか、他にもいろいろなプラスの面がありました。

○川野 アンナさんが1980年にプリピャチに行かれて、まず就かれた仕事は何ですか。

○アンナ その当時では、まだチェルノブイリ原発の建設が進んでいたのです、その建設に必要な建設機械の調達をするという職に就きました。その職場というのは、原発の敷地内にあったのではなくて、原発建設現場のそばに、建設用の機器がまとめてあるような所に職場がありました。私がそこで働き始めた当時は一階建ての建物でした。

その後、もう少し立派な建物が原発建設局という施設のそばにできました。その新しい職場の建物は、その後に起きた事故の後に、立ち枯れてしまった松の林がある所からもそんなに離れていない場所にあったのです。

○川野 1986年以降のことを教えていただければと思います。原発事故当日以後の話をお聞かせ願えますか。1986年までは、この建設現場の機材の調達の仕事をしていた、ということで間違いないですか。

○アンナ はい。私は事故の前、1984年に結婚しまして、主人はプリピャチのIDKのアパートに住んでいたのです、そこに一緒に住んでいました。ちなみに事故の前のプリピャチ時代には、私はスキューバーダイビングのクラブに入っておりまして、プリピャチにはそういうサークルもあったし、山登りをやる山岳クラブみたいなのもあったし、市民もこういった活動を大変活発にやっておりました。

われわれのダイビングクラブは、キエフの考古学研究所とか海洋生物研究所とも協定があって、自分たちはボランティアとして無料で労力提供をしていました。黒海でも、その考古学の研究のために海の底に沈んでいるつぼの破片を拾うなど、そういう活動もしましたし、同じサークルの男性たちの中にはバレンツ海とか日本海へ研究遠征に行った人たちもいました。

事故当時、兄は原発の運転のスタッフで、主人はタービン室の技師でしたが、

2人とも事故が起こった現場にはいませんでした。兄は休暇中であつたし、主人は夜勤ではなかつたからです。2人とも事故が起こった夜、家の屋上に上がつて、その事故の様子を見て、外には出るなというふうに私に言いました。2人とも噂で事故のことを聞いたんだと思います。

○川野 では、事故の日は皆さんご自宅にいらつしやつたのですね。

○通訳 はい。

○川野 その後の避難の様子はどうか。

○アンナ 主人は職場に残つたのですが、休暇中だつた兄とその家族、それから私は、数日間の避難と言われていたので、当座いりそうなものをリュックサックに入れてバスで避難しました。主人はその時、原発の2号炉で仕事をしていました。

後で聞いたのですが、私たちの乗つた避難用のバスというのは、キエフまで直行した数少ないバスの1台だつたのだそうです。私と兄の一家はキエフに親戚があつたのでその家に泊まつて、そこから、さらに私はモスクワに行きました。何故かと言いますと、事故についての情報がキエフでは何もなかつたのです。私はそれまで出張でモスクワにある原子力省に何度か行つたことがあつたので、モスクワに行けば何かわかるのではないかと思ひました。私はモスクワに行つて、そこには私のおぼがおりましたので、彼女の家にやっかいになりました。

○川野 キエフにそのバスで直行されたのは4月27日ですね。

○アンナ はい、27日のうちにキエフに着きました。

○川野 そしてモスクワに行かれたのはいつですか。

○アンナ 正確に覚えていませんが、29日には移動したかと思ひます。それ以降になると、キエフ駅でも制限があつて、人々が簡単に遠くには行けなかつたり、逆にキエフに来る人も制限されたりしたのですが、自分たちはそういうこともなくスムーズに行けましたので、おそらく29日にはモスクワに向けて移動してつたのだと思ひます。

○川野 その後、モスクワにどのぐらい滞在されたのですか。

○アンナ 正確には覚えていないのですが、5月1日にメーデーがあつて、ゴル

パチョフによる正式な事故についての言及があったのが5月9日ごろだったか
と思います。しかし、事故の詳細というのはマスコミには全然出てきませんで
した。それで、私は先ほどいったモスクワの原子力省を通じて夫と連絡が取れ
ないものかと思って行ったところ、夫はその事故発表の時点でもチェルノブイ
リ原発で働き続けていると言われました。そして、夫はピオネールキャンプに
仮泊しながら原発に通っているという話でした。

その時点で、やはり私がプリピャチに戻るということは無理だと言われて、
ほかの原発で働くことを勧められました。いまとは違って、携帯電話などで夫
に連絡を取るわけにもいかず、避難する時に着るものも何も持って来ていな
いし、夏の間モスクワで生活するにもお金がないし、と考えた結果、ウクライナ
のザポリヅジャ原発という、軽水炉を使用していて、チェルノブイリ原発とは
原子炉のタイプも全然違う所に行くことに決めました。

○川野 ザポリヅジャ原発というのは、どこにあるのですか。

○通訳 ザポリヅジャ原発というのは、ドニエプル川の下流のほうにあります。
キエフからいうと東南のほうです。

○川野 わかりました。ザポリヅジャ原発に着いてから、その後のことをお聞
きしたいのですが。

○アンナ ザポリヅジャに着きますと、放射線チェックの車というのがありま
して、そこで検査された結果、私の持ち物は全部放射線の許容値を超えている
ということで取り上げられました。チェックを受けた後に、ザポリヅジャ原発
で寮を与えられて、そこで住むことになりました。

○川野 そのザポリヅジャ原発には、いつまでいらっしゃったのですか。

○アンナ 9月末ぐらいまでザポリヅジャ原発で仕事をしたわけですが、チェル
ノブイリ原発で仕事をしていた多くの人は、ザポリヅジャ原発に来ていました。
その理由というのは、そこは地理的にキエフよりも南のほうで、取りあえず着
るものも夏の間はそんなにいらないだろう、ということもありました。

ザポリヅジャ原発にも大勢の人が来たので、住む所の問題が起きました。
ザポリヅジャ原発の場合、チェルノブイリ原発においてのプリピャチにあたる
職員の町、エネルゴダールという町があるのですが、その町では原子力省から、

元チェルノブイリ原発の職員に対して住居を提供するよという通知があったにもかかわらず、最初のうちは、エネルギー側はしぶって住居提供をしようとしませんでした。

それで、われわれ、チェルノブイリ原発からの移住者は団結して、申し入れ書を行政に出したりして、徐々に、一時的にということでは住居が提供されるようになったのですが、それと同時に住居だけではなくて、ベッドとかシーツとか鍋とか、取りあえず生活できるものも配給されました。

○川野 エネルギー側には9月までいらっしやったということですか。

○通訳 9月ではなくて10月でした。10月末までそこにいたそうです。

○アンナ その時期になると、キエフでも住居の支給が始まっていたのですが、それまでも住宅不足ということは問題になっていたの、住居の問題というのはなかなか大変なことでした。（また、日本でいう住民登録もなかなかさせてもらえないというような状況がありました。）当時は、その住民登録がないと就職もできないという制度でしたので、これは大変な問題でした。その他にもいろいろと不便なことがありました。

○川野 10月末までエネルギーという所にいらっしやったわけですね。それ以後、どのようにされたのですか。

○アンナ 夫にキエフでアパートの支給がありましたので、私はそちらに行くことにして、エネルギーで支給されたアパートに、支給されたベッドや鍋も全部置いて、身一つでキエフに行きました。

そのころ、プリピャチから移住した人たちは、大変精神的なトラウマというのでしょうか、例えていえば、畑に生えていたニンジンがいきなり引っこ抜かれて、ほかの所に植え込まれたような状態でした。友人とか同僚とかともばらばらになってしまって、あちこちにやられてしまったというような状態ですね。そういう中で、戻れるものならプリピャチに戻りたいという共通の気持ちが、プリピャチからの移住者にありました。

そして私はキエフに戻りまして、夫は原発内で当直体制での仕事を続けており、私もチェルノブイリ市で仕事に就きました。その仕事内容は事故処理作業の一環です。その当時、ゾーン内で仕事をしていた人たちは、みんな個人線量

計を付けていたので、その線量計を見て線量を記録するという仕事を、私はしていました。

○川野 1986年からいつまで、そういった作業をされたのですか。

○アンナ 1986年11月に始めて、1998年の末までですね。なぜ仕事を辞めたかといいますと、その時点でチェルノブイリ原発からの指令がありまして、チェルノブイリ原発職員は皆、スラブチチという町に住んで、そこから仕事に通うようにという指令がありました。しかし、夫はスラブチチに引っ越したくない、キエフで住みたい、ということでしたので、私もゾーン内の仕事は辞めて、チェルノブイリでの仕事を辞めてから1年ぐらいはキエフ市内の第6火力発電所、正確には火力発電および熱供給所というのですが、そこで働いていました。

しかし、そうしてキエフで一時的に働いていたのですが、またチェルノブイリの方に行きたくなくなって、1999年の5月だったかと思いますが、私はまたチェルノブイリ市内にある情報処理センターというような所、それはゾーン内のいろいろな統計とか、ゾーン内で働く職員の給料の計算とか、そういうことをやる仕事に就きました。

夫も一時原発を辞めたのですが、チェルノブイリ市にある設計建築事務局という所の仕事に就きました。

○川野 その当時の勤務態勢というのは、どういうふうになっていたのですか。チェルノブイリで働く期間というのは制限があったわけですよね。どういうシステムで働いていらっやったのですか。

○アンナ いまも基本的にそうなのですが、半月はゾーン内で、残りの半月はキエフという交代の勤務態勢です。そのころ、ゼレーヌイイ・ムイスという、われわれのような原発職員のための宿泊施設がある村がありまして、そこからバスで職場まで運んでもらって通勤するという体制でした。

○川野 そして1999年の5月から現在まではどのように過ごされていたのでしょうか。

○アンナ まず1997年に子どもが生まれまして、私はその時に産休をとりましたが、産休が終わると、またチェルノブイリでの仕事を続けて、2004年まで仕事をしていました。

そのとき生まれた子どもは男の子です。息子は「ジュノーの会」の甲状腺検診でも診てもらいました。

○通訳 仕事を辞められた理由は何だったのでしょうか。

○アンナ 家庭の事情です。まず主人がかなり重い病気にかかって、子どもも小さかったので、私はロシアにいた実家の母に家に来てもらいました。主人は7年ぐらい前に癌が発見されました。

○今中 ご主人に見つかったのはどこの癌ですか。

○通訳 男性の癌、ということなので前立腺癌かと思います。

○アンナ 主人は手術をして、その後、化学療法をしました。その後、母も6年ぐらい前から、ずっと病気をしています。

○川野 ご主人は何年生まれですか。

○アンナ 1949年1月11日生まれです。

○川野 ご主人は手術をされて、化学療法をされたということですが、今ほどのようにされているのですか。

○アンナ いまも私は主人と一緒に生活をしているのですが、いま現在彼は、仕事はしていません。夫はいつも健康的な生活を心がけていまして、断食をしたり、冬には冷水を浴びたり、寒中水泳をしたり、いまはさすがにそういうことはやっていませんが、毎日ジョギングをしています。それで彼は何かもっているのでしょうか。

○川野 アンナさんは2004年に仕事を辞められて、その後はご主人の看病をされたりしていたということでしょうか。

○アンナ 母は足の大腿骨の骨折をした後、脳卒中がありましていまは1級障害者です。夫も障害者です。ですから、本当は働ければ私は働いたほうがいいのですが、まだ子どもも12歳ですし、母親の世話もありますので、私も今は働いていない状態です。そういう事情で私もやむなく家にいます。

○川野 現在はキエフ市内にアンナさん、ご主人、お母さん、息子さんの4人で暮らしていらっしゃるということでよろしいでしょうか。

○アンナ はい、2DKのアパートに4人で生活しています。

○川野 ご主人はウクライナの方ですか。

○アンナ ウクライナのドニプロペトロウシスクの出身です。

○川野 プリピャチに行かれたのが1980年、お兄さんを頼ってこられたということですね。プリピャチに1980年に来られて、ご自身のイメージしていたプリピャチと比べていかがでしたか。

○アンナ 当時私も若かったですし、初めて自立して自分で働き始めたという時で、すべて虹色の印象というか、とても楽しく面白い時期でした。先ほど言ったダイビングのサークルも週三回やっていたのですが、そのトレーニングがある日は、仕事が終わると走って家に帰って、ぱっと飛び出して行くというような状態で、そういうことも含めて大変楽しくやっていました。

○川野 当時の収入などはいかがでしたか。プリピャチ時代の収入、経済状況はどのようなものでしたか。

○アンナ とても良かったです。夫は原発を運転する職員でしたから給料も良く、高等教育も受けているので将来の展望もありました。

○川野 当時の平均的な収入より、ご主人は高かったですか。

○アンナ はい、平均と比べても高かったです。

○川野 アンナさんの収入はいかがでしたか。

○アンナ 私の場合は中等教育までしか受けていないので、夫ほどではありません。数字もきちんとは覚えていませんが、しかし独身時代でも十分貯金もできるぐらい余裕のある生活でした。

○今中 ご主人は、どこの学校を出たのですか。

○通訳 直訳すると冶金学大学ですね。

○アンナ 運転員というのは、実際に制御盤につかせてもらうために、十分トレーニングも受けて、研修も受けてから実際に触らせてもらえるような職業でした。

○川野 では当時、2人の収入を合わせると、かなり余裕のある生活ができたということですね。

○アンナ ええ。

○川野 何かご夫婦で大きな買い物をされましたか。

○アンナ 結婚した1984年の時点で夫はアパートもあり車も持っていたので、

大きな買い物というよりは、事故が起こるまでの 2 年間の間に、夫はインドに行ったり、私はハンガリーに行ったりと、旅行にお金を使いました。

○川野 では当時、生活の不安とか不満といったものはなかったのですね。

○アンナ その当時は、いまと比べると貧富の差というのはほとんどなかったですし、もしいい生活をしている人がいても、いまのようにひげらかすようなことはあまりありませんでした。

○川野 仮の話ではあるのですが、原発事故がなければ、ずっとプリピャチで生活されていたと思いますか。

○アンナ はい、そう思います。その当時としては、プリピャチというのは大変活気のある町で、休日であれば何らかの催しが必ずあるような町でした。一家でスポーツをやっていたりする人も多くて、大変活気がありました。

○川野 先ほどアンナさんがおっしゃったスキューバーダイビングは、黒海のほうでされるというお話でしたよね。普段は、どういったところで訓練されるのですか。

○アンナ 町の中にプールがあって、そこに通って練習していたのです。

○川野 そういうダイビング専門というか、専用のプールがあったわけですか。底が深いスキューバーダイビング用のプールがあったのでしょうか。

○通訳 私は先週見たのですが、プリピャチの市民プールというのは、すごく深いのがあるのです。私が確認したのはそれ一カ所ですが、そこを借りてダイビングもできたということでしょう。

○川野 わかりました。

アンナさんご自身の現在の健康状態はいかがですか。

○アンナ いま現在、この瞬間はべつにどういうことはありませんが、頭痛とかは結構あります。ゾーンで仕事をしていた時は、年一回は専門医による健診があったわけですが、いま現在は家族が病気を抱えていますので、そちらのほうに気をとられて、自分のことまで十分配慮する余裕がありません。

○川野 チェルノブイリで長い間働いていらっしゃったということですが、そういった事故の影響で将来、何か疾患が発症したりするのではないかという不安はありますか。

○アンナ はい、あります。特に冬場などはそういう気持ちが強まります。

○川野 原発事故のために、自分の人生がすごく大きく変わってしまった、狂ってしまったという思いがありますか。

○アンナ 一言では言えません。というのは、事故の後にキエフで子どもが生まれた時は大変な喜びだったわけです。一方、いまキエフに住んでいるということは、それほど私にとってうれしいことではないのです。大きな町に住むというのは自分に合っていないので、例えばブリピャチや、その後につくられたスラブチチなどのほうが私は気に入っていたのですが、息子の将来ということを考えますと、やはり大きな町であるキエフで教育を受けたほうがいいのか、そういう気持ちもありまして現在はキエフに住んでいます。だから、そういったことは運命の巡り合わせということもあるでしょう。

○川野 原子力発電について、どう思われますか。

○アンナ 何事も進歩しているものですから、もちろん安全性ということが一番大事ではありますが、どこか一カ所にとどまっているというわけにはいかないとします。

○川野 安全に使われるという担保があれば、原子力は基本的には推進されるというか、原子力は肯定的に捉えるということですね。

○アンナ もちろんです。ろうそくの時代でもないし、新しい車が出れば、それに乗りたいと思うし、また洗濯機をやめて手で洗うというふうにはなりません。やはり物事は進歩していくものですから。

○川野 次の質問は、私が広島あるいは長崎の被爆者の方々にも、これまでずっと聞いていることです。事故処理に関係するような仕事をずっとされて、ご自身の健康不安もあるということでしたけれども、自分が被ばくしたことで、出産の時不安を感じましたか。あるいは子どもの健康に不安を感じたことはありますか。

○アンナ 私は38歳で出産したわけですので、こちらではかなりの高齢出産とみなされて、DNA検査とかの、いろいろと追加的な検査もされました。

○川野 選択肢もなくDNA検査をされたのですか、それとも望まれて、オプションとしてDNA検査を受けたのですか。

○アンナ 医師から検査を受けることを勧められました。検査に際して同意書というものを、もちろん書いたわけです。万一異常が見つかった場合、中絶するかもしれないというようなことを言われました。

○川野 現在お子さんはお元気ですか。

○アンナ 先ほど申しましたように、プリピャチでは夫も自分もスポーツを積極的にやっていたので、息子についても小さい時からプールに連れて行って泳がせるということをやっています。6歳から柔道もやっています。

しかし、息子には甲状腺の問題がありまして、大きさとしてはそんなに肥大していないのですが、ホルモンが基準よりも多すぎるというような問題、それからリンパ節が腫れている、というのがあって、観察を続けるということになっています。それから消化器系もあまり丈夫ではないので、ちょっとやせています。

また、去年は手の骨折をして、今年は足の骨折をしているので、カルシウムが足りないのかなという気もします。

○川野 わかりました。最後に一点教えてください。キエフに移住された直後から、プリピャチから移住したということで何らかの差別、偏見、そういったものを受けられたことはありますか。

○アンナ 先ほど言いましたように、当時、住居不足という問題がありまして、このキエフでもずっと住居に入る順番待ちをしていて、キエフにはじめから住んでいる人からは自分たちが入るという時に、「待った」がかかって移住者が代わりに入ったということで、ねたみを受けて、そのアパートのドアを切り裂かれたりしたこともありました。

また家具なども不足気味でしたので、配給チケットをもらって家具を買ったのですが、われわれ被災者がそのチケットで店に行っても買っていると、キエフに住んでいた人たちが「なぜそんなものを持っているんだ」と言って、囲まれて問いただされたようなこともありました。

○川野 そういったことは頻繁にありましたか。

○アンナ 私と夫については、避難でキエフに来た当時、当直体制で半分はキエフにいないという状態だったので、それほど感じなかったかもしれませんが、

キエフに住んで仕事を探そうとした人たちは、もっと大変でした。というのは、すぐには住民登録がなくて、それがなければ就職も難しいということがあったし、就職しようとしても、移住者だということが分るとなかなか採用してもらえないとか、そういうこともありました。

また、自分たちは移住当時、子どもはいなかったのですが、子連れで移住した人たちの場合は、プリピャチの子が学校に通う時に、被災児童へはビタミン剤の配給があったり、給食の時、バナナやリンゴやミカンなどが特別に追加されたりして、特別な扱いを受けたので、ほかの子どもたちからよく思われなかったということもありました。

○川野 わかりました。私が準備した質問はここで終わります。今中先生のほうからは何かありますか。

○今中 少しだけ質問させてください。ご主人がチェルノブイリの2号炉で働いていて、その後、リクビダートルとして働かれたのだと思うけど、そこで浴びた放射線量はどれぐらいの線量かご存じですか。

○アンナ 当時の決められた許容量というのは25レムで、それは超えていなかったと思います。

○今中 アンナさんご夫婦はプリピャチに住んでおられたから、周りに原発で働いて、リクビダートルで働いた人もたくさんご存じだと思いますけれども、その人が早く亡くなったりとか、多く癌になったりするようなことを聞いたり、経験されていますか。

○アンナ 正式な統計というのは分かりませんが、例えばプリピャチのダイビングクラブの仲間でも、もう亡くなった人は多いです。皆、癌が原因です。

○今中 最後の質問ですけれども、プリピャチの移住者で、リクビダートルとして働いていた人ですが、どういう社会的な補償とか特典が与えられていますか。現在の補償状況はどうでしょうか。

○アンナ まず、そういう事故処理作業をしたということで、私の場合は42歳から老齢年金が出ました。それと市内公共交通が無料、公共料金が半額といったところです。

サナトリウムでの保養、治療を受けられる、ということは法律に規定がある

のですが、私の場合、事故処理作業の仕事を辞めて以後、その治療を受けられるチケットをもらったことはありません。

○今中 ご主人が癌だということですが、その治療費、医療費はどのぐらい自己負担があるのでしょうか。

○アンナ 癌患者というのは基本的に無料で治療が受けられるはずですが、病院のほうから誰か治療費を支援してくれるスポンサーを見つけてこい、と言われたので、われわれはアンドレーエフという人が代表をしているチェルノブイリ連盟に陳情しまして、その連盟から化学療法のお金を出してもらいました。

このチェルノブイリ連盟も、もちろん陳情すべてに応えることはおそらく不可能だと思うのですが、この代表者であるアンドレーエフさんと私の夫はたまたまチェルノブイリで同僚でしたので、便宜を図ってもらえたかと思います。

○川野 余談ですが、お母さまがロシアからウクライナにいられていますよね。お母さまはロシア国籍のままですか。

○アンナ 母はロシア国籍のままです。母に対して、役所からは永住の一時の許可書という面白い書類が出ています。ウクライナの国籍を取ろうと思うと、何度も住民登録で役所に通ったり、様々な手続きが必要なので、それは母にとっては無理です。

戦時中に生まれた戦争の子どもというようなステータスがあつて、そういった人は一定の補償が受けられるのですが、母はロシア国籍なので、それもいまは受けられません。その代わり年金はもらっていますし、健康診断が無料で受けられるとか、そういう補償はあります。

○川野 ロシアから年金が出ているのだと思いますが、その年金額というのは、ウクライナの年金額と比べていかがですか。

○アンナ 母は先ほど言った永住一時許可書というものに則って、ウクライナの年金をもらっています。しかし、額は最低年金レベルです。その金額は、母の過去の職歴とかに基づいてウクライナの法律で計算すると、そうなるようです。

そのもらっている年金の額というのは、母の医薬品代とかおむつ代とか、そういうもので消えてしまいます。母の生活支援ということで、ゼムリャキから

も時々支援をもらっています。でも、ロシアの年金のほうが、もちろんもっと金額的には多いです。

○川野 アンナさんの国籍は、いまウクライナだけですか。

○アンナ はい、私はウクライナ国籍のみです。

○川野 長い間ありがとうございました。

ナディーヤ・マカレーヴィチ氏（女性）

実施日：2010年5月26日

（インタビューの趣旨について説明・録音についての承諾 約5分）

○川野 それでは、氏名、生年、人種、宗教、最終学歴、出身地、プリピャチを離れた時の家族状況、そして現況という順番で、教えていただければと思います。

○ナディーヤ 名前はナディーヤ、名字はマカレーヴィチです。誕生日は1955年11月2日、現在54歳です。人種はウクライナ人、宗教はキリスト教の正教です。学歴は中等専門教育です。

○川野 昨日お話を伺った方と同じですね。中等専門教育というのは、学校を出た後の専門学校のことですね。

○通訳 はい、専門学校卒業ですね。

○ナディーヤ リヴィウ州スロピータという村の生まれです。そこの村の学校に行きまして、その後、リヴィウ市で医療専門学校に入学しました。その医療専門学校を卒業した後、当時、卒業後の派遣制度というのがあって、就職先を国から指定されましたので、私の場合はジトール州の北のほうのプリールキという村に行くことになりました。

○川野 そのプリールキに行かれたのは何年ですか。

○ナディーヤ 1974年です。その村での勤務先というのは、ジトール州立の精神神経治療所という施設です。医療専門学校卒業時の資格は準医師という資格ですが、その準医師という資格で、いま言った治療所の検査室で働きました。

○川野 その治療所ではどういった検査をされていたのですか。

○ナディーヤ 一般的な臨床検査、血液検査、尿検査、生化学検査といった検査です。そこで1980年まで仕事をしておりまして、1980年にプリピャチに引越すことになりました。

私は1975年に結婚して、1980年にはすでに家族があり、息子が生まれていました。ちょうど1980年頃、その息子が学校に上がるという時にあつ

ていました。私たちの住んでいたプリールークイ村は、最寄りの学校が自宅から18キロぐらい離れているということで、小学校1年生の息子がそこへ一人で通うというのは大変だし、特に冬場は体力的にもきついというので、プリピャチに引っ越すことを考えました。私たち家族は町を見に行き、気に入りましたし、そこで仕事も見つかるだろうということでしたので、一家で1980年にプリピャチに引っ越しました。

○川野 なぜプリピャチに引っ越そうということを考えられたんですか。

○ナディーヤ ウクライナのほかの町も知っているのですが、まず他の町は規模がそんなに大きくないということ、それからプリピャチの住民はちょうど自分たちの当時の年齢と同じくらいの若い人が多かったということが引っ越し先をプリピャチに決めた理由です。当時、町の平均年齢は26歳と言われていました。また、住居の配給が早くされるというふうの特典がありましたし、そのほかの生活環境も整っていました。

○川野 プリピャチの町は、最初に見られた時、どういった感じでしたか。

○ナディーヤ とても気に入りました。

○川野 当時、町の建設中だったと思うのですが、1986年当時から比較して考えて、1980年に町はどの程度できていましたか。

○ナディーヤ 実際、1980年から86年までの間に建設されたものもたくさんありますので、そういう意味で違いはありましたが、1980年の時点でも、すでに非常に緑が多く、花が多くて、きれいという印象でした。子どもたちも多かったです。

○川野 1980年にプリピャチに行かれて、その後のナディーヤさんの仕事、またご主人の仕事の内容を教えてください。

○ナディーヤ まず主人のほうに先仕事が見つかりました。主人は建築関係の仕事で、建設現場で建設作業やコンクリートの作業をする仕事でした。私のほうは、町で建設の仕事はたくさんあったのですが、医療関係者のほうは基本的にあまりなかったので、仕事を見つけるまでにちょっと時間がかかりました。しかし、知り合いのついでで、当時、警察で反アルコール中毒キャンペーンというのがありまして、警察の中で、酩酊した人を保護して、まともな状態に戻す

部屋がありましたので、その仕事をしておりました。

息子は 1985 年にブリピャチの小学校に入学しました。つまり 1980 年の時点では、まだ息子は小さかったわけですね。

○川野 お子さんはその息子さんお一人ですか。

○ナディーヤ いいえ、1985 年の 10 月に娘が生まれております。息子は 1978 年生まれです。

事故が起こった時に私と子どもたちはアパートにおりましたが、夫は 5 号炉、6 号炉の建設現場で作業中でした。主人は、その 4 月 25 日の夜から夜勤だったので、何かの理由で少し早めに仕事が終わって、ちょうど事故の起こったのは午前 1 時 20 何分なのですが、その前に仕事が終わって、家に帰らずに、原発のそばの貯水池に釣りに行きました。

○川野 ご主人は何を釣りに行ったんですか。

○ナディーヤ ナマズとかですね。しかし、その日主人が釣ったナマズは、もちろん食べておりません。

○川野 ご主人のお生まれは何年ですか。

○ナディーヤ 1954 年 11 月 12 日です。

○通訳 では、ご主人は事故を目撃されたんでしょうか。

○ナディーヤ いえ、ちょうどその釣りをしている時に、原発に背を向けるかたちで座っていたので、爆発そのものは目撃しませんでした。ただ、その事故が起こった時、ピカッと光って、ドンというような雷鳴のような音がしたので、彼は「これは雷雨になるのかな」と思って空を見上げますと、雲もないということでした。彼は、自分はコートを着ているから雷雨が来ても問題ないな、と思っただけで、その時の光や音が事故の爆発とは思わなかったのだそうです。

○川野 その事故当時、ナディーヤさんはどうされていましたか。家で寝ていらっしゃいましたか。

○ナディーヤ ちょうど、その事故のあった時間に娘が目覚まして、私はおむつを替えたり、水を飲ませたりして、また寝ました。その時、何も事故のことは気が付かなかったのですが、後で思い起こしますと、ちょうどその事故の時間ぐらいに娘が目覚ましていました。

○川野 ご主人は魚釣りの最中でしたよね。釣りが終わってからご自宅に帰ってこられたのですか。

○ナディーヤ 夫は友達と一緒に釣っていたそうですが、その後も釣りを続けて、家には朝 9 時ごろに帰ってきました。ナマズなどを持って帰ってきましたね。

夫は家に帰る途中で道が封鎖されているのを見て、事故だったというのを聞いたのですが、どういう事故だったかということまでは何も知りませんでした。

○川野 それは 4 月 26 日の早朝の話ですね。

○通訳 はい。26 日の午前 9 時に夫が帰ってきて、そういった話をしました、ということですね。

○川野 その後、避難までの様子を教えてくださいませんか。

○ナディーヤ 9 時に夫が帰ってくる前、息子は土曜日の授業があったので、学校に行きました。私はその後、窓をふいたりとかバルコニーの掃除をしたり、普通に家事などをしていました。

○川野 息子さんは小学校に行かれたのですね。

○ナディーヤ しかし、息子が学校に着きますと、学校では外に出ないようにと言われて、ヨード剤が配布されて飲まされました。

○通訳 息子さんは、そのまま家に戻られたのでしょうか。

○ナディーヤ いえ、息子は好奇心の強い子だったので、その時点で原発に砂を運んでいるヘリコプターがあったのですが、それを見て、どこから来ているんだろうと興味を持ってしまったのでしょうか。息子は、ヘリコプターが川岸で砂を集めて、それを運んでいるというので、その現場まで見に行ったのだそうです。

もちろん、そのヘリコプターは事故現場を往復しているわけですから、その時点でかなり放射能に汚染されていたはずですが、その時には誰もそのことは言ってくれませんでした。もちろん、事故現場に近づいたところで息子は追い払われましたけれども、その現場に彼が、どのぐらい近くまで行って、どのぐらいの時間いたかというのは正確には分かりません。

○川野 ご主人は朝 9 時頃に帰ってきて、その後、26 日はどうされていました

か。

○ナディーヤ 夫が家に帰ってきて、まず「原発で事故があったから窓は閉める。自分は寝るから」と言いました。しかし、実はその前の日、私は土曜日だから家の掃除の手伝いをしてください、余計な釣りとかはせずに早く家に帰ってくるんですよ、と主人に頼んでいたのです。それなのに、夫がそういう態度だったもので、私は当然、怒りました。でも、夫はそのまま寝てしまったのです。

○川野 ご主人が、原発事故があったとおっしゃったのは、途中の道路が封鎖されていたりした状況から、原発事故があったというふうに理解されたのですか。

○ナディーヤ はい、そうです。封鎖にあたっていた人たちが、事故があったから、その先には行けないと言ったのだそうです。しかし、どういう事故だったかについては何も言われませんでした。

○川野 公共のラジオなどで、原発事故があったというような情報を知ったのはいつですか。

○ナディーヤ 事故に関して公共のラジオなどの放送は、27日の「避難があります」という放送まで何もなかったわけですが、その26日のお昼12時ごろ、私は、当時の制度で、赤ちゃんのいる家はミルクの配給があったので、保健所にあるミルクキッチンという配給施設に行きました。そうすると、その保健所の救急受付の所に人がたくさんいました。また行く途中の道を洗浄車が走って洗浄しているというのを見て、そういうことはそれまでにまったくなかった事態ですので、これは何かあったと緊張しました。

○川野 それが26日ですね。

○通訳 はい、26日です。

○ナディーヤ そのほかに、保健所に入ると、普通、職員は白衣を着ているわけですが、その日は青だったり緑色だったり、普段とは違うものを着けているのが目に入りました。また、そのミルクの配給を受ける時に、どういう役職の人か分からないのですが、保健所の職員が、そこに来ていた母親たちに「手をよく洗って、子どもたちにたくさん水を飲ませなさい」という指示をしていま

した。

○川野 26日、息子さんは学校から帰られて、ヘリコプターの様子を見に行ったりしたということでしたが、ほかのご家族はどういう状況で過ごされましたか。ご主人は朝9時から寝られて、何時ごろに起きられて、食事をみんなで食べてというような、その後の1日のご家族の様子を聞かせて下さい。

○ナディーヤ 私はそのミルクの配給を受けた後、家に帰って、まず窓を閉めて、ぞうきんをぬらして、床掃除をしました。そうしていると、息子が帰ってきました。普段、息子は学校から家に帰ったら、何か食べて、すぐに出て行くのですが、その日は出て行くなと言って、家に閉じ込めました。もちろん息子は嫌がったのですが。そして、26日は一家全員、それ以上、外には出ませんでした。

夜になると、大人に対しても、ヨード剤の配給がありました。その時、私は赤ちゃんの娘はどうなんだ、そのヨード剤は飲まなくていいのかと、最初、持ってきた人に聞いたのですが、その人は、自分は知らないというので、私は近所の小児科の先生に相談しました。その小児科の女医さんは「分かりました。赤ちゃんにも飲ませましょう」と言って、娘にもヨード剤の配給がありました。

○川野 ご主人は、26日は休みだったわけですね。

○ナディーヤ はい、夜勤明けで、夫は28日から出勤の予定でした。

○川野 では27日の1日の様子を教えていただければと思います。

○ナディーヤ 27日になりますと、子どもたちは家から出さないようにして、私は食べるものを買うためにお店に行きました。

夫のほうは、事故についてのニュースも何もなく、どう対処すればいいものかわからなかったので、その当時、行政の組織で、市の執行委員会という組織がありまして、そこに行ってみるということで行きました。しかし、夫がそこで言われたのは、家に帰って指示を待ちなさいということでした。情報はすべてラジオで知らせがありますから、というふうに言われました。

○川野 では、ご家族の皆さんは、自宅で待機されたということですね。

○ナディーヤ その後、ラジオで避難に関する放送がありました。

○川野 そのラジオ放送は何時ごろですか。

○ナディーヤ 正確な時間は覚えていません。

○通訳 12時頃だったのではないのでしょうか。

○ナディーヤ おそらくそのころでしょう。12時か、13時、そのぐらいの時間だったと思います。

その放送があって3日間の避難ということでしたが、子どもが小さかったので、少なくともその間だけでもいるものを用意しておかなくては、ということで、着るもの食べものの準備をしました。

○川野 その避難するよという放送があってから、実際に避難するまでの時間は何時間ぐらいありましたか。

○ナディーヤ 自分たちの家族は避難の中でも最初に近いグループだったので、15時ごろには出発したと思います。

○川野 ご家族4人で行かれたのですね。

○ナディーヤ キエフ州のイヴァンキウ地区にオブホビチという村があります。

○川野 そこにご家族4人で向かわれたのですか。

○ナディーヤ はい。しかし、そこに長居はしませんでした。小さな娘が牛乳を飲まず、食べ物の問題があったので、その村ではなかなか長居は難しいのではないかということで、私の親戚がリヴィウ州にいたので、バスの運転手に「このままキエフまで乗せていってもらえないか」と頼みました。運転手は「いや、それは許可がいるから」と言って、いろいろ話が長引いたのですが、それでも何とかバスに乗せてもらえて、夜の10時ごろキエフに着きました。

○川野 4月27日の夜10時にはキエフに入ってこられたのですね。

○ナディーヤ その日は、翌朝10時以降しかリヴィウ行きの列車がなかったので、キエフ駅で一晩過ごして、翌朝にリヴィウ行きの列車に乗って親戚の家へ行きました。

○川野 では、4月28日にリヴィウに行かれたのですね。

○ナディーヤ はい、4月28日の夕方にはリヴィウに着いておりました。

○川野 28日から、いつまでリヴィウに滞在されたのですか。

○ナディーヤ 私たちは1986年の11月にキエフでアパートの支給がありましたので、それまでリヴィウの親戚の所におりました。夫は1986年の6月から、

またチェルノブイリに行って、現場での作業をするようになったのですが、その時主人は、2週間はチェルノブイリ現場で働き、2週間はわれわれ家族の住んでいるリヴィウのほうに来る、というような仕事の体制でした。

○川野 ご主人は6月からいつまで事故処理作業にあられたのですか。

○ナディーヤ 1993年の2月まで、そのゾーン内での仕事をしておりました。私もキエフで仕事を始めたのですが、最初の仕事はキエフ市郊外のリハビリセンターのような所でした。

○川野 11月にキエフに帰ってこられたのですね。

○ナディーヤ そうです。1986年11月にキエフに戻ってきました。そして、私の最初の仕事はキエフ郊外のリハビリセンターでしたが、そこは通勤に時間もかかり、特に夫がいないとき、子ども2人を私が面倒みなければいけないので、それが少し大変だということでキエフ市内の仕事に変わりました。

○川野 その後は、ずっと同じ職場ですか。

○ナディーヤ 1994年までその同じ仕事をしておりましたが、健康上の理由で辞めざるを得なくなりました。自分でも体の具合が悪いから辞めるというのは嫌で、初めはフル勤務からパートの勤務に替わって仕事を続けていたのですが、やはり1994年になりますと体力的に無理ということで仕事を辞めて、後障害者認定の申請をし、認可されました。

○川野 障害者資格は何級ですか。

○ナディーヤ 2級障害です。

○川野 その後ナディーヤさんは仕事をされていないということですね。

○ナディーヤ 実は、私は甲状腺だけでも3度手術をしています。特に二度目の手術の後、放射線治療を受けまして、それも後で調べると必ずしも必要なかったということですが、その放射線治療をやったことで髪の毛も抜けたりだとか、唾液が出なくなってスープも飲めないとか、いろいろ副作用がありました。

そんな時、知人にドクターノーナという薬がいいですよと勧められて、最初は半信半疑だったのですが、それを飲んでみると、私の場合は結構効いています。以前は高血圧で上が200を超えているようなこともあったのですが、3カ月ぐらいすると下がってきて、体調はだいぶその薬のおかげで改善しました。

ただ、家でじっと座って何もしていないというのではなく、この1年半ぐらいはボランティアの仕事をしたり、週に何回かは外に出て何かするようにはしています。

○川野 甲状腺のほうは、いまいかがですか。

○ナディーヤ いまは比較的いいのですが、まず1995年に、こちらの病院で甲状腺の癌が見つかりまして、全摘されました。その後、放射性ヨウ素治療法とかも受けましたが、2004年にジュノーの会がここでやっていた甲状腺検診に来まして、その時にリンパ節への転移が発見されたんですね。そのリンパ節を除去する手術をまた受けて、その後に先ほど言った放射線治療などもしたのですが、翌年、2005年に、またここでジュノーの会の検診を受けると、また新たな転移があったということでした。それも手術を受けました。

○川野 ジュノーの会には武市先生という方がいらっしゃいましたか。

○ナディーヤ そうです。

○川野 武市先生がされたのですから大丈夫です。

○ナディーヤ いま、また検査をするように言われています。超音波診断だとも出ないのですが、血液検査をすると、どうも結果がよくないらしいので、モスクワに行って検査をするように言われています。

○通訳 どういう検査でしょうか。

○ナディーヤ 素人に分かるように言うと、放射性ヨウ素とかを使わない検査の仕方だと言われています。血液検査の結果が悪くないというので、もっと精密検査が必要だということなんですね。でも、超音波では分からないといわれました。

○川野 1994年の2月まで、ご主人はチェルノブイリ関係の仕事をされていたということですが、それ以後、ご主人の仕事の状況を教えていただけますか。

○ナディーヤ その後、主人はキエフで仕事をしていたのですが、3カ月ぐらい前から重い病気にかかっています。

○川野 1994年以降、ご主人はキエフでも建設関係のお仕事をされていたのですか。

○ナディーヤ はい、同じ建設の仕事です。

○川野 その建築関係の仕事を、ごく最近までされていたということですね。

○ナディーヤ はい。しかし、彼は通信教育で技術専門学校をキエフで卒業しました。というのは、それまでやっていたのは、わりと単純労働で体にもきつい仕事内容だったので、ランクアップして、もう少し楽な建設関係の仕事をしておりました。

○川野 息子さんとお嬢さんの現在の様子を少し教えていただけますか。

○ナディーヤ 息子は健康状態があまりよくありません。家族の中で彼が一番最初に健康状態が悪くなってきたのですが、病名としては自律神経失調とかで、症状としては肝臓が良くないだとか、意識を失うことも時々あります。脳の検査をしますと、特別腫瘍ができていとかではないけれども、機能障害があるということで時々治療を受けています。

娘は4年ぐらい前から気管支ぜんそくがありまして、やはり障害者認定を受けています。

○川野 息子さんとお嬢さんは、いまお仕事は何をされているのですか。

○ナディーヤ 2人とも仕事はしています。娘は去年大学を卒業して、なかなか仕事が見つからなかったのですが、やっと就職して先週から働いています。

○川野 わかりました。いま、だいたい基本的な状況をお聞きしたのですが、小宮山さんの方から、ここまでで聞きたいことはありますか。

○小宮山 まずプリピャチに居住する時に、原発に関する情報で何か得ていらっしゃいましたか。例えば、注意事項を示されたり、避難場所を指示されたりといったことはありましたか。

○ナディーヤ 私個人は、特にプリピャチに行く前とか、住み始めてから、そういう注意事項を言われたことはありません。しかし、医療専門学校を出ていますので、その時に放射線に関する一般的な情報は聞いておりました。それで、プリピャチから避難する時にも、私と近所のお医者さんは汚染を避けるために、スカーフを頭にかぶったのですが、ほかの人たちは、この暑いのに何でそんなものをしているのというふうな様子でした。

○小宮山 わかりました。では二つ目の質問ですが、事故の情報等はすべてラジオであった、と言われていましたけれども、そのラジオは全土の公共放送な

のか、プリピャチとかだけに限られたローカルな放送なのかを教えてくださいませんか。

○ナディーヤ プリピャチ市のローカルラジオです。

○小宮山 そのラジオからは、後から考えて十分な情報量でしたか。

○ナディーヤ ラジオの情報で、例えば窓を閉めなさいとか、そういうものは何もなかったのです。ただ避難があります、ということだけでした。私が前の日に窓を閉めたり、ぞうきんで外から来た人の靴をふくようにしたというのは、自分の判断でしたことです。

○小宮山 ナディーヤさんは医療従事者だから、ちょっと特殊かもしれませんが、ご自身で被ばく者であるということを実感された時期はいつごろですか。

○ナディーヤ 子どもたちが頻繁に病気になり始めたころだと思います。事故直後はショックが大きかったですし、被災者というふうに分かるのは、自分としても、それを受け止めるのは楽なことではありませんから、やはり健康の問題が出てきたころだと思います。

○川野 それでは、1986年以前と現在について少し教えてくださいませんか。

プリピャチ時代のアパートの状況とか、そういったところを教えてくださいませんか。

○ナディーヤ その事故当時に住んでいたのは1DKでしたが、1986年の夏には、もっと広い4DKのアパートがもらえる予定でした。

○川野 プリピャチでの住居配給が決まっていたということですね。

○ナディーヤ 公の決定というのはまだなかったのですが、内定というかたちで既に決まっていた。息子が通っていた学校も、私たちが当時住んでいた所よりも、夏に移るはずの建物に近い学校に最初から通っていました。

○川野 現在のお住まいの状況を教えてくださいませんか。

○ナディーヤ 現在住んでいるアパートは3DKです。

○川野 3DKにご家族で住んでいらっしゃるのですか。

○ナディーヤ その3DKに私と夫と娘が住んでいまして、息子は最近、彼女が

できたので、家にいることもあるのですが、基本的には彼女のアパートに同棲中です。

○川野 プリピャチ時代、ご主人は建設現場で働かれていて、ナディーヤさんは警察のアルコール中毒者のケアといったような仕事をされていたということでしたが、ご夫婦お二人での収入、また、その月収の額で十分な生活ができたかどうかを教えてください。

○ナディーヤ はい、普通の生活はできていました。

○川野 お二人の収入で十分な生活でしたか。特に貯金ができたとか、少し大きな買い物ができたとか、そういったことはありましたか。

○ナディーヤ はい、もちろんです。例えば、夏には引っ越す予定になってまして、行った先のアパートの家具類、じゅうたんとか照明器具とか、そういうものを買うために貯金もしておりました。もちろん、そのころの社会制度として、店に物があつたから、ぱつと買えるというふうではなくて、時には順番待ちをしなければいけなかったりしたのですが、そういうこともあつて物が買えるように、貯金はしていました。

○川野 当時、車は持っていらっしゃいましたか。

○ナディーヤ いえ、車はありませんでした。その当時は公共交通で、遠距離に行くにしてもバスとか列車、飛行機等が、そんなに高額でなくなく利用できましたので、車を持つとういうことは、その当時、まだ考えておりませんでした。

○川野 プリピャチ時代というのは、だいたい平均的な生活水準だったと思えますか。

○ナディーヤ はい、もちろん当時の生活が平均以下とは思いません。自分たちが普通に生活していくために欲しいと思っていたものは、全部入手できました。

○川野 現在はいかがですか。

○ナディーヤ いまは前より経済状況は悪いです。

○川野 いまは年金での生活をされているのですか。

○ナディーヤ はい、年金ももらっていますが、額は大したことはありません。

○川野 いまはご主人の年金と、ナディーヤさんの年金が主な収入源ということですか。

○ナディーヤ 夫はリクビダートルですので、私より年金額は多いですが、しかし、それも大きな額ではありません。

いま現在私は、市民団体の代表の秘書のような仕事をパートでしています。それはチェルノブイリ連盟という大きい団体です。私たちが生活するには年金だけでは厳しいので、先ほど自分の家にいるだけでは気がめいってしまう、といいましたけれども、多少なりともお金を稼ぐという意味もあって、家の外に出て、そういう仕事をしています。

○川野 いまもらっている収入の何倍あれば十分な生活ができるとお考えですか。現在の生活に不満はありますか。

○ナディーヤ それは一家に必要な収入ということですか。

○川野 そうですね。

○ナディーヤ やはり、いまの収入の3倍以上は必要でしょう。それは、主に薬のお金が必要だからです。というのは、いま現在、必要な薬が自由にお買える状態ではありませんので、薬の値段を見て買うかどうかを決めたり、値段が高ければ、その薬がなしでもいいかどうかを常に考えている状態です。

○川野 国からの補償があると思うのですが、その補償は、いましっかり施行されていますか。

○ナディーヤ 私から見まして、その法律はほとんど機能していないと思います。機能しているとすれば、公共料金が半額というのは、いまでもありますけれども、例えば私の年金額なども、この法律どおりであれば、実際いまの額よりもっと多いはずです。

○川野 公共料金が半額、あと食糧の配給があると思うのですが、それは実行されていますか。

○ナディーヤ その食費手当というのは、私のような障害資格のある被災者であれば、月額350グリブナ、一般の被災者であれば、その半額が支給されます。

○川野 それは、ナディーヤさんにも毎月配給されていますか。

○ナディーヤ いま現在、2カ月分が遅配になっています。

○川野 そういった点が一番不満ですか。

○ナディーヤ もちろんです。私の考えでは、法律というのがある限りは、きちんとすべてそれに則って施行されるべきだと考えているのですが、現実には残念ながらそうはなっていません。

○川野 保養所に行く券が配給としてありますよね。

○ナディーヤ 実質上ほとんどありません。

○通訳 最後に保養に行かれたのはいつですか。

○ナディーヤ 去年ですが、夫と一緒に2週間、自費で行きました。

○川野 どの保養所へ行かれましたか。

○ナディーヤ クリミアですが、もう夏も終わりのころに行きました。その時期を選んだのは、私の場合、あまり光が強いと体に良くないからです。移動にも気を使って、昼間に寝て、夜に歩くというふうにして移動しました。でも、私たちの場合はそうせざるを得ないので、仕方ありません。

このときのクリミアでも、親戚がいるのでそこに行っただけで、保養所に行ったわけではありません。

○川野 いままでお話を聞きして、例えばナディーヤさんは甲状腺、ご子息には自律神経、お嬢さまもあまり体調が良くない、ご主人はシリアスな疾患を抱えている、というようなお話ですが、そういったことはすべて原発事故の影響だというふうに考えていらっしゃいますか。

○ナディーヤ 私はそう思います。その理由というのは、事故前まで夫は非常に健康な人で、こんな人は他にどこを探してもいない、というぐらい健康な人だったのです。主人は、そのように元は健康だったおかげで、発病も比較的遅かったのではないかと思います。また私も、事故前まで、ほとんど病気になったことはありません。

○川野 現在ナディーヤさんは、原子力発電そのものについて、どう思われますか。

○ナディーヤ 私の意見では、原子力発電所は、事故が起こった場合の影響が少なくてすむように、キエフのような大都市あるいはほかの市町村がない所、人里離れたような所につくるべきだと思います。

○川野 ということは、原子力発電そのものに関しては肯定的だということですね。

○ナディーヤ はい、反対というわけではありません。ただ、私の個人的な意見ですが、人が住んでいない所につくるべきだというふうに思っています。

○川野 わかりました。いまの生活と比べてプリピャチで生活の生活は、ナディーヤさんにとってどういうものでしたか。大変楽しかったですか。

○ナディーヤ その当時のことを思い出しますと、もちろん楽しかったと思います。そのころは生活も普通にできていますし、楽しく生活することができました。でも、いまはいつも苦労とか心配とか、そういうことばかりです。

○川野 原発事故さえなければ、プリピャチにずっと住んでおられましたか。

○ナディーヤ そう思います。あの町が気に入っていましたから。川もすぐそばにあり、森もあって、自然が非常にきれいな楽園の一角のような所でした。

○川野 プリピャチ時代で一番楽しい思い出は何ですか。

○ナディーヤ その時の生活丸ごとがそうだと思います。思い返すと、すべてが楽しかったような感じです。

○川野 今日、お話いただいた原発事故にかかわる個人的な体験を、これまで誰かにお話しになったことがありますか。

○通訳 被災者以外の人に話したことがあるか、ということですか。

○川野 はい。あるいは被災者の中でも話すようなことがあれば、それも教えてください。

○ナディーヤ 知人とか親戚などには事故のことを話すことがありますし、いま話したようなプリピャチのことなどは、よく思い出しています。

○川野 事故のことを誰かに伝えなければいけない、というふうに考えますか。

○ナディーヤ はい、そう思います。

○川野 何を一番伝えなければいけないと思いますか。

○ナディーヤ 面白い質問ですね。ちょっと答えを考えてみます。これまで、私自身がそういうふうに取り立てて考えたことがなかったものですから。正直言って、すぐにはなかなか答えられないですね。

○川野 いま一番望んでいらっしゃることは何ですか。

○ナディーヤ やはり、みんなが健康であるということですね。それが一番重要なことだと思います。

○川野 わかりました。私からは最後の質問ですが、1986年にリヴィウとかいろいろな所を回られてキエフに帰ってこられたということでしたね。キエフに帰ってこられて、チェルノブイリ被災者として何か偏見とか差別とかを経験されたことはありますか。

○ナディーヤ 一般的に言えばあったと思います。例えばキエフの人が支給されるはずだったアパートを横取りしたというので、私たちにはなかったですが、聞いたところでは窓を割られたりした人もあるとか、あるいはその後、被災者というのでいろいろ特典があるんだろうとか、そういう嫌みをキエフに元々住んでいた方々から言われたりしたこともあったようです。

○川野 ナディーヤさんが直接、そういったことを言われたことはありますか。

○ナディーヤ 私個人の場合は、被災者は市内公共交通が無料ということで、乗る時に車掌とかに証明書を見せるのですが、それについて、「これは何だ」とか、「なぜこういう証明書をあなたは持っているんだ」とか、いろいろ聞かれて、それに対しては私もかなりきつく答えざるを得なかったですね。

だから、そういう不愉快な対応を受けたくなければ、むしろお金さえあれば公共料金も一般と同じ金額を払いたいぐらいです。

○川野 いまでもそういう偏見や差別的なことがありますか。

○ナディーヤ はい、現在でもあります。

○川野 いまの話は、日本の原爆被爆者も同じようなことをよくおっしゃいます。日本の被爆者は病院での診療・治療が無料です。日本は医療費が高いので、病院で手帳を見せると無料になるのですが、その時に少し嫌みを言われたりする、というような話を聞きます。同じような状況だなと思いました。

○ナディーヤ こちらでは、被災者であっても基本的に医薬品が無料で提供されるということはありません。実質上、どこで治療を受けようとも、治療は自己負担ということになります。どこかで薬の提供があっても、それはまれなことです。

○川野 私からは以上です。大変長い間、ありがとうございました。小宮山先

生から質問はありますか。

○小宮山 先ほどの広島・長崎の続きで、ナディーヤさんはどの程度、広島・長崎の被爆者の実態をご存じですか。何かで聞いたことがある程度なのでしょうか。

○通訳 被爆者の実態というのは、被爆直後、それとも現在の生活状況等についてでしょうか。

○小宮山 現在の状況の方ですね。

○ナディーヤ 私個人は存じ上げておりません。もちろん、そういう広島・長崎で被爆した方々がおられて、現在も日本におられるということは知っていますけれども、具体的にどういう現状かというところまでは、詳しく知っている訳ではありません。

○小宮山 そうですか。では質問を変えますが、ナディーヤさんが持っていた資格制度で準医師というのがありましたが、医師と準医師というのはどういう違いがあるのですか。

○ナディーヤ まず、こちらの制度で言いますと、準医師というのは看護師と医師の間に位置づけられる資格で、医師よりはワンランク下なのです。

大雑把に言いますと、医師は自分で治療方針を決める権限があって、看護師はそれを実施するだけですが、準医師はその中間の位置づけで、つまり一定の問題については、彼らが自分で判断して処置できるのです。ただし、そのほかのことになりますと、やはり医師の許可を得て治療を実施しなければならない、ということになります。

○小宮山 わかりました。ありがとうございました。

○川野 大変長い間、ありがとうございました。

○ナディーヤ どういたしまして。

○川野 われわれはいろいろな話を、いろいろな方にお聞きしているのですが、聞くたびに新しいことがいくつもあって、今回も大変貴重な情報を得ることができました。

○ナディーヤ お話したことは、直接自分とか自分の家族に関する事に過ぎません。

○川野 26日の状況というのは、大変興味深いですね。26日のいろいろなケースを知るといのは、非常にわれわれにとっては有意義です。

27日の状況もそうですが、ある家族はいろいろな情報を知っているし、また別の家族はあまり情報がないまま、ただ公共のラジオで避難しろと言われて行っただけだというように、いろいろなケースがあります。そういった状況をつぶさに収集して、26日、27日の状況というのを、さらにわれわれは詳しく知りたいというふうに思っています。

今日は本当にありがとうございました。どうか健康に留意されて、お元気でいてください。武市先生に、ナディーヤさんにお会いしたということを伝えておきます。

○ナディーヤ 私からも、ぜひ、よろしくお伝えください。

○川野 ありがとうございました。

マリア・ロパーチナ氏（女性）

実施日：2010年5月26日

（インタビューの趣旨について説明・録音についての承諾 約3分）

○川野 まず氏名、生年、人種、宗教等を教えていただければと思います。

○マリア 名字がロパーチナ、名前がマリアです。生まれは1938年5月9日です。

○川野 現在おいくつですか。

○通訳 72歳です。

○マリア 人種はロシア人です。宗教はキリスト教、学歴はロシアのシベリアにある、クラスノヤルスク教育大学の卒業です。生まれはクラスノヤルスク地方にある、アスキスというシベリアの南のほうの町です。

○川野 クラスノヤルスク地方で一番大きな町はどこでしたかね。

○通訳 クラスノヤルスク地方の大きな町はクラスノヤルスク市だと思います。

○マリア 大学はクラスノヤルスク市の教育大学を卒業したのですが、それまではアスキスで生まれ育って、そこで学校まで卒業してから、クラスノヤルスクの大学へ行きました。大学卒業後、クラスノヤルスク 28 という当時の軍事機密都市で仕事を始めたのです。

○川野 クラスノヤルスクは軍事都市、機密都市ですよ。

○マリア 当時、クラスノヤルスク 28 という名前がついていました。そこで大学卒業後、幼稚園の仕事に就きました。

○川野 クラスノヤルスク 28 はトムスクとはちがうですね。

○マリア 違います。四つの別々の町です。チェリャビンスク、トムスク、クラスノヤルスクと、すべて別々の軍事機密都市でした。

○川野 トムスクはトムスク 7 という名前でしたかね。

○マリア 正確にはわかりません。

○川野 わかりました。

○マリア クラスノヤルスクについては 28 というナンバーが付いていました。

私は1970年までクラスノヤルスクで仕事をしておりました。1970年段階で、すでに結婚して、息子と娘の2人の子供がいました。

○川野 いつどこで結婚されたのでしょうか。クラスノヤルスクで結婚された、ということでしょうか。

○マリア 結婚したのは1969年です。1970年に、主人の転勤でプリピャチに行きました。

○川野 ご主人は何の仕事をしていましたか。

○マリア クラスノヤルスクでの主人の仕事は、地下の秘密工場で核爆弾を作る仕事でした。

○川野 爆弾の設計をしていましたか。

○通訳 職名がちょっと分からないのですが、設計ではないみたいです。

○マリア 1970年に主人の転勤でプリピャチに行きまして、そこで主人は中央改修部という原発のセクションで働いていました。その当時はまだ原発の建設が始まったばかりですので、その原子炉の部品の製作とか、原発部品の製造の仕事をしていました。

私もプリピャチの幼稚園に就職して、従来どおりの幼稚園の仕事をしていました。

○川野 幼稚園の仕事はすぐに見つかったのですか。

○マリア はい。夫の場合は特に上からの指令でプリピャチに転勤したわけですので、すぐにアパートの支給もありまして、そこに引っ越して、すぐ仕事を始めました。

○川野 その後はご夫婦それぞれ、1986年まで同じ職に就かれていたのですか。

○マリア はい、事故まで同じ職場でそれぞれ仕事を続けていました。

子どもたちはプリピャチで最初、幼稚園に通っていましたが、その後、学校に上がりました。

○川野 お子さんはお二人ですか。

○マリア はい。しかし1979年に主人が病気で亡くなりました。病名は脳腫瘍らしくて、主人は被ばくをするようなクラスノヤルスクの地下の工場で仕事をしていて、発病したのではないかと思います。

○川野 わかりました。

○マリア そして、私は1982年に再婚しました。二度目の夫はチェルノブイリ原発の建設部の運転手という仕事をしておりました。この二番目の夫も原発の建設当初から、ずっと同じ仕事をしておりました。

○川野 1982年に再婚されたということですが、1986年当時、その再婚相手と亡くなったご主人との間のお子さん2人という状況だったのですか。

○マリア 1986年になりますと、再婚の夫との間に、もう1人子どもが生まれておりました。その三番目の娘は1982年の生まれです。ですから、1986年の事故当時は一家5人だったわけです。

一方、前の夫との子である上の娘は、1986年の事故当時は、いまのサンクトペテルブルクの大学に入学してプリピャチにはおりませんでした。

○川野 ということは、1986年の4月当時は家族4人ということですね。

○マリア はい、事故当時は4人ですね。そして、4月26日、事故当日は土曜日で休みでした。いつも休みの日の朝には事故当時4歳だった下の娘を連れてケーキやお菓子を買いに行くのが習慣だったので、この日の朝も同じように買い物に行きました。

そのお菓子を買って家に帰る途中に、知り合いの原発で働いている女性に会ったのですが、彼女は、小さい娘の手を引いて私が歩いているのを見て「何をしているの、こんなところで。事故があったんだから、すぐうちに帰りなさい」と言ったのです。私たちはお菓子を捨てて、まっすぐ家に帰りました。

○川野 その出来事は何時ごろですか。

○マリア 朝9時ごろだったと思います。

○川野 それまでは、マリアさんは事故があったことを全然ご存じなかったのですか。

○マリア この日、夫は出張中で家におりませんでした。

○通訳 ご主人はどこにおられたのでしょうか。

○マリア よく分からないのですが、そんなに遠方ではないと思います。プリピャチの近郊のどこかの村に車で行っておりまして、家にはおりませんでした。

○川野 その後、ご自宅に帰られてからどうされたのですか。

○マリア 息子は私たちが家に帰った時点では学校に行っておりました。でも午後3時ぐらいに帰ってきて、「外に出たらいけないと学校で言われたよ」と言っていました。学校に軍人が来て、事故があったので学校の外に出ないようにという指示があったそうです。

○川野 その当時、息子さんは何歳だったんですか。

○マリア 14歳でした。お菓子を買いに連れて出た下の娘は、当時4歳でした。その後は一家3人、窓を閉めて家の中にこもっておりました。

○川野 26日はそのまま一日中家におられたのですか。

○マリア 26日の夕方に夫が出張から戻ってきました。夫が帰ってきた時に、息子が学校でこういうふうと言われたよ、と夫に話したのですが、夫はあまり深く考えずに、下の娘と一緒に外に散歩に行っていました。

○通訳 なぜご主人は息子さんの言うことを聞かなかったのでしょうか。

○マリア 私はよく分かりません。

27日になりますと避難がありますというラジオ放送がありました。身分証明書等を持って外に出なさいと、バスが来ますからという内容でした。

○川野 バスに乗られたのは何時ごろですか。

○マリア プリピャチを出発したのが午後5時ごろだったと思います。ポリスケという町まで行きました。ポリスケに着いたのは夜の11時ぐらいだったと思います。

○通訳 ポリスケの到着が少し遅い気がしますね。

○川野 ポリスケってプリピャチから近い所ですよね。

○通訳 はい。いまはもう人がいなくなっている所だと思います。

○マリア キエフ州のポリスケ地区の中心地です。

○川野 4人でそのポリスケへ避難されたということですね。

○通訳 はい。

○川野 夜11時ごろにポリスケに着かれて、その日はどうされたのですか。

○マリア 下の娘は、着いた頃にはもう夜も遅いので「眠い、眠い」と言って泣いていたのです。その様子を見て現地の女の人が、「うちに来なさい、泊めてあげますよ」と言われて、私たち家族と一緒にその人の所へやっかいになりま

した。

○川野 それからの 28 日以降の話をお聞かせください。

○マリア われわれの泊まり先が決まった時点で、夫はそのまま、また仕事があるというのでプリピャチに戻っていきました。ほとんど戒厳令状態で、男性は皆、緊急事態であるから現地へ戻るようにと言われて、私と子ども 2 人だけが残りました。その後、私たち 3 人はポリスケで 1 カ月ぐらい過ごしました。

○川野 ポリスケでの生活はいかがでしたか。印象深いこととかありますか。

○マリア ずっと私も子どもたちも体調が大変悪かったです。私はのどがひりひりと渴くような状態で、一晩中起きて水を飲んでいるような不眠状態でした。脱力感、めまい、吐き気など、大変体調が悪かったです。

○川野 その 1 カ月間はポリスケの同じ所へ住んでおられたのですか。

○マリア ポリスケにいた間に、プリピャチから移住してきた人はみんな血液検査をしなければいけないと言われて採血されました。

○通訳 その検査結果はどうだったのですか。

○マリア 検査結果では「心配ない」という言い方でした。でも、ずっと私は体調が悪かったです。夫は、その 1 カ月間ずっと事故処理作業をやっていたのですが、家族のことも放っておくわけにはいかないというので、彼がやっと許しをもらってポリスケまでやってきました。再会した夫から、「どうだ、行き先は決まったか」と聞かれたんですが、もちろん、私たちはそんなことはやっている余裕がありませんでした。夫の親戚はロシアのヴォロネージという所にいるんですが、それ以外、行けるといっても思い当たらなかったのです。

そこで、夫の兄弟へこのまま子どもたちを原発の近くにさせろわけにはいかない、せめて子どもたちだけでも引き取ってくれという電報を打ちました。夫の兄弟は、その電報を見て、車ではるばるポリスケまで来てくれたのですが、彼らがポリスケに着いたのは夜中でした。

子どもたちを夫の兄弟がヴォロネージに車で連れて行ってくれたので、私は夫と一緒にポリスケに残ったのです。そして、私と夫と一緒にプリピャチに行きまして、ガレージに置き去りにになっていた自分たちの車を出して、それに夫婦二人で乗ってヴォロネージに行きました。子どもたちから遅れて 1 週間ぐら

い後のことでしょうか。

○川野 ご家族全員がヴォロネージについたのは、6月ごろということですね。

○マリア 6月の初めぐらいだったと思います。私はヴォロネージの役所に行きまして、こういう事情があるのだけど、何か支援を受けられないか、という話をしたのですが、役所では、「いや、われわれのほうでは何ともできません」という答えでした。仕事も急には見つからないし、アパートも無いしということで、困っていました。

役所でそういった話を聞いてから、夫の親戚の所へ戻りまして、当時の大統領のゴルバチョフ宛てに、「これからどうして生活していけばよろしいのでしょうか」というような陳情書を書きました。一方、夫は私たちが親戚の所に落ち着いたのを見届けて、またチェルノブイリに戻っていきました。

そして、また私がヴォロネージの役所に行って再度陳情したところ、役所側から、それならヴォロネージから 100 キロぐらい離れているパヴロフスクという町の子どものサナトリウムで働かないか、と言われました。それは小児麻痺の子どもたちなどを保養するサナトリウムでした。私たち3人はそこに行って、息子はパヴロフスクの学校に通いながら、そのまま7カ月ぐらいパヴロフスクにいました。その間、私はそのサナトリウムでの仕事をしておりました。自分は寮に住んでいたのですが、息子と娘はサナトリウムの部屋で生活していました。

そして12月ぐらいだったと思いますが、また夫がやってきました。そして、キエフでアパートの支給があったから一緒に行こうということで、一家4人でキエフに行きました。

○川野 ということは、キエフに来られたのは1986年の12月で、パヴロフスクに住んでいたのは、実質6ヶ月くらいということですね。

○マリア 私たち家族がキエフに着きますと、われわれみんなに健康検査を受けなければならないという指令書が来まして、病院に行って血液検査をしました。その結果は良くないと言われました。娘はヘモグロビンの値が低いということで、すぐに入院ということになりました。

○川野 1986年以降、ご主人は、お仕事の方はどうされたのですか。

○マリア 主人は、事故後 15 年間ぐらいは事故処理の仕事をしておりました。私と子どもたちはキエフのアパートに住んでおりましたが、夫は交代勤務態勢で、2 週間出勤、2 週間休み、というかたちでした。

私は、やはりキエフで幼稚園の仕事を始めましたが、私も子どもたちも体調が悪く、年に 4 回ぐらい入院をしておりました。主人も体調はよくなかったのですが、働いていました。しかし主人は、腎臓に癌が見つかった時点で、ゾーンでの仕事はよくないということで辞めることになりました。

○川野 それは事故から 15 年後ということですね。

○マリア それで主人は手術を受けました。その後は、ずっと家族の誰かが入院を繰り返すような状態でした。

息子は 25 歳の時に脳卒中の発作がありました。息子はその時、私たちと同居していたのですが、普通に仕事から帰ってきて床に着いて、私は別の部屋で寝ていたのです。朝、息子が起きてこないというので様子を見に行くと、もうけいれんをしていて、舌を出して、目を見開いて、という恐ろしい状態でした。それで医者を呼ぶと、すぐに入院したほうがいいということでした。

娘も健康状態が大変悪くなっておりました。娘の場合は甲状腺の肥大とか、ヘモグロビンの値がずっと低いといった症状、心臓の障害、それから神経疾患もありました。

私もよく入院していました。私も、例えば結節性の甲状腺腫の第 3 段階です。それから脳の循環障害とか高血圧、心臓障害、リウマチ性の関節炎ですね。家族全員がそういう状態で、誰かは家にいないで入院しているという状態が続きました。

○川野 マリアさんは何回ぐらい入院されましたか。

○マリア 年に 4 回ぐらいです。家族が交代で病院に入っているような状態ですね。

○川野 甲状腺肥大のほうはいかがですか。

○マリア 医師からは手術しろと言われたのですが、私は断りました。自分で薬草を飲んでます。治療としてやっているのはそれだけです。

○川野 病状はいかがですか。

○マリア 自己免疫性甲状腺炎と甲状腺腫ですね。でも最初は第3段階と言われたのが、いま第1段階になっています。

○川野 だいぶ改善されたんですね。

○マリア この甲状腺のことで10年ぐらい病院で治療を受けていたのですが、全然よくなりませんので、これは自力で治療をしようと思って、薬草療法に切り替えました。

娘は18歳の時に松果体のう胞というのが発見されました。いまのところは手術とかはできないということで薬の注射で治療をしています。

○川野 薬物療法ということですね。お嬢さんはたしか1982年生まれでしたね。

○通訳 はい。

○川野 ということは、いま28歳ですか。下の娘さんは、いまもそういった治療をされていて、お仕事のほうはされていないのですか。

○マリア 下の娘は障害者資格を認定されておりまして、働いておりません。息子も障害者になっています。

○川野 障害者資格は何級ですか。

○マリア 娘は2級で、息子は3級です。私も2級障害者です。夫は3級障害者です。

○川野 一番上のお嬢さんがサントペテルブルクにいらっしゃるということですよ。その後、上のお嬢さんはどうされているのですか。

○マリア 彼女はいまもサントペテルブルクに住んでいます。彼女は幸いに、そういう事故の影響は受けなかったわけで、大学を卒業して結婚をして、そのままロシアで暮らしています。

○川野 時々キエフの実家へは帰ってこられますか。

○マリア もちろんです。われわれがサントペテルブルクに行くこともありますし、いまも6月に上の娘の所へ行こうと準備しているところです。

○川野 そうですか。

○マリア 今回は息子と二人で行くつもりです。上の娘は仕事もあるし、いま私たちのいるキエフには来れないというので、ぜひサントペテルブルクの方へ来てくれと言っています。だから、行って会うつもりです。

- 川野 上のお嬢さんはロシア国籍なのですね。
- マリア そうです。
- 川野 ここまで小宮山さんから何か質問はありますか。
- 小宮山 取りあえず、いまのところはないですね。
- 川野 そうですね。では、プリピャチ時代の話、そして現在の状況等をお聞きしたいと思います。まずプリピャチ時代の住居の状況を教えていただければと思います。
- マリア プリピャチのアパートは3DKでした。
- 川野 3DKに4人あるいは、下のお嬢さんが生まれてからは5人で住んでおられたということですね。
- マリア 上の娘がサンクトペテルブルクの方へ出ていたので、住んでいた人数は4人ですね。いまのキエフのアパートも3DKですが、そこに7人で住んでいます。私と娘とその夫、息子とその嫁、息子と嫁の間の孫と、これで7人です。
- 川野 プリピャチ時代の話ですが、当時の月収は覚えていらっしゃいますか。
- マリア 私は月に105ルーブルでしたが、夫は300ルーブルぐらいだったと思います。
- 川野 この100ルーブルというのは、幼稚園の先生の平均的な給料だったのですか。
- マリア はい、そうですね。
- 川野 ご主人の300ルーブルというのは、その仕事の内容では平均的なものだったのですか。
- マリア はい。
- 川野 当時、プリピャチで最も給料が高い職種というのは何だったのですか。
- マリア そういうことには特に興味を持っていなかったもので、分かりません。
- 川野 では、お二人で400ルーブルの月収があったということですか。家族を養っていくには十分な額だと考えておられましたか。
- マリア はい、当時としては普通に生活できていました。
- 川野 当時、車はお持ちでしたか。

- マリア はい、ガレージも車もありました。
- 小宮山 それはプリピャチに入ってから買われた車ですか。
- マリア そうです。買ったのは、ちょうど事故の前ぐらいでした。
- 川野 当時、車はおいくらぐらいしましたか。
- マリア 7,500 ルーブルぐらいです。
- 川野 高いですね。現在の様子をお聞きしていいですか。
- マリア 私の年金額は、いま月に1,000 グリブナです。主人は2,000 グリブナ、娘が700 グリブナという金額です。いま息子夫婦とも同居ですが、息子夫婦と私とは、別の財布に分けています。息子が年金2,000 グリブナ、息子の嫁は3,000 グリブナです。
- 川野 息子さんのお嫁さんも、年金をもらっているのですか。
- 通訳 そうですね。被災者の場合、老齢年金の支給開始年齢がすごく低いですね。
- 川野 ご主人は2,000 グリブナでしたよね。
- 川野 息子さんのお嫁さんのほうが、額が高いですね。何か基準があるのですか。
- 通訳 お嬢さんのご主人は年金が5,000 グリブナだそうです。事故前に働いていた人であれば、その時の給料が算出の基礎になると思います。
- 川野 わかりました。いま給付されている額で生活するというのは大変ですか。
- マリア はい、大変です。薬品にお金がかかるので、私の年金はほとんど薬品代になってしまいます。
- 川野 月にいくらぐらい薬代は必要ですか。
- マリア 給付されている年金額より多いと思います。
- 川野 マリアさんの年金額よりもご自分の薬の額が多いということですね。
- マリア 例えば、肝臓疾患の薬、ゲボディフという商品名の薬は、一箱760 グリブナします。
- 川野 それは1カ月分ですか。
- マリア 1カ月分ですね。90カプセルで760グリブナです。

○川野 それはマリアさんが、いま飲まれている薬なのですか。

○マリア はい。私は C 型肝炎なので、医師の処方での薬もやむなく飲んでいるのです。そのほかにリウマチとか関節の薬代を入れますと、もう 1,000 グリブナでは足りなくなってしまう。そのほかにも心臓障害の薬も飲まないといけないので、薬代は高額になります。

○川野 ご主人もお薬はたくさん飲まれていますか。

○マリア はい、そうですね。彼も血圧の薬がかなり必要です。

○川野 マリアさんは血圧の薬も飲まれるのですか。

○マリア 私も血圧は高いです。下が 150 から上が 250 ぐらいです。夫は 160 から 260 ぐらいで、娘の場合は逆に低血圧で 60 から 80 ぐらいです。事故前までは、家族は誰も特に病気はなかったのです。

○川野 では、甲状腺の肥大にしてもその他の病気にしても、ご主人の病気にしても、原発の影響だというふうに考えておられますか。

○マリア はい、そうですね。それまでは誰も病気なんかしていませんでしたし、胃が痛いとは、どういうことかも分からなかったぐらい健康だったのです。いまは、どこもかしこも痛いというような状態で、どこから治していいものか分からないぐらいです。

○川野 いまの生活の中で、一番不満な点は何ですか。

○マリア 年金が安いことです。支給される額が少ないことが一番不満です。

○川野 月に一世帯で生活するのに、どのぐらいあったら足りですか。

○マリア 仮に私と夫と娘、それぞれ 5,000 グリブナずつぐらいもらえていれば、何とか生活できるのではないのでしょうか。

○川野 ご家族 3 人で 15,000 グリブナですか。ほかに、補償のほうはいかがですか。

○マリア 食費の補助というのは、月に 300 グリブナぐらい出ているのですが、それぐらいのものです。

○川野 食費の補助は一人 300 グリブナですか。

○マリア はい、一人当たりです。

○通訳 先ほど、午前にお話を伺った方は 350 グリブナと言われていましたね。

○川野 そうですね。

○マリア 食費の補助は被災者で、かつ障害者の人は 300 グリブナですが、そうでない一般障害者はその半額になります。そのほかは何も補償というようなものはありません。

○川野 公共料金が半額というのがありますよね。

○マリア はい、50 パーセントの公共料金割引がありますが、それぐらいです。

○川野 保養券はどうですか。

○マリア ここ何年も保養券はもらえていません。順番待ちは行列になっているような状態ですが、国から配給される保養チケットは少ないので大変です。月に一度ぐらいは、被災者には無料で提供すべき薬品のリストというのが出て、そこから提供されると言われるのですが、リストに載っているのは安くて、あまり役には立たないような薬品だけですので、結局、薬は自分で買うことになります。しかも、そういう無料で提供される薬品を受給しようと思えば、行列に 3 日ぐらいは立っていないといけないという大変な状況です。

○川野 プリピャチ時代は楽しかったですか。

○マリア いまよりは良かったですよ。

○川野 プリピャチの町について、どういう印象をお持ちですか。

○マリア いい印象です。

○川野 もし原発事故がなければ、プリピャチにずっと住み続けたと思われませんか。

○マリア もちろんです。

○川野 では、あの原発さえなければ、という思いは強いですか。

○マリア 以前はそれこそいろいろな思いがあって、よく泣いたりしていました。いまは、それほどでもありません。

○川野 原子力発電について、どう思われますか。

○マリア 否定的です。

○川野 無くなってしまったほうがいいですか。

○マリア 原発は無ければ無いほうがいいと思います。

○川野 私のほうからは最後の質問です。1986 年にキエフに移住されて、その

直後からチェルノブイリ被災者だということで差別、あるいは偏見とかを受けたことはありますか。

○マリア はい。いろいろと、ぞっとするような言葉を浴びせられたようなこともあります。キエフのトロリーバスに乗っている時に、女の人が「プリピャチから来た人たちが、まだその辺にいるよ」というような言い方をされたことがあります。

○川野 アパートの配給のことで、何か嫌な思いをしたことはありますか。

○マリア はい。配給時に「自分たちが待っていたアパートも家具も、全部あなたたちが持って行ってしまって、もう何も無くなる」とか、大変不愉快なことを言われたことがあります。

○川野 直接、そういったことを言われたことがありますか。

○マリア はい、直接に言われたことがあります。

○川野 そのほかに何かそういった差別的なことはありますか。

○マリア 学校でも子どもたちがそういうことを言われたことがあります。

○川野 昔のことを思い出させて悲しい気持ちになられたのではないかと思います。申し訳ありませんでした。

○小宮山 お孫さんや後の世代の方に、マリアさんが残したい事柄、伝えたい事柄がありましたら教えてください。

○マリア こういう恐ろしい惨事が、今後、どの国でも起こることがないようにということです。プリピャチで起こったことが二度と起こらないように、原子力発電をしっかりとコントロールしなければいけないということです。というのは、チェルノブイリ原発では運転に関しても、非常にずさんなことがまかり通っていましたから。

夫がプリピャチに来て最初に住み始めた時に、自分が働いている所を見せてやると言って、プリピャチから現場のほうに一緒に行ったのですが、その時に驚いたのは、原発施設が町からとても近いということです。もう 5 キロもないぐらいで、「なぜ町と原発の間がこれだけしかないの」と夫に聞くと、「知らないけど、ウクライナではこうなんだろう」と言っていました。「いや、こういう原発のそばとかだったら、普通は 30 キロぐらい町との距離を空けてつくるんじ

ゃないの」と言って、その時から私は気になってはいたんです。

○川野 それは原発の危険性とか、放射能のリスクがあるというのをご存じだったからですか。

○マリア クラスノヤルスクにいた時に、夫の働いていた工場というのは地下の工場で、しかも人の住んでいる所から遠方にあるという職場だったのです。それに比べると、ここは原発のすぐそばに自分たちの住む町もあるというので、私は「ちょっと怖いんじゃないの」と言ったら、夫は「いや、大丈夫だよ、怖がることはないよ」と言ったんですが、やはりこのような事故が起こってしまったわけです。

クラスノヤルスクでは、原発はもっと厳密な管理が行われていたのですが、ブリピャチでは建設現場にもどンドン人が接近していけるような状態で、私もびっくりしたのです。

○川野 ウクライナでは、そうだというふうにご主人は思われたんですね。

○マリア 私はすぐに、こんなに原発がすぐ見える所に町をつくるというのは、最初からおかしいと思ったのです。

○川野 最初のご主人はロシアの方だったのですか。

○マリア はい、そうです。

○川野 いまのご主人はどちらの方なのですか。

○マリア いまの主人もロシア人です。チェルノブイリ原発を建てたのがロシア人だったら、こんなことはなかったかもしれない。

○一同 (笑)。

○マリア ほんとですよ。ウクライナ人が手抜きをしたのがよくなかったと思います。原発と町との距離についてですが、私みたいな素人でもそう思いますし、事故そのものも、やはり現場で働いていた人が、きちんとした権限のある人ではなかった、本来やるべきことをやっていたというのが原因だと思います。

○川野 事故の原因は人為的ミスだというふうに使われますか。

○マリア はい、そう思います。

○川野 大変長い間、ありがとうございます。どうかご健康に気をつけられ

て、元気で過ごされてください。

○マリア 皆さんも関心を持っていただいて、そういう研究をしていただいていることに大変感謝します。

○川野 ありがとうございました。

© 2012 : 広島大学平和科学研究センター
730-0053 広島市中区東千田町1-1-89
TEL : 082-542-6975
FAX : 082-245-0585
E_mail: heiwa@hiroshima-u.ac.jp
URL: <http://home.hiroshima-u.sc.jp/heiwa/>